
ザ・クイズショウ～ひぐらしのなく頃に～

黒狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ザ・クイズショウ〜ひぐらしのなく頃に〜

【Nコード】

N1606U

【作者名】

黒狐

【あらすじ】

ザ・クイズショウ

クイズ番組に出場する解答者が自らの夢を叶えるため、クイズに挑戦する。しかし、その出される問題とは解答者の心に秘密を抱えているものに関する。司会者によってその秘密は暴かれていく。それはだれにも止めることは出来ない。そして番組の裏で動いているものとは!? 『ひぐらしのなく頃に』と『ザ・クイズショウ』などのクロスオーバー小説

『ひぐらしのなく頃に』を読んでいる人や、読んだいない人？なども
わかりやすく書いているつもりなので大丈夫です！ひぐらしを知っ
ている人は全然OKです

『ひぐらしのなく頃に』と『ザ・クイズショウ』などのクロスオー
バー小説

第一話前編 始まりの扉！司会者と神のデスゲーム

第一話 前編 始まりの扉！司会者と神のデスゲーム

「はあ、はあ、はあ」

暗闇の山の中をがむしやりに走っている少年がいた。その道の左側には道では無く暗くて下が見えない崖があった。隣には人が自分と同じく走っていた。ぼやけていて姿は見えないが影は見えていた。バンツ——

遠くから銃声が聞こえた。そしてその銃弾はその少年の片足を直撃した。

「くっ！！」

その少年はバランスが保ちきれず、左側の崖へと転落した。

「うわああああああああああああ——」

一人の男は叫びながらベッドから飛び起きた。その声は部屋中に響き渡った。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

そこは白い壁で囲まれていて、窓が一つしかない殺風景な部屋だった。窓といっても天井の近くにあって、高すぎて外が見えないようになっている。そこには洗面台とベッドが置かれていた。例えるなら檻がない牢屋のようだ。その男は上下が白色のパジャマを着ていた。

ガチャン——

部屋の扉が開いた。そこには緑色の髪をしていてスーツを来た女性立っていた。

「・・・時間よ」

「・・・はい」

そしてベッドから降りて部屋を出た。そして薄暗い廊下を白色の

パジャマを着た男とスーツを来た女とスーツを来た男が歩き始めた。三人の足音は廊下中に響き渡っていた。

「このノートに名前を書かれた人間は死ぬ」……死神リユークが人間界に落とした「デスノート」を拾ったのは、成績優秀な高校生・夜神 月だった。半信半疑ながら恐る恐るそのノートを使った月は、実際に人の死を目の当たりにしてしまい、恐怖を覚える。しかし、自分が理想とする社会を作る為、デスノートを使い、凶悪犯を粛正していく決心を固める。一方、犯罪者が次々と死んでいく不可解な事件を解決するため、世界の迷宮入りの事件を解決してきた「L」という謎の人物が動き出した。TV中継でLと名乗る、リンド・L・テイラーがTV中継で殺される。だがそれはLではなく極秘の犯罪者であった。さらに日本の関東地区にすることが判明。Lは「キラを絶対捕まえる」と宣言した。

キラは日本捜査本部の関係者と考えたL。極秘で行うためFBIに日本に捜査官派遣を要請。捜査の対象は月も含まれていた。

月はデスノートを使いバスジャックの事故を演出し、FBIの一人レイ・ペンバーの名前を突き止めた。その後キラ事件に関係しているFBI全員を殺した。

Lは姿をさらし、少人数のキラ捜査班と合流した。キラと接触したFBIをレイと判明。レイが死の直前まで捜査していた夜神家と北村家を疑い、盗聴器と監視カメラを設置するが、逆に捜査員の疑いを晴らす。

Lは完璧すぎる月を疑い、月と同じ大学に偽名で入学し、月に私はLだと名乗り出る。

そして第二のキラ、あまねミサ弥海砂がさくらTVに4本のビデオテープを送り、TV放送される。

Lは月の高い推理力を買い、捜査本部と合流させた。

ミサは月の家に押しかけて月に協力することを約束した。

月は、自分の通っている東応大学から帰宅していた。前に黒いスーツの男が立っていた。その男は月を見ていた。そして近づいてきた。
(ん？なんだあの男)

「夜神月さんですね？」

その男が月に話し掛けてきた。

「はい、そうですが・・・あなたは？」

「私、黒狐テレビのものです」

「あの、僕に何か？」

「夜神月さん・・・あなたをザ・クイズショウにご招待いたします」

そして、その男は内ポケットから招待状を差し出した。そこには
THE QUIZ SHOWと書かれたロゴが書かれていた。

「くくっ、テレビ出演だってよ、ライト」

月の後ろに憑いているリユークが話し掛けてきた。

(・・・・・・・・)

それに構わず月はその招待状受け取った。そして裏面を見た。

招待状

今回、黒狐テレビ

「ザ・クイズショウ」の解答者に、
日本全国一億三千万人の中から

見事選ばれました。

よって当番組にご招待させていただきます。

黒狐テレビ「ザ・クイズショウ」

「あの・・・すいません、僕は――」

「あなたには叶えたい夢があるのじゃないのですか？」

そして本番当日となった。

スタジオでは拍手の練習などの前説を行っていた。

「本番15秒前」

放送室には白いパジャマ姿の男に話し掛けていた女性が中心の席らへんに座っていた。その女性の首から下げているテレビ局での身分証明であるものに、ディレクター 園崎詩音と書かれていた。

「園崎さん頼んだわよ」

後ろから声が聞こえた。そして詩音は振り返った。

「任せてください、瀬川さん」

詩音は軽くウインクをした。

瀬川と呼ばれた女性はザ・クイズショウのプロデューサーである

瀬川真希だった。

「本番10秒前」

ブザーとともにその声は聞こえてきた。

「8、7、6、5秒前」

スタジオと放送室にそのカウントダウンは響いた。そして辺りが暗くなっていた。

スタジオの裏で座っている真っ黒のスーツを着ている男がいた。

その男は詩音に話し掛けられていた白いパジャマの男だった。そして顔を上げて立ち上がって歩き出した。

「4、3、2、1」

そしてON ALRと言う文字に赤い灯りが付いた。

そして番組が始まった。

真っ暗の中にステージの中央の奥に白い灯りが当てられた。そこには一人の黒いスーツの男が立っていた。

「人は誰でも華やかな夢に憧れる。世界中を旅したい者。大きな家に住みたい者。はたまた大金を手にしたい者。全ての夢の終着点。それがこの、ザ・クイズショウ――」

その言葉が終わるとさまざまな色の光がいろんな所に当てられる。観客からは、拍手の音がし始めた。黒いスーツの男はステージの前へと移動した。

「さあ、今週もやって参りましたザ・クイズショウ。本日も一時間ぶつとうしの生放送でお送りいたします。司会はわたくし、MC・M A E B A R A。そして今週の解答者はこの方、大学生、夜神月――」

後ろの扉が開いた。そして白い煙の中から夜神月が姿を現した。そして観客席から拍手が聞こえてきた。

月はそこで一礼してからステージの前に向かって歩き出した。そしてテレビ画面に夜神月のプロフィール映像が流された。

『夜神月。大学生。東京生まれ。中学時代、テニスの全国大会の中学生チャンピオン。中学三年の大会の表彰式以降はテニス大会に出場せず。そして夜神月の助言のおかげで保険金殺人事件を見事解決。他にも数件の事件も解決。全国共通模試では毎回一位を獲得している。今年、東応大学に入学。そして現在に至る』

プロフィール映像が終わると観客席からは拍手が聞こえてきた。

「どうですか？夜神さん、初のテレビは？」

「はい、少し緊張しています」

「いやー、すごいですね。テニスの中学生チャンピオンに全国共通模試で一位とは」

「どうも」

「さらに名探偵ですよ皆さん」

「やめてくださいよ前原さん」

観客席からはまた拍手が鳴り始めた。

「しかもお父さんが警察官」

「はい、僕は父をとても尊敬しています」

「こんな子供を持たれてお父さんはとても喜んでいらっしやいますよ」

「いえ、そんな」

「それではここでルールをおさらいしましょう。このザ・クイズショウは全七問のクイズによって構成されます。クイズに正解するたびに獲得賞金は上がっていき、全七問を突破した時点で、あなたの獲得金額は一千万。その後、あなたはその一千万を賭けてドリームチャンスに挑戦することが出来ます。そのドリームチャンスに挑戦し、そして見事、クリアすることができればあなたが手にすることができるのは夢。文字通り、一つだけ夢を実現することが出来ます。よろしいですね？」

「はい」

「それではお伺いしましょう。あなたの夢は何ですか？」

月は息を吸い込んで口を動かした。

「この日本を平和にしてもらうために警察にこの番組の最高限度の金額を寄付することです」

「「「おおー」」」

観客席からは拍手まで聞こえてきた。

「承知致しました。あなたがドリームチャンスをクリアしたあかつきには我々が用意できる金額一億円を警察に寄付することを誓いましょう！」

「「「「おおー」」」」

さつきよりも声と拍手の音が大きく聞こえてきた。

「それでは、夜神月が日本の平和をかけて、このザ・クイズショウに挑みます。イツツ、ショウタイム」

前原が両手を高く上に上げた。そしてふたりは握手を交わした。

そして番組はCMに入った。

番組はCMが明けて再開された。月と前原の二人はステージの真ん中のテーブルに座っていた。

「それでは第1問」

「1881年、板垣退助を総理として結成した党は次のうちどれ？」

A、立憲改進黨 B、自由党 C、立憲帝政党 D、進歩党」

「Bの自由党」

「正解です！では第2問

衆議院の任期の期間は何年？」

A、2年 B、3年 C、4年 D、5年」

「Cの4年」

「正解です！では第3問

キラの名前の由来は次のうちどれ？」

A、殺し屋 B、救世主 C、殺人者 D、犯罪者」

「Aの殺し屋」

前原は少し間を置いた。

「・・・正解です！いやー、しびれるなー、絶好調じゃないですか」

「いや、それほどでも」

「さすが全国模試1位！」

「やめてくださいよ、前原さん」

「ちなみに夜神さんは今、世界で起こっているキラ事件ですが何か推理でもされているんですか？」

「前原さん、こんな事テレビでは・・・」

「そうですね、下手したら殺されるかもしれないですしね。失礼しました」

観客席からは、笑い声が聞こえてきた。

「いえ、でも今回は全然わかりませんよ」

「そうですか。夜神さんでもわからないんですね」

「はい、残念ながら」

「分かってもこんなところで言えないですよー」
観客席からは笑い声が聞こえた。

「それでは第4問、まずはこちらをご覧ください」

「なっ！」

テレビ画面には月がデスノートで殺したレイⅡペンバーが映っていた。

番組のスタッフは少し慌てていた。

「あれ、こんな問題あったっけ？」

スタッフは他のスタッフに聞いたり、自分の持っている今日の進行の内容がかかっている紙を見たりしていた。

放送室でも騒ぎは起きていた。

「園崎さん……もしかして問題……変えた？」

瀬川が聞いてきた。

「……みなさん、前原に合わせてください」

詩音は後ろを振り返らずに画面を見ていた。

「園崎さん、あなた何がしたいの？」

「瀬川さん、私はただこの番組を面白くしたいだけですよ？そこで3カメツ」

詩音は会話を止めて指示を出した。

瀬川はただ詩音を見ていた。

「夜神さん、この人に見覚えはありますか？」

「……はい」

（どういうことだ。なぜ画面にこの男が）

月の表情が変わった。

「こちらの方はキラに殺されたFBI捜査官のレイⅡペンバーさんです。夜神さん、これはラッキー問題ですよ！

バスジャックされたバスにレイ||ペンバーさんと一緒に乗っていた人物は次のうち誰？

A、L B、MC・MAEBARA C、夜神月 D、夜神総一郎

「前原さん・・・この問題、個人的すぎませんか？」

「そう、ですね」

「もし僕が答えたとしても前原さんはこの答え知っているんですか？」

「はい、私はあなたの全てをしています」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

（どうする・・・正解を言うか、間違えるか・・・・・・・・。わざと間違えると逆に怪しまれる。いや、僕はただ会っただけ・・・・・・・・。くそっ、どうすれば・・・・・・・・。）

「さあ、夜神さん、答えをどうぞ！」

「・・・・・・・・C」

「正解です！そうですか夜神さんってバスジャックに遭われたんですね」

「はい、犯人は何か幻覚を見てバスから飛び降りて死んでしまったんですが」

「そうでしたか・・・・・・・・もしかしたらそのバス・・・キラが乗っていたのかもしれませんがね」

（くっ、こいつ・・・・・・・・。）

「さあどうでしょう――」

「では第5問、まずはこちらをご覧ください」

前原は月が喋っている最中にもかかわらずに次の問題へいった。

解答者席の前に上に赤い布が敷いていて物が乗っている机が運ばれてきた。

「――っ！」

（ま、まさか！）

その机には、黒いノートがあった。月のとは違い、表紙には何か

の文字が書かれていた。月のとは違うが、明らかに似ていた。

前原は運ばれてきたものの横に立った。

「この中に第二のキラが殺しに使っていたとされる物があります。それはこの中のどれ？」

A、黒いパソコン B、黒いノート C、黒い携帯 D、黒い手帳」

観客席からはどよめきが聞こえてきた。

「園崎さん！いい加減に——」

「瀬川さん、私はただ面白くしているだけですよ？何か問題でも？」

「あなたね——」

「せ・・・瀬川さん！！警察からお電話です」

後ろのスタッフが言ってきた。

（来た！）

詩音はすぐにスタッフの方向を向いた。

「貸してください」

すぐに詩音はイスから離れて電話を取った。

「さあ、夜神さん・・・お答えください！」

「ふ、ふざけないで下さい！警察でもわからないのにわかるわけないじゃないですか！！」

「果たしてそうでしょうか？一部の人はわかるでしょう？ねえ、夜神さん？」

「くくく・・・」

月の後ろでリユークは笑っていた。

「・・・」

「あれ、答えられないんですか？」

「前原さん、あなたはわかるのですか？」

「だから言っているじゃないですかー、夜神さん・・・私はあなたの全てを知っています」

(・・・なんだ、なんなんだこいつはっ！)

「・・・・・・B」

「正解です！なんだ知っているじゃないですか、夜神さん」

「いえ、ただの勘ですよ」

「もしかして、夜神さんがキラだったりしてー」

「だから――」

「では第6問

キラの正体とは次のうち誰？

A、L B、MC・MAEBARA C、夜神月 D、夜神総一郎」

「なっ！」

バンッ――

月は席から立ち上がった。

「ふざけるのもいい加減にしてください！！もう僕は付き合っていないられません。帰らしてもらいます！」

月はステージから降りたようとした。

「小せーな、夜神さん」

「何？」

月は振り返った。

「小せー小せー、ねえー皆さん。小さい男ですねー、夜神月って。番組始まって以来ですよ。こんな小さい男は」

「だから・・・正解などここには――」

「だから何回も言わせないで下さいよ。私はあなたの全てを知っています。いいましたよね・・・夜神さん」

前原は少し笑みを浮かべた。

「・・・・・・」

そしてCMに突入した。

第一話前編 始まりの扉！司会者と神のデスゲーム（後書き）

ザ・クイズショウ〜ひぐらしのなく頃に〜をお読みいただきありがとうございます！

作者の黒狐です。

やっと大学生になり、自分用のパソコンが手に入ったので、はじめました。

このストーリーは大体は出来上がっています。

問題は私が書いているものが皆さんに伝わるかどうかですWWW
デスノートを組み込んだのには理由があります。

1、この小説を思いついたのが2、3年前だから

2、デスノートにはまっているから

です！

一、二話は他の作品のキャラクターを持ってこようかと思っています。
す。

一週間に1、2回更新できればいいなと思っています。

アドバイスや感想などを言ってもらえると、とてもうれしいです。

ぜひ気軽に感想を書いてください！

お願いします！

こんな素人な黒狐に、これからお付き合いください。

第一話後編 始まりの扉！司会者と神のデスゲーム

「CM、30秒です」

「何なのこの問題は！今すぐに問題を戻しなさい！」

放送室では詩音と瀬川が向き合っていた。

「無理ですよ、出しちゃったんですから。」

詩音は笑みを浮かべた。

「もうすぐCM明けます」

「いいから問題を戻しなさい！！」

「10秒前、9、8、7・・・・・・」

「園崎さん！！！」

詩音は立ち上がった。

「どうするんですか？放送事故でも起こしたいのですか？」

「5秒前、4、3」

「つ、続けて」

詩音は笑みを浮かべた。

「2、1」

そしてCMが明けた。

「さあ、夜神さん。答えをどうぞ！」

（どうする。・・・・・・くそっ、どうすれば）

「早く答えてくださいよ。全国模試一位なんですよ？」

「・・・・・・C」

「はい？」

前原は月に耳を傾けた。

「C」

「正解です！」

観客席からのどよめきが大きくなった。

「なんだー、知っているじゃないですか、夜神さん」

「はあ、はあ、はあ・・・・・」

「では第七問

第二のキラの正体とは次のうち誰？

砂
A、
L
B、
M
C・
M
A
E
B
A
R
A
C、
夜神総一郎
D、
弥海

• • • • •

「どうしました？ 夜神さん」

「ふっは は は は は は は は は は は」

月は席から立ち上がった。前原はその姿をただ見ていた。

「はあ、はあ、はあ……答えはDだ。Dの弥海砂だ」

振り返って前原を見てから答えた。そしてにやりと笑った。その顔はいままでの優等生の顔ではなかった。人を殺したときのような顔だった。

「・・・正解です！おめでとうございます。一千万円獲得です！」

前原は立ち上がって拍手をした。

「さあ、夜神さん・・・あなたはこの一千万円を賭けてドリームチヤンスに挑戦することにできますが、どうしますか？」

「叶えてやるよ、僕の本当の夢を!!」

（僕が勝つ。僕は新世界の神だ！）

前原は少し笑みを浮かべた。そして前原は大きく息を吸い込みス
テージの前に向かいカメラに指を指しながら叫んだ。

「ドリームチャイニーズ！」

その言葉を言い終ると音楽が鳴り始めた。前原はその音楽に合わせて踊り始めた。

月はその踊りを睨みながら見ていた。そしてCMに入った。

「それではもう一度伺います。夜神月さん。あなたの夢は、何ですか？」

「夢を変えます。僕が・・・いや、キラが望む新世界を作ることだ・・・」

にやりと月は笑った。

「承知いたしました。夜神さんがドリームチャンスをクリアした暁には、私たちが黒狐テレビが勢力を上げて、夜神さんをかくまうこと、黒狐テレビで4時間ぶち抜き、キラの特番をオンエアすることを約束します」

「……………」

「ついにきましたね。ドリームチャンス。どうです今のお気持ちは？」

「・・・ふふ、クリアするに決まっているだろ。僕は新世界の神？？」

「問題、Lの本名は次のうちどれ？」

A、L∥Wammy B、L∥Lawlirt C、L∥Aib
er D、L∥Ruvie

「……………」

（こ、この中に答えが……………Lの名前がっ！）
しばらく沈黙が続いた。

「この中に正解はあるのか？」

「あるに決まってるじゃないですか。クイズですよ。夜神さん」

「……………」

「難しいですか？……………難しいですよ。それじゃあ、奥義でも使いますか？」

「……………ああ」

「奥義です！」

画面に以心伝心、召喚、導きの手のアイコンが並んでいた。

「ルーレットスタート！」

その上を光が回り始めた。そして月はボタンを押した。光は召喚の上で止まっていた。

「召喚！」

月の後ろの扉からは何かの人の仮面をかぶった男がいた。白いシヤツを着ていて、青いズボンをはいていた。その横には、茶色のスーツを来た人がいた。

「なっ！」

「ご紹介しましょう、Lさんと月さんの父親の夜神総一郎さんです」
観客席は、ざわつき始めた。そこにはひよっとこのお面を付けた人とスーツの人が立っていた。

「な、なぜLが……」

（ま、まさかそんなはずはない。ありえないっ）

「それではLさん、ヒントをお願いします」

「やはり月くんがキラでしたか」

「そうだ、僕はキラ。そして新世界の神だ！」

「ラ、ライト……」

総一郎は驚いていた。

「父さんなら分かってくれるだろう？今の世界ではキラが法であり、キラが秩序を守っている。もはやキラは正義、世界の人間の希望だ。キラが現れ、戦争はなくなり、凶悪犯罪者がほとんど死に、世界の犯罪は七割減少した。まだ世の中は腐っている。人間は幸せになることを追及し、幸せになる権利がある。しかし一部の腐った者の為に不意に、いとも簡単にそれが途切れる。悪は……腐ったものは……なくすしかない……。悪い人間は裁かれる……。人に害を与える人間も裁かれる。そして人は正しい生き方に気が始める。世の中が変わってくれば、人間も変わってくる……優しくなれる。それでも悪事をはたらく者は人間失格。僕がノートを手にしたときに思ったんだ。僕がキラとしてやるしかない……僕に与えられた使命だと。もしもここでキラがいなくなったらあの腐りきった世界に戻ってしまうんだ。弱者が虐げられる世界に。さあ、L。僕に君の本名を教えろ。そうすれば君の存在が許される。英雄として永遠に語り継がれていくだろう」

「月くん……私はそんな英雄などいません。決着をつけ

ましよう・・・キラかLか、どっちが正義かという事を」

そして総一郎が月に近づいた。

「ライト、お前は父さんなら分かってくれるだろうと言ったが・・・私にはお前の正義は全くわからない」

「・・・・・・・・」

（言ってもわからぬ馬鹿ばかり・・・・・・・・）

「さあ、夜神さん・・・答えをどうぞ。あなたの、夢の為に――」
月はうつむいていた。

（四分の一・・・・・・・・ただそれだけの確立でこの世界が決まるんだ。そう・・・・・・・・僕にとってはたやすいことではないだろう。

僕が正義なんだ！僕こそが神なんだ！）

月は顔を上げた。

「愚かな答えだ、L。答えは・・・・・・・・Aだ」

前原は笑みを浮かべた。

「・・・・・・・・残念！・・・いやー、残念でしたね夜神さん。あなたは正義ではなかった」

「そんなはずはない、僕が正義なんだ・・・・・・・・僕が・・・僕が・・・・・・・・」

「！・・・・・・・・くっ・・・あっ・・・・・・・・うつ・・・・・・・・はあ・・・

あっ――」

前原は頭を押さえて倒れこんだ。

周りはざわついた。放送室でもみんなが釘付けになった。

前原の頭の中に何かが映った。

「じゃあーじめるよ――ナ、一世――の――り物語を」

誰かが白いワゴン車の上に乗っていた。後ろには夕焼けで辺りがオレンジ色に染まっていた。太陽の前にいたので姿は影でしか確認できなかった。辺りは何かの山に囲まれていた。

「うつ・・・あつ・・・はあ、はあ・・・くっ」

前原はまだ頭を押さえ続けている映像が放送室に流れていた。

「し、園崎さん、どうすれば」

スタジオにいた新人のアシスタントディレクターの新堂守がピンマイクで詩音に話し掛けてきた。

「そのまま続けてください・・・ふふっ」

詩音は笑みを浮かべた。

「くっ・・・あつ・・・はあ、はあ、はあ・・・」

そして前原は立ち上がった。

「あー、あまりにも馬鹿らしくて頭がくらくらしちゃいましたよ」

「何？」

「夜神さん、あなたは簡単に仲間の弥さんを裏切りました。だからあなたは負けたんです・・・Lとの勝負に」

（ど、どうすれば・・・！！）

月はカメラを向いた。

「ミサ・・・こいつらを殺せ・・・今すぐ殺すんだ！」

「ラ、ライト・・・」

「・・・夜神さん、弥さんは残念ながら見ていませんよ。弥さんは黒狐テレビの違うスタジオにいます。それにあなたは弥さんのことを仲間とっていない」

「ああ・・・そうさ、ミサはただの駒にすぎない」

「夜神さん・・・あなたがLに負けた敗因は・・・信頼できる仲間がいなかったことです。夜神さんは自分のことを評価しすぎている。自分こそが一番だと・・・本当の仲間と言うのは何があっても無条件で味方になってくれる、家族同然の存在なんです。仲間に相談すれば一番いい未来にたどり着ける可能性があります。」

あなたはこれまで家族と言う仲間助けられて生きてきた。途中までは一番いい未来を手に入れてきた。だがあなたは自分の才能だと勘違いしてここまで来た。デスノートと言う殺人兵器の力に負けて・・・・・。夢というものは仲間や家族の力を借りて叶えるものなんです。Lも警察と言う信頼できる仲間を手に入れた。それが勝利へと繋がったのです。仲間と協力しながら手に入れる・・・それが夢なんです・・・・・なんつってー」

いい終わると顔の表情をころっと変えてステージの前へと向かった。

「今回の解答者、夜神月は残念ながら夢を実現することはできませんでした。次週、自らの夢に挑むのは果たして・・・誰なのか？」

そしてカメラに指を差した。

「あなたの夢を、叶えます」

観客席からは拍手が鳴り始めた。そして前原はステージの最初に出てきたステージの後ろの扉から出て行った。

月とLと総一郎は立ったままであった。放送が終わると警察が月を囲んだ。そして月の手に総一郎が手錠をかけた。総一郎の目からは涙が流れていた。

「午後8時58分42秒・・・・・大量殺人容疑で・・・・・逮捕する・・・・・」

月はうつむいていた。そしてたくさんの警察の人に連行された。

Lは解答者席に座っていた。

(仲間・・・・・か・・・・・)

そしてLはスタジオから出て行った。

「園崎さん・・・あなた神にでもなったつもり？ 私たちが誰かを裁くことは許されないのよ」

詩音はイスから立ち上がった。

「いいえ、ただ番組を面白くただけですよ、面白かったでしょ？
川瀬さん？」

「あなたね——」

「ぼ、僕は面白かったと思いますよ」

「久しぶりにどきどきしたし・・・な」

川瀬が話している時に他のスタッフが言ってきた。

「お疲れ様でした・・・川瀬さん・・・ふふっ」

そして詩音は笑みを浮かべて出て行った。

夜神月がパトカーに乗るところを詩音は局の二階から見ていた。

「園崎さん」

後ろから新堂が話し掛けてきた。

「どうしました？」

「あの、どうしてLをスタジオに連れて来れたんですか？」

「ふふっ、それはね」

「せ・・・瀬川さん、警察からお電話です」

後ろのスタッフが言ってきた。

（来た）

詩音はすぐにスタッフの方向を向いた。

「貸してください」

すぐに詩音はイスから離れて、電話を取った。

「すいません、今から言う番号にかけて下さい」

そして電話を切ってからすぐに詩音の携帯電話が鳴った。

「席を外します」

そういつて放送室から出て行った。

「もしもし、Lにかわって下さい・・・いるのでしょうそこにLがしばらくして違う人が電話に出た。」

「Lです」

「今から真実を全て放送します。私たちに協力してくれませんか？
ぜひスタジオに来て下さい。お待ちしております。」

「で協力してくれたわけ」

「なぜ月さんはあんな挑発に乗ったんでしょうか？」

「キラは、いや、夜神月は・・・幼稚で負けず嫌いだからじゃないかな」

月に乗せたパトカーは走り始めた。

「あと一つだけ、なぜ月がキラって言うことが分かったんですか？」

「うーん・・・企業秘密、ふふっ、お疲れ」

そういつて詩音は歩き始めた。新堂はその詩音の背中を見ていた。

そして月は牢屋に入れられていた。その横の牢屋には弥海砂が入っていた。

「ミサ・・・ごめん・・・僕・・・全てをやり直そうと思う。だから今度は仲間になってくれないか？」

「・・・」

海砂からの返事はなかった。

「レム・・・ミサの・・・デスノートと僕に関する記憶を無くしてくれ・・・」

しばらくしたら思ってもいなかった人物が返事を返した。

「ライト・・・ミサは・・・怒ってなんか・・・いないよ・・・
レム、私からデスノートに関する記憶だけ消して・・・ノ

ートの所有権を放棄する」

「いいのか……ミサ……」

「うん、いいの……ライト……できたら私を新しいライ
トの彼女にしてください……」

牢屋にボタンという音がした。そして海砂は何もしゃべらなくな
った。

「あ……ああ……リユーク……俺もだ」

月の目から涙がこぼれ落ちた。

「くくく……本当にやるのか……」

「ああ……」

「はいよ……楽しかったぜ、ライト……」

そうしてリユークは月の後ろか壁から消えていった。

牢屋にはまた、ボタンという人が倒れたような音がした。

前原は朝と同じ部屋で上下白いパジャマを着て、ベッドに座って
うつむいていた。

「……くっ……あっ……うつ」

前原はベッドから床へ落ちた。

「あっ……うつ……あああ——」

前原の頭の中に何かが映った。

圭一は目の前の黒い服を来た茶色の髪の少女に手を差し出していた。
後ろには夕焼けで辺りがオレンジ色に染まっていた。気付けば白い
ワゴン車の上にいた。周りはゴミの山で囲まれていた。そして小さ
な手が前原の手の上に置かれた。さらにまた小さい手、次はすこし
大きな手を置かれてこう言った。

「――境遇を察しなかったことを仲間として――恥じるよ――
――もちろん――が相談しな――を許すよ。それは――が打ち
明けるに足らなかった存在じゃなかったと言うことだからね。その
未熟さは私たちの責任。――」

「レ――人殺しだよ。きつとみんなに迷――かけるよ」

黒い服の少女は泣きそうになっていた。

「夢とか幻とか――――には選べる選択肢が残っているんだ。
だから選べ。間に合う、来るんだ」

前原はその少女の腕を掴み、みんなの手で重なっている上にその
手を置いた。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

ガチャン――

そこに、詩音が入ってきた。

「どう？何か思い出しましたか？」

「あの・・・ちゃ、茶色の、髪の少女に・・・はぁ、はぁ・・・白
い車の上で話していました。あと・・・さっきの解答者・・・どこ
かで会ったような気が・・・」

「ふーん、まだまだだね・・・・・・ついでに言っておきま
すけど・・・さっきの解答者・・・捕まりましたよ。手錠を掛けら
れてね」

その言葉を残して詩音は出ていった。

「・・・・・・うつ・・・・・・あっ・・・」

前原は頭を押さえた。

辺りは暗かった。たくさんの何かが赤い光がいろんな所を照らして

いた。

「――君、――たら、また戻ってくるよ。だからそれまで待つてくれる？」

「ああ、当たり前だ・・・お前の帰りを・・・みんなが待ってる！」
そして前原は目から涙が流れた。

「またな．．．．．レナッ！！」

そして呼ばれた少女の前に総一郎の姿があった。5 mくらい離れた所にパトカーにもたれかかっている月の姿が見えた。そして総一郎はレナの手到手錠をかけた。

そして違う場面が映し出せられた。

さつきと同じで周りはゴミの山で囲まれていた。周りには夕焼けで辺りがオレンジ色に染まっていた。今度は白いワゴン車の下にそのレナという少女の周りに男女二人の死体があった。レナは上下が黒色のジャージを着ていて全身に少し血が付着していた。下にはバラバラの死体があった。レナは男の首をのこぎりで切っている最中だった。

「うああああああああああああああああああああ」

廊下を歩いていた詩音に、前原の悲鳴が聞こえた。詩音はそつと振り返った。

「ふふ」

そして再び歩き始めた。

第一話後編 始まりの扉！司会者と神のデスゲーム（後書き）

1話書くことが出来ました！

どうでしょうか？

ぜひ感想などお待ちしております。

どういうように皆様に伝わっているかなど、知りたいので評価の方もよろしく願います！

2話のストーリーはだいたい出来ています。

あとは問題や前原の過去を作成するだけです。

意外とすんなり書けました！

3話からはひぐらしのキャラクターが解答者に登場する予定です。

第二話前編 新たなる疑問！？思いと後悔と友情

第二話前編 新たなる疑問！？思いと後悔と友情

ポチャン、ポチャンと水道の蛇口から一滴、一滴、水が出ていた。
前原はただベッドに座っていた。

「……くっ！」

前原は頭を押さえた。そして頭の中で映像が流れた。

「じゃあ始めるよ竜宮レナ、一世一代のがんばり物語を」

レナが白い車の上に乗って叫んでいた。後ろには夕焼けで辺りがオレンジ色に染まっていた。辺りはゴミの山に囲まれていた。

「――君、罪を償ったら、また戻ってくるよ。だからそれまで待つてくれる？」

辺りは暗かった。たくさんのパトカーの赤い光がいろんな所を照らしていた。前原の目の前にはレナがいた。

「ああ、当たり前だ……お前の帰りを……みんなが待つてる！」

そして圭一は目から涙が流れた。

「またな……レナッ！」

「はっ！」

前原はベッドから起き上がった。前原の頭からレナが男の死体の

首を切っていたことが忘れることができなかった。

「はあ、はあ、はあ……」

前原は片手で頭を押さえた。

瀬川が銀河テレビのザ・クイズショウ専用の部署にある自分の席に向かっていた。すると違う部署の人たちが声を掛けてきた。

「昨日の放送面白かったです」

「えっ……あ、ありがとうございます」

そういつてまた歩き始めるとまた声を掛けてきた。

「昨日の放送すごかったですね」

そう言ったが心の中ではうれしい気持ちが生まれてはこなかった。

「そう、ありがとう」

瀬川はようやく自分の席に辿り着けた。

そして自分の席の横に貼っているザ・クイズショウの宣伝ポスターには視聴率過去最高48,0%と書かれている紙が端に張っていた。

瀬川は頭を抱えてから、ため息をついた。そしていろいろな荷物を鞆に詰めてどこかへ向かった。瀬川はある部屋へと入った。その扉の中央に第3会議室と書かれているプレートが貼ってあった。その会議室にはザ・クイズショウのスタッフが全員座っていた。瀬川は奥にある自分の席に座った。斜め左には詩音が座っていた。

「始めるわよ」

「次週の解答者ですけど、一般募集枠からこの人に決まりましたので」

詩音はすぐにクリップで挟まれた数枚の紙を差し出した。最初のページには次の解答者の顔と名前などが書いてあった。写真は髪をオレンジ色のリボンで整えている女性が映っていた。横には涼宮ハルヒと書かれていた。

「そう」

瀬川はその資料を自分の横に置いた。

ハルヒは土曜日の朝にいつも通りの市内探索を一人で行っていた。

「ほんと、退屈」

「涼宮ハルヒさんですね？」

突然、後ろから黒いスーツにサングラスを来た男から声を掛けられた。ハルヒは振り返った。

「何？ あんた」

ハルヒは驚きもせずにその男を見ていた。

「私、黒狐テレビのものです」

「で、何？ テレビ出演？」

「涼宮ハルヒさん・・・あなたをザ・クイズショウにご招待いたします」

そしてその男は内ポケットから招待状を差し出した。そこにはTHE QUIZ SHOWと書かれたロゴが書かれていた。

そしてハルヒは招待状の受け取った。そして裏面を見た。

招待状

今回、黒狐テレビ

「ザ・クイズショウ」の解答者に、

日本全国一億三千万人の中から

見事選ばれました。

よって当番組にご招待させて頂きます。

黒狐テレビ「ザ・クイズショウ」

ハルヒは笑みを浮かべた。

「ふうん、やってやろうじゃない!!」

「園崎さん、今回は勝手なことしないわよね」

「さあ？」

「園崎さ——」

「本番15秒前」

話している最中に、放送室とスタジオにその声が響き渡った。

「時間です」

詩音はモニターがある方を見た。

「本番10秒前、8、7、6、5秒前、4、3、2、1」

そしてON ALRと言う文字に赤い灯りが付いた。

そして番組が始まった。

真っ暗の中、ステージの中央の奥に白い灯りが当てられた。そこには前原が立っていた。

「人は誰でも華やかな夢に憧れる。世界中を旅したい者。大きな家に住みたい者。はたまた大金を手にしたい者。全ての夢の終着点。それがこの、ザ・クイズショウ——」

その言葉が終わるとさまざまな色の光がいろんな所に当てられる。観客からは、拍手の音がし始めた。前原は前へと向かった。

「さあ、今週もやって参りました、ザ・クイズショウ。本日も一時間ぶっとおしの生放送でお送りいたします。司会はわたくし、MC・MAEBARA。そして今週の解答者はこの方、高校生、涼宮ハルヒ——」

後ろの扉が開いた。そして白い煙の中から涼宮ハルヒが姿を現した。そして観客席から拍手が聞こえてきた。ハルヒはそのままステージの前へと向かった。

そして画面に涼宮ハルヒのプロフィール映像が流された。

『涼宮ハルヒ。高校生。東京生まれ。中学時代、夜中に学校に忍び込み校庭に謎のメッセージを大きく書いた校庭落書き事件などを起こす。高校1年の時にSOS団という部活を作る。活動内容は学園生活での生徒の悩み相談、コンサルティング業務、地域奉仕活動など。土曜日には市内探索を行っている。そして一ヶ月前にSOS団をやめる。そして現在に至る』

プロフィール映像が終わると観客席からは、拍手が聞こえてきた。「すごいプロフィールですね。SOS団って。土曜日に市内探索ですか」

「まあ、市内探索って言うてもただの不思議探しだけどね」

「そうですか。何か見つけたんですか。UFOとか見つけちゃったりして」

「なにもない。一つくらいあってもいいのに」

「そうですね。ところで涼宮さんはなぜ不思議探しを？」

「決まってるじゃない、そっちの方が面白いじゃない！」

「そうですね。ところでなぜSOS団をやめられたんですか？」

「あんたには関係ない！」

「失礼しました。のっけから怒られてしまいました」

観客席からは笑い声が聞こえた。

「それではここでルールをおさらいしましょう。このザ・クイズシヨウは全七問のクイズによって構成されます。クイズに正解するたびに獲得賞金は上がっていき、全七問を突破した時点で、あなたの獲得金額は一千万。その後、あなたはその一千万を賭けてドリームチャンスに挑戦することができます。そのドリームチャンスに挑戦

し、そして見事、クリアすることができれば、あなたが手にすることができるのは夢。文字通り、一つだけ夢を実現することができるのです。よろしいですね？」

「ええ」

「それではお伺いしましょう。あなたの夢は何ですか？」

「うーん、そうね。やっぱ番組的には最高額の賞金が一番盛り上がるのかしら？」

「それは人によって変わるんじゃないでしょうか？まあ、それはそれで盛り上がりますね」

「じゃあ、最高額の賞金で」

「本当にいいんですか？こんな簡単に決めちゃって」

「ええ」

「承知致しました。あなたがドリームチャンスをクリックしたあかつきには、番組の最高額の賞金、一億円をプレゼントいたしましょう！」

「「「おー」」」

観客席からは拍手などが響いていた。

「それでは、涼宮ハルヒがこの番組の盛り上がりをかけてこのザ・クイズショウに挑みます。イツツ、ショウタイム」

前原が両手を高く上に上げた。そしてふたりは握手を交わした。

「それでは第1問

太陽系の惑星で太陽の方から5番目の惑星は次のうちどれ？

A、木星 B、土星 C、水星 D、天王星」

「A」

「正解です！それでは第2問

七夕の彦星はアルタイルですが織姫星は次のうちどれ？

A、ベテルギウス B、ベガ C、リゲル D、メラク」

「B」

「正解です！では第3問

1947年にK・アーノルドがワシントン州レーニア山頂近くで見つけたものは世間からはなんと呼ばれているでしょう？

A、ユニコーン B、死神 C、UFO D、妖怪

あれ？3問目からいきなり難しくなりましたね。奥義でも使っておきますか？」

「C」

「・・・正解です！いやいや、しびれるなー。すごいじゃないですか」

「当たり前よ！、こんな問題」

「おお、言ってくれますねー。ところで高校でやっていた部活のSOS団って普段はどんなことされているんですか？」

「何も。団員は遊んでるけど」

「そうですか。ところで資料によりますとSOS団は地元の草野球大会に出場されたらしいですね」

「ええ」

「なぜ参加されたんですか？野球が趣味でもないのに」

「SOS団の名を広めるチャンスだったからよ」

「結果は一回戦敗退だったのですが、優勝候補の大学生チームに勝ちメンバーの負傷や都合により棄権されたそうです。すごいじゃないですか、涼宮さん」

「たいしたことないわよ」

「おお、またまた強気な発言。それでは第4問

SOS団が今年の文化祭に行った活動は次のうちどれ？

A、模擬店 B、映画の上映会 C、お化け屋敷 D、演劇」

「何？この問題」

「えっ、答えられないんですか？」

「こ、答えられるわよ！、Bよ！」

「正解です！いやー、涼宮さん映画を作られたんですね」

「ええ」

「どんな映画なのか、皆さん見てみたいですよね」
観客席からは拍手が鳴った。

「ではVTRをどうぞ」

画面にはSOS団が作った予告用のVTRが流されていた。そのVTRには内容はめっちゃくだったが、登場人物の紹介やモデルガンやCGを使った魔法で戦闘シーンなどがあった。その映画にはハルヒは出ていなくて、団員二人が映っていた。一人はメイドの服を着ていて、もう一人は魔法使いの格好をしていた。

そしてVTRが終わった。

「ひどい映画ですね」

バン――

ハルヒは立ち上がった。

「だから何な――」

「それでは第5問

涼宮ハルヒがSOS団を抜けるときに言った最後の言葉とは？

A、ありがとう B、ごめん C、私の命令を聞いてたらいいの

よ D、さよなら

「――っ！」

「さあ、涼宮さん、答えをどうぞ！」

「だから何なのよ！この問題。だいたいあんたわかるの？」

「はい、私はあなたの全てを知っています」

「・・・・・・」

そしてCMに入った。

「園崎さん、あなた、また？」

「ええ。今回も視聴率取れますよ」

「そんなことはどうでも――」

瀬川は席を立ち、詩音の元に行った。だが詩音も席を立った。

「でも、この世界って結果が全てですよ？瀬川さんも過去の結果

で今、プロデューサーやってるんですよね？」

「それとこれとは——」

「同じですよ」

詩音はすぐに答えた。

「……」

「まもなくCM明けます」

放送室にその声が響いた。

「では……始まるので」

詩音は席についた。瀬川は黙っているしかなかった。

「さあ、改めて涼宮さん、答えをどうぞ！」

「……C」

「……正解です！ いやー、涼宮さんひどいですね」

「うるさい」

「はい？」

「だからうるさいっていったんの！！」

「仲間を傷つける人に夢をかなえる資格はありませんと思いませんか？ ねえー、涼宮さん」

前原はハルヒに顔を近づけて言った。

「うるさい！！！」

パンッ——

ハルヒは怒鳴ると同時に前原の顔を叩いた。そして頭の中に何か
が映った。

「くっ……」

前原は片手で頭を押えた。そして頭の中に何か過ぎった。

目の前には男の人が立っていた。横には女性が泣いていた。

「—————」

その男が何かを言った後におもいつき前原の頬を拳で殴った。
そうということが前原の頭を過ぎった。

前原は押えていた手を戻した。

「・・・では第6問

現在のSOS団の団長は次のうちどれ？

A、古泉一樹 B、キョン C、長門有希 D、いない」

「・・・・・・・・・・」

「どうしました、涼宮さん」

「今のSOS団の団長なんて分かるわけないじゃない」

「じゃあ奥義でも使いますか？まだ一回も使ってないじゃないですか。三回まで使えるんですよ」

「じゃあ、それ使う」

「出ました。奥義です！」

前原は立ち、手から銀色の長くて細い棒を取り出した。そして画面には以心伝心、召喚、導きの手のアイコンが並んでいた。

「奥義は3回まで、各問題ごとに1つとなります。よろしいですね？」

「・・・ええ」

「それでは、ルーレットスタート！」

前原はその棒を回し始めた。それと同時にその上を光が回り始めた。

「押して押して」

前原はハルヒの前にあるボタンを指で指した。

バン――

ハルヒは強くボタンを押した。光は以心伝心の上で止まっていた。

「以心伝心」

前原は胸の上に手でハートマークを作っていた。

「今日とはある場所と中継が繋がっています。その場所とはここです」

画面にはSOS団の部室が映っていた。ハルヒがやめたときと全く変わっていなかった。そんな場所にSOS団副団長であった古泉一樹が画面に映っていた。

「えっ！」

「お久しぶりです。涼宮さん」

第二話前編 新たな疑問！？思いと後悔と友情（後書き）

どうも、黒狐です。

ハルヒのキャラが少し崩壊してますが、解答者にするにはしょうがなかったんですwww

ハルヒファンの皆さん、すいませんm（　　）m

さて皆さんに質問なんですが、話の終わりに次回予告的なものを入れた方がいいでしょうか？

感想など、待ってまーす！！！

気軽にどうぞ！

PS、マイミク募集中ですwww

名前は黒狐@ゆしゃです。ルルーシュの画像を使用してます！
よかったら声をかけてください！！！！

第二話後編 新たなる疑問！？思いと後悔と友情

第二話後編 新たなる疑問！？思いと後悔と友情

「・・・では第6問

現在のSOS団の団長は次のうちどれ？

A、古泉一樹 B、キョン C、長門有希 D、いない」

「・・・・・・・・・・」

「どうしました、涼宮さん」

「今のSOS団の団長なんて分かるわけじゃないじゃない」

「じゃあ奥義でも使いますか？まだ一回も使っていないじゃないですか。三回まで使えるんですよ」

「じゃあ、それ使う」

「出ました。奥義です！」

前原は立ち、手から銀色の長くて細い棒を取り出した。そして画面には以心伝心、召喚、導きの手のアイコンが並んでいた。

「奥義は3回まで、各問題ごとに1つとなります。よろしいですね？」

「・・・ええ」

「それでは、ルーレットスタート！」

前原はその棒を回し始めた。それと同時にその上を光が回り始めた。

「押して押して」

前原はハルヒの前にあるボタンを指で指した。

バン――

ハルヒは強くボタンを押した。光は以心伝心の上で止まっていた。

「以心伝心」

前原は胸の上に手でハートマークを作っていた。

「今日とはある場所と中継が繋がっています。その場所とはここです」

画面にはSOS団の部室が映っていた。ハルヒがやめたときと全く変わっていなかった。そんな場所にSOS団副団長であった古泉一樹が画面に映っていた。

「えっ！」

「お久しぶりです。涼宮さん」

「え、ええ」

ハルヒは戸惑っていた。そして沈黙が続いた。

「だめじゃないですか涼宮さん。はやくヒント聞かなきゃ」
観客席から笑い声が聞こえた。

「では古泉さん、涼宮さんにヒントをお願いします」

「わかりました。現在のところは残念ながら決まっています。なので答えはDです」

「………」

ハルヒはうつむいていた。

「では古泉さんありがとうございます」

そして通信が切れた。

「では涼宮さん、答えをどうぞ、っていうかも完全に答えが出るんですけどね」

「……D」

「正解です！ドリームチャンスまで後一問ですよ、涼宮さん」
ハルヒはうつむいていた。

SOS団の部室に団員の全員がそろっていた。

「じゃ、明日も9時に駅前集合ね」

「ハルヒ、悪いが俺はパスだ」

いきなり団員のキョンが立ち上がりハルヒに言った。

「却下よ!」

「ばあちゃんが昨日の夜に倒れたみたいでな、明日は見舞いに行かないと行かなきゃだめなんだ。今日の夜に出発なんだ」

「だめよ」

「なぜ」

「だから明日は七夕じゃない!」

「だから明日は——」

「あんたそれでも団員として自覚あんの?」

「あるわけねえだろ。そんな遊びに付き合ってる暇はこっちにはちつともなんいだよ。なぜ予定までお前に決められなきゃいけないんだ」

周りが少し慌ててきた。

「言われた通りにすればいいのよ! 団長はあたしよ!!」

「てめえっ……」

キョンが殴りかかった。だが古泉に止められた。

「もういいわ、SOS団は今日をもって解散よ! 好きにすればいいじゃない!」

「ああ、そうさせてもらうよ」

「あ……あんた達は私の命令を聞いてたらしいのよ!!」
バンッ——

部室のドアが閉まった。

「では第7問

SOS団の団員のキョンさんがSOS団の部室を維持するために

生徒会長にしたことは次のうちどれ？

A、仕事の手伝い B、土下座 C、暴力 D、ワイロ」

ハルヒはうつむいていた。

「またまた難しい問題が出てしまいましたね。どうでしょうか？
奥義でも使いますようか？ ねえ、涼宮さん」

「・・・・・・・・・・」

ハルヒは黙ったままだった。

「使っちゃいますよ。まだ2回も残っているので。では奥義です！」
画面にはまた、以心伝心、召喚、導きの手のアイコンが並んでいた。
「ルーレットスタート！」

その声と同時にその上を光が回り始めた。前原はハルヒの代わりにボタンを押した。その光は召喚の上で止まっていた。

「召喚！」

ハルヒは後ろを見た。後ろの扉にはSOS団の団員が立っていた。

「——っ！ なんで」

「ご紹介しましょう、SOS団の皆さんです」

キョンがハルヒに近づいていった。

「ようっ！・・・・ハルヒ」

「・・・・・・・・・・」

ハルヒは目をそらした。

「・・・・こんなことでおまえの夢が叶うなら教えてやる。今まで暇だった時間を面白くしてもらえたんでな。ちよつとした恩返しだ。
答えはBだ」

ハルヒの目から涙が一滴流れた。その涙は次々に出てきた。涙が止まらなかった。止めようとしても止まらなかった。だから服の袖に顔をつけていた。

「SOS団のみなさん、ありがとうございました。ではあちらの観客席の方にどうぞ」

そしてSOS団の全員は観客席に座った。

「さあ、涼宮さん、答えをどうぞ・・・・あなたの、夢のために——

」

ハルヒはゆっくりと顔を上げた。ハルヒの目は、とても赤かった。
「くっ！」

また前原は頭が痛くなった。そのハルヒの顔はどこかで見たことがあった。だが思い出せない。前原は片手で頭を押えた。いつものようには痛くなかった。ちくつとしたような針で刺された痛みに似ていた。

「………B」

押えていた片手を戻し、そしてハルヒを見た。

「……正解です！おめでとうございます。一千万円獲得です！」

前原は立ち上がって拍手をした。

「さあ、涼宮さん。あなたはこの一千万円を賭けてドリームチャンスに挑戦することにできますが……どうしますか？」

ハルヒは前原に指を差して言った。

「やるに決まってるでしょ！！」

前原はすぐにステージの前に向かいカメラに指を指しながら叫んだ。

「ドリームチャンス！」

その言葉を言い終ると音楽が鳴り始めた。前原はその音楽に合わせて踊り始めた。

そしてCMへと入った。

そしてCMが明けて番組が再開された。

「涼宮さん、もう一度お聞きします。あなたの夢は何ですか？」

「夢、変える。SOS団を復活させること」

観客席にいるキョンは他の団員の顔を合わせた。古泉も長門も朝比奈さんも笑っていたのだった。キョンもまた、笑っていたのだった。そして前原は口を開いた。

「でも辞められたんじゃないんですか？」

「だから復活って言ったじゃない！」

「・・・問題、この中で迷惑をかけたのは次のうちどれ？」

A、夜神月 B、L C、SOS団の団員 D、いない」

「・・・」

「難しいなら奥義でも――」

「知らない、答えはCよ！」

「・・・正解です！ドリームチャンス、クリアーです」

そしてスタジオは明るくなった。

「涼宮さん・・・あなたはやっと気づいたのです。自分の仲間を・・・あなたは今まで独断ですべてを決めてきました。ですが仲間と話し合えば最善の方法が思いつくことでしょう。夢をかなえるために必要なもの、それは・・・仲間なんです・・・なんつって」前原はいつものように顔の表情をころっと変えてステージの前へと向かった。

「今回の解答者、涼宮ハルヒは見事、夢を実現させることができました。次週、自らの夢に挑むのは果たして・・・誰なのか？」

そして前原はカメラに指を差した。

「あなたの夢を、叶えます」

観客席からは拍手が鳴り始めた。そして前原はステージから出て行った。

番組が終わってハルヒはテレビ局から出ようとしていた。

「ハルヒ」

後ろから声がした。後ろを振り向くとそこにはSOS団の団員が立っていた。そしてキョンが近づいてきた。

「久しぶりに一緒に帰るか？団長さん？」

ハルヒは涙が出そうになったが必死にこらえた。

「か・・・帰ってあげてもいいわよ」

キョンは少し笑った。他の団員も笑っていた。長門も少し笑ったように思えた。

「な、何よ!」

「別に」

「ちょ、ちよっと待ちなさいよ、キョン!」

全員は笑顔だった。そして全員はテレビ局から出て行った。

「ふええ・・・ひつく、うええええ・・・」

目の前でちいさい女の子が泣いていた。その女の子は小学校の低学年ぐらいだった。周りは街中だった。

「どうしたの?」

前原の横には中学生の女性が女の子に聞いた。その女の子は詩音に似ていたが少し違った。その女性は後ろ髪を結んでいた。

「ひつく・・・ま、ママが・・・ママがいなくなっちゃった・・・うええええ」

「そんなに泣かないで。私たちが探してあげるから」

前原の逆のほうからレナが出てきて言った。

「ほ、本当?」

女の子は顔を上げて見た。その顔はハルヒに似ていた。

「本当だよ。ね・・・みんな」

レナが前原のほうに振り向いて聞いた。

「ああ、当然だぜ!」

前原が言った。

「当たり前ですわ」

横の小学生くらいの女の子が言った。

その横の同じくらいの女の子がハルヒの頭をなでた。

「ぼくたちが見つけますので大丈夫なのですよ。にぱー」

「名前教えてくれるかな？」

詩音に似ていた女性が聞いた。

泣いていた女の子は少し泣き止んで言った。

「は・・・・・・・・ハルヒ・・・・・・・・」

「はぁ、くっ！あああああっ！」

前原はベッドから落ちてしまった。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・・・・・・み、魅音」

（魅音と詩音・・・・・・・・っ！そうだ！二人は確か双子のそっくりな姉妹・・・・・・・・じゃあ、魅音は、他にも沙都子と梨花ちゃんは・・・・・・・・くそっ、何もわからない・・・・・・・・なんで俺はここにいるんだ・・・・・・・・）

「・・・・・・・・くっ、はぁっ、あぁっ」

目の前にはレナがいた。立っていたというよりは何かを避けるように動いていた。レナの腕には拳銃が握られていた。また前原も何かを避けるように動いていて拳銃を手に持っていて、その拳銃をレナに向けていた。よく見るとレナが持っている拳銃は青色だった。たぶんそれは水鉄砲だろう。前原の拳銃もよく見ると黒色だったが先っぽが赤色だった。二人の持っているのは水鉄砲だった。それを二人で打ち合っていた。周りには小学生と中学生一人が二人に声援を送っていた。

その遊びは俺たちの中で「部活」と呼んでいた。負けたらコスプレのようなもの着るなどのような過酷な罰ゲーム受けなければならぬというルールだった。

二人は撃っては避けての繰り返しをしていた。

そしてまた違う映像が流された。

辺りは真っ暗だった。前原は小さい裏路地にいた。すぐ横にある道には街頭の電気が照らしてあるがまだ暗かった。そして前原の手には拳銃が握られていた。だが今度は真っ黒な銃だった。とても水鉄砲とは思えないような銃だった。

自分はいきなりそこを飛び出して、歩いていたの人にその拳銃を向けた。

バンバンバンツ——

拳銃から出た弾が何発か通行人に当たったが血が出ていなかった。手に持っていたのはモデルガンだった。頭の中にはその映像が何回も映し出された。次に映ったのは少し違った。次は通行人の女性を狙って打ち始めた。モデルガンの弾がその女性の目に当たった。そして前原は怖くなって逃げ出してしまった。

目の前には男の人が立っていた。横には女性が泣いていた。後ろには小さいころの圭一が写っている写真があった。両端には目の前に立っている男と泣いている女性が写っていた。その二人は両親だった。

「圭一、おまえは何をしたのかわかっているのか!!!」
そして圭一は親父に何度も何度も殴られた。

「ああああああああっ・・・はあ・・・はあ・・・はあ」

前原は自分の震えている両手を見た。

「お・・・俺は・・・俺は・・・う、うわああああああああああ」

部屋と廊下には前原の悲鳴が響き渡った。

第二話後編 新たな疑問！？思いと後悔と友情（後書き）

どうも、黒狐です。

最近暑くなってきましたね。もう小説を書くのがつらくなってきました。なので、ついにエアコンに手を出してしまいましたWWW
一人暮らしする前はエアコンなんか使うか！と思ってましたWWW
そのおかげで三話も順調に進んでいます！……っと言いたいのですが、一話二話に比べると少し遅い気がします。

さて、三話から真相にどんどん近づけようと思ってます！
遂に次回からはひぐらしのキャラが解答者席に座ります！
ひぐらしファンの皆様、お待たせしました！！！！

次回は最低でも来週までにはアップします！明日、暇なのでめっちゃがんばろうかと思ってます！

応援よろしくお願いします！

感想、アドバイス、要望など待ってまーす！

今のところ、ないので（泣）

やる気のために、何でもいいので感想などくださいWWWマジで！！！！！！

お願いします。m（　　）m

第三話前編 増え続けるカケラと疑問。人生の重さとは!!

第三話前編 増え続けるカケラと疑問。人生の重さとは!?

前原はただベッドに座っていた。

前原は頭を両手で押えた。

「あっ・・・くっあっ・・・あっあっ」

前原の頭の中で今、知っている過去が再生された。モデルガンで小さい女の子を撃っている所、レナと部活で戦っている所、レナが逮捕されている所などが再生された。するといきなりすべてが消えた。そこは真っ暗だった。だがすぐに高いところから落ちているところが映された。

「うわああああああああああああ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

ボタンッ——

すると扉が開く音が聞こえた。詩音がこちらに近づいてきた。

「無理に思い出さなくてもいいですよ」

「はあ、はあ、はあ……」

「ゆっくり思い出してくれたらいいからさ」

「はい」

「……今日の解答者です」

そういつて前原に資料を渡した。

その資料にはこう書かれていた。乙部彰。

ブルルル——

そこにはデスクがたくさん並んでいた。パソコンや資料などがたくさん置かれている所がたくさんあった。壁に貼っているポスターのすべてに雑誌の名前が書かれていた。週刊セブン。

「乙部、お客が来てるぞ」

乙部と呼ばれた人はパソコンから目を離して呼んだ人を見た。

「い、今行きます」

数秒パソコンをいじってから席を立った。そして接客室へと向かった。

「お待たせしてすみません」

乙部が接客室の扉を開けるとそこには黒いスーツにサングラスをかけた男が座っていた。その男はすぐに立ち上がって、乙部の前に立った。

「あの、何の御用でしょうか？」

乙部はすしおどおどしていた。

「乙部彰さんですね？」

「はい……」

「私、黒狐テレビのものです」

「そ、そうですか……それで用件とは？」

「乙部彰さん……あなたをザ・クイズショウにご招待いたします」

そして、その男は内ポケットから招待状を差し出した。そこには
THE QUIZ SHOWと書かれたロゴが書かれていた。

乙部はそれを受け取った。そして裏面を見た。

招待状

今回、黒狐テレビ

「ザ・クイズショウ」の解答者に、
日本全国一億三千万人の中から

見事に選ばれました。

よって当番組にご招待させていただきます。

黒狐テレビ「ザ・クイズショウ」

読み終わるとスーツの男の顔を見た。

「え、えーっ!!」

「本番10秒前」

ブザーとともにその声は聞こえてきた。

「8, 7, 6, 5秒前」

スタジオと放送室にそのカウントダウンは響いた。そして辺りが暗くなっていった。

「4, 3, 2, 1」

そしてON ALRと言う文字に赤い灯りが付いた。

そして番組が始まった。

真っ暗の中、ステージの中央の奥に白い灯りが当てられた。そこには前原が立っていた。

「人は誰でも華やかな夢に憧れる。世界中を旅したい者。大きな家に住みたい者。はたまた大金を手にしたい者。全ての夢の終着点。それがこの、ザ・クイズショウ——」

その言葉が終わるとさまざまな色の光がいろんな所に当てられる。観客からは、拍手の音が始めた。前原はステージの前に立っていた。

「さあ、今週もやって参りました、ザ・クイズショウ。司会はわたくし、MC・M A E B A R A。そして今週の解答者はこの方、フリーライター、乙部彰」

後ろの扉が開いた。そして白い煙の中から乙部彰が姿を現した。

そして観客席から拍手が聞こえてきた。乙部はお辞儀をして前に進んだ。

そして画面に乙部彰のプロフィール映像が流された。

『乙部彰。職業フリーライター。親の反対を押し切って、東京に上京。大学を中退し、バイトの日々を過ごす。その後フリーライターの荒川龍一郎に出会い、荒川さんが勤めている会社に就職。そして現在はフリーライターとして活躍中』

プロフィール映像が終わると観客席からは、拍手が聞こえてきた。

二人はステージの前に立っていた。

「ようこそ、ザ・クイズショウへ」

「どうも」

「いやー、乙部さん。厳しい人生を歩いてこられたんですね」

「ま、まあ、そうですね」

「緊張してるんですか？乙部さん」

「ええ」

「ちなみに今の仕事はどうなんですか？」

「荒川さんのおかげで何とか」

「そうですか。それではここでルールをおさらいしましょう。このザ・クイズショウは全七問のクイズによって構成されます。クイズに正解するたびに獲得賞金は上がっていき、全七問を突破した時点であなたの獲得金額は一千万。その後、あなたはその一千万を賭けてドリームチャンスに挑戦することができます。そのドリームチャンスに挑戦し、そして見事、クリアすることができます。あなたが手にすることができるのは夢。文字通り、一つだけ夢を実現するこ

とができるのです。よろしいですね？」

「は、はい」

「それではお伺いしましょう。あなたの夢は何ですか？」

「限度額いっぱいのお金を希望します」

「承知致しました。あなたがドリームチャンスをクリアしたあかつきには、我々が用意できる金額、一億円を差し上げましょう」

「「「「おおー」」」」」

観客席からは声と拍手の音が大きく聞こえてきた。

「ちなみにその一億円の使い道とは何ですか？」

「えっと・・・荒川さんに恩返しをしたいと思いついて・・・あとは生活費などに、最近は少し困っていて・・・ははは」

「それでもまだまだたくさん余っちゃいますよ」

「そ、そうですね。ははは」

「まあ、細かいことはいいでしょう。夢は一億円でよろしいですね？」

「はい」

「それでは、乙部彰が荒川龍一郎への恩返しをかけて、このザ・クイズショウに挑みます。イッツ、ショウタイム」

前原が両手を高く上に上げた。そしてふたりは握手を交わした。

「それでは第一問

パソコンのマウスのボタンを押したままマウスを移動させることをパソコン用語でなんと言うでしょう？

A、ドロップ B、ドラック C、クリック D、ダブルクリック

「Bのドラック」

「正解！では第二問

複数の貸し手から借金をし、弁済できない債務者のことを何と言

うでしょう？

A、複数債務者　B、挫折債務者　C、多重債務者　D、窃盗債務者」

「Cの多重債務者」

「正解です！では第三問

三菱財閥を創始したのは次のうち誰？

A、岩崎弥太郎　B、吉田東洋　C、後藤象二郎　D、坂本竜馬」

「えっと……」

「難しいですか？乙部さん」

「は、はい」

「それでは奥義でも使いますでしょうか？まだ三回使えるのでどうします？使っちゃいましょうか！」

「じゃあ使います」

「出ました。奥義です」

前原は立ち、手から銀色の長くて細い棒を取り出した。そして画面には以心伝心、召喚、導きの手のアイコンが並んでいた。

「ルーレットスタート」

前原はその棒を回し始めた。それと同時にその上を光が回り始めた。乙部が自分の前にあるボタンを押した。すると光は導きの手の上に止まっていた。

「導きの手」

前原は開いている右手をカメラに向けながら言った。

「では観客席の皆さん、お手元にあるボタンを押して乙部さんに答えを教えてあげてください。ではスイッチオン！」

前原が言って手を観客席のほうに向けると、その合図と同時に観客席からカチッ、というボタンを押す音が聞こえてきた。すると画面に棒グラフが出てきた。その中でAが一番多かった。

「じゃ、じゃあ、Aの岩崎弥太郎で」

「……正解です！いやー、絶好調じゃないですか、乙部さん」
「ど、どうも」

「乙部さんって職業はフリーライターでしたが、今はどんな記事を書かれているんですか？」

「一応オカルト系の記事を書いているんですけど、今書いている記事は幽霊村なんです、雛見沢村っていう村なんです——」

「——っ!!」

前原は頭を押えた。

「くっ……うっ……あ——」

前原の頭の中で何かの映像が流れた。

「——、そろそろ着くぞ。起きなさい」

前原は電車に揺られながら眠っていた。その前原を前原のお父さんが子突きながら起こした。前原は窓の外を除いた。外の風景は都会と同じ国であること、いや、同じ時代であるということを疑わせる。そしてようやく列車が終点についたようだ。ここからさらに車で山道を走った。うっそうと木々が茂る山道が急に開けた。そこからは村が見えた。

カナカナカナカナ——

ひぐらしの鳴き声が響いていた。車の中でもひぐらしの鳴き声がよく聞こえた。

その村には神社があった。それに診療所、学校といえる広さではないが学校があった。

「こ、ここが雛見沢……村」

「はあ……はあ……はあ……」

「だ、大丈夫ですか、前原さん」

乙部が話してきた。

「す、すいません・・・私、オカルト系苦手なんですよ。苦手なのに間違って聞いちゃいました」

観客席からは笑い声がする。

「ほ、本当に大丈夫で――」

「では第四問

乙部さんが雛見沢で荒川龍之介さんが見つけたものとは次のうちどれ？

A、ミステリーサークル B、UFO C、練炭自殺した車 D、幽霊船

「・・・・・・・・・・」

「どうしました？」

「いえ・・・答えはCです」

「正解です！そうですか、そんなものを見つけたんですか」

「ええ、とても気の毒で」

「では第五問

乙部さんが見つけた練炭自殺した車の助手席に座っていた人は次のうち誰？

A、夜神月 B、乙部彰 C、荒川龍之介 D、MC・MAEB
ARA」

「――っ!!」

（な、何でこんなことが）

乙部は震えていた。手先まで震えていた。

「どうしました乙部さん・・・答えをどうぞ！」

「こ・・・答えな、ないといけま・・・せんか？」

「ええ、答えてください、乙部さん・・・あなたはここに夢をかなえにきたんでしょう。だったら答えましょうよ！」

「・・・・・・・・・・」

そして番組はCMへと入った。

「乙部さん、答えないと恩返しできませんよ」

「・・・・・・・・・・」

乙部はずっと震えていた。

そしてCMは明けて番組が再開された。

「では乙部さん、答えをどうぞ」

「・・・び・・・び、B」

「正解です！」

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

乙部はまだ震えていた。

「そうですか乙部さんが乗っていたんですか」

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「それでは第六問

その車のメンバーはどんな関係を持っていたでしょう？

A、大学のサークル B、中学の友達 C、合コンの集まり D、

自殺志願者」

「――っ！！」

「どうしました？乙部さん？」

「・・・・・・」

乙部の震えが激しくなった。

乙部は東京駅にいた。

スーツ姿のビジネスマンが行き交い、雑誌に出てきそうな華やかいでたちのOLたちが外資系のコーヒーションでたむろし、駅のそばにはおしゃれなビルがそびえ立っていた。しばらくすると三人の人とであった。

「はじめまして、あつくんこと、芥川です」

前でにこやかに笑って頭を下げたのは、意外にも40歳くらいの男性だった。紳士然とした風貌は、このあたりのビジネスマンそのものだ。

「マチこと、真知子です。短いお付き合いだけど、マチって呼んで

ね」

マチちゃんは、10代にしか見えなかった。まだ高校生かもしれない女性だった。

「私はチアキ。本当の名前も千秋で、HNと一緒になの」

そういつてはにかんだ。

20代後半のおっとりした美人。裕福な暮らしをしていそうな雰囲気だった。

「どうも・・・、僕がオトベ・・・。乙部です」

「そんなに不安がらなくても大丈夫だよ、乙部君。みんな・・・死ぬのは初めてなんだ――」

「はあ、はあ、はあ・・・あ、あなた・・・ど、どこまで知っているんですか!?!」

乙部は席を立って前原を睨みながら聞いた。前原は表情をいっさい変えなかった。

「・・・乙部さん、私はあなたのすべてを知っています」

「――っ!」

第三話前編 増え続けるカケラと疑問。人生の重さとは!! (後書き)

どうも、黒狐です!

最近、大学の用事が増えてしまつて更新が遅れてしまいました!

すいませんm(_____)m

でも続けます。それがザ・クイズショウだからですwww

変なことを言ってますが、本題に入りましょう!

……感想などのメールがありません(泣)

初めての作品なのでアドバイスや感想が欲しくてたまりません。

たくさんのアクセスは涙が出るほど嬉しいです!

ほんとにありがとうございます!

誤字や脱字でもいいのでくださいwww

こういうこととして欲しいですとかいうアイデアもお待ちしております!
す!

それだけです。本当にお願いします!!!!!!!!!!!!!!

これからも連載は続けていくので、お付き合いいただけたらとても
嬉しいです。

ではまた次回!

第三話後編 増え続けるカケラと疑問。人生の重さとは!!

第三話後編 増え続けるカケラと疑問。人生の重さとは!!

「では乙部さん、答えをどうぞ」

「……でい……D」

「……正解です!」

「はぁ……はぁ……はぁ……」

「……乙部さんは自殺志願者だったんですね」

ガタツつと乙部は席を立って前原を見た。

「前原さんは借金をしたことがないからそんなことはわからないんです。簡単にそんなこと言わないでください!!!」

「すいません、ではどうして借金をされたんですか？まさか、くだらないことじゃないんですよね？辛い思いで借金をされたんですよね？だからそういう事が私に言えるんですよね、乙部さん」

「……っ!」

生活をしていくのに、必要な資金を得るためにバイトをしていた。バイトと浪費の日々を送っていた。大学は半年も経たないまま辞めてしまった。都会には誘惑が多かった。少し遊ぶだけで金は湯水のように消えていく。

（やべ……今月もうこれしかないのかよ。今度飲み会あんのに……）

乙部はコンビニのATMで自分の残り残高を確認していた。今後のことを考えて歩いていると乙部にティッシュ配りの人が乙部にテ

イッシュを差し出してきた。乙部は何も考えずにそれを受け取った。それをポケットに突っ込もうとしたらティッシュの広告の欄が目に入った。そこにはローンについて書かれていた。

少し借りるだけという軽い気持ちで乙部はローンを組んでしまった。人生で初めて借金をしてしまったのだ。

その後その借金を返すために違う会社から借金をした。いつしかそんな自転車操業に陥っていた。

ドンドンッ――

自分の家の扉が何者かによって叩かれていた。顔も知らないが誰か、簡単にわかった。乙部が気づいている通り、借金取りだった。

「居んのはわかってんだぞオラァッ」

「金返せやコルアァッ」

そういう言葉が外から聞こえてきた。乙部はただ呆然と床に座っていた。そうして初めて自分の人生が行き詰まったことを悟った。

大見得を切って上京した挙句、遊ぶための借金で破綻した。最低のダメ人間だ。

だからこんな人間、死んだほうがマシなんだ。

気が付けばネットを開いてとあるサイトにたどり着いていた。

そこには3人の人が自殺の予定を立てている様子だった。

参加者はこの3人でいいですか？

乙部にはどこか人のむくもりのようなものが感じられた気がした。気が付くと書き込みをしていた。

僕も参加したいです。

「はあ、はあ、はあ」

乙部は前原を睨んでいた。

「・・・では第七問」

あなたはその車から何かを奪って逃げました。その奪ったものは次のうちどれ？

A、ペットボトル B、CD C、通帳 D、本

「――っ!!」

乙部は震えながら椅子に倒れたかのように座った。

「な・・・なんで・・・なんでそ・・・そのことを・・・」

震えている口で前原に聞いた。

「だからさっきも言ったでしょう、私はあなたのすべてを知っています」

「はあ、はあ、はあ、」

車は雛見沢の山道で止まっていた。車の中ではとある準備を行っていた。

「幽霊、出ないね。死者の出る村って言うから、ちょっと期待したのになー。死んだ家族に会えるかもって」

「・・・家族、死んじゃったんですか？」

「うん・・・」

マチちゃんの一言から、みんなの身の上話が始まった。

家族を全員亡くしたマチちゃんも、他の人の借金を背負った芥川さんも、夫に先立たれた千秋さんも・・・、みんな精一杯あがいた末の自殺だった。

それに引き換え、僕は・・・。

情けなかった。・・・ただ本当に情けなかった。

「夫にもっとしてあげられることがあったんじゃないかって、今日までずっと思っていたの。一番大切な時期にそばにいてあげられなくてごめんなさいって・・・、どうしても伝えたい。どれだけ稼いでも、使えなかったら意味がないものね」

千秋さんはそう言いながら、ハンドバッグを取り出した。

「あの人が事業で成功して得たものよ。私には必要ないから・・・届けてあげようと思って」

中から出てきたのは、通帳とキャッシュカードだった。

「！」

僕は、それに目が釘付けになっていた。

（一体、いくら入っているんだ・・・？そのお金があれば、僕はやり直せるんじゃないか？・・・やり直せる！そのお金があれば・・・僕の新しい人生が！！）

死に路を逝く千秋さんの話を聞きながら、僕は希望が沸いてきた。

「それじゃ、今度は乙部くんの話を聞こうか・・・」

⌈
•
•
•
•
•
•
⌋

（ぼくは、まだ死にたくない！・・・まだ、生きたい！）

今頃になって僕は、意地汚いほど生への執着を持ち始めた。

乙部は俯いたままだった。

「無理に話すことはないわ。もう、おしまいにしましょうよ」

「それじゃ・・・みんな・・・あっちで会おう」

「さようなら・・・」

そして僕は配られた睡眠薬を飲まなかった。みんなが眠ったところに乙部は車の外に出た。乙部の手には千秋さんが持っていた通帳とキャッシュカードが握られていた。

「ふふ。うふふふふふふ、あはははははははは。あつ

は は は は は は は つ ————」

「はあ、はあ、はあ……Cの、つ、通帳」

「……正解です！おめでとうございます。一千万円獲得です！」

前原は立ち上がって拍手をした。

「さあ、乙部さん。あなたはこの一千万円を賭けてドリームチャン

スに挑戦することにはできますが・・・どうしますか？」

「や、やります」

前原は大きく息を吸い込みステージの前に向かいカメラに指を指しながら叫んだ。

「ドリームチャインス！」

その言葉を言い終ると音楽が鳴り始めた。前原はその音楽に合わせて踊り始めた。

そしてCMへと入った。

「ではもう一度お聞きします。乙部さん、あなたの夢は、何ですか？」

（僕の・・・・・・・・夢・・・・・・・・。僕は1億円を・・・・・・・・それでまた・・・・・・・・また・・・・・・・・人生を・・・・・・・・。こんなことで人生が変わるのか？金があれば変わるのか？そうだ金があれば楽しい人生だって送れる。仲間と飲み会に行ったり、彼女とデートしたりし放題だ。金さえ、金さえあれば、僕は幸せになれるんだ！・・・・・・・・なぜだなぜ拒んでしまう何が・・・・・・・・何がだめなんだ？）

「どうしました乙部さん？早くあなたの夢を行っちゃってください」

「僕は・・・・・・・・僕の夢は限度額の・・・・・・・・」

（なぜ言えない。早く言え、言えよ！）

乙部の頭の中に何かが浮かんた。それは短時間だが仲間であった3人の身の上話だった。

家族を全員亡くしたマチちゃん、他人の借金を背負った芥川さん、夫に先立たれた千秋さん。みんな、精一杯にあがいた末の自殺だった。

（僕は果たして一生懸命に生きてきただろうか？一生懸命あがいてきただろうか？・・・・・・・・思い当たることは無かった。まったく

浮かんでこなかった。そんなことで、そんなことで1億円を手に入る権利は僕にはあるのか？いや・・・ない。あるはずがない。こんな僕に)

「乙部さん？どうしま——」

すると乙部の目から涙が零れ落ちた。

「僕は・・・・・・・・僕は田舎でくすぶるような人間じゃないと信じていました・・・・・・・・。自分だけは成功する人間だと信じて上京してきました。だから失敗を認めたくなかった。・・・・・・・・嘘を・・・・・・・・嘘をついてしまった。精算の痛みから逃げるために、安易に死を選んで・・・・・・・・僕は・・・・・・・・僕は・・・・・・・・最低の人間です。だから僕は・・・・・・・・夢を他人に叶えてもらうことはできません。いや、してはいけない！夢は自分の手で・・・・・・・・今度こそ・・・・・・・・今度こそ掴もうと思います。僕はこれから人生を取り戻したい！一生懸命生きていきたい！だから・・・・・・・・ギブアップします！」

前原は観客席を向いた。

「ギブ、アップ——」

「・・・・・・・・乙部さん、あなたはここまでたくさん道を間違えてしまった。けど正しい道に戻るのは自分次第なんです。あなたは自ら間違えていることに気づいた。間違えがあるからこそ正しい道が見えてくるのです。だから自分次第で人生は変えられるのです。人生は齒磨き粉のチューブみたいなものです。チューブの最後のひとひねりまで使い切ってこそ人生なんです。あなたは他の人たちの自殺を踏みとどめることができなかった。だからあなたはこれからこのことを背負いながら生きていかなければなりません。一生懸命に生きてください。もがいてももがいて手に入れる、それが・・・・・・・・夢なんです・・・・・・・・」

そして前原は前のステージに向かった。

「さて、今回の解答者、乙部彰は残念ながら夢を叶えることができませんでした。次週、自らの夢に挑むのは果たして・・・誰なのか

？」

そして前原はカメラに指を差した。

「あなたの夢を、叶えます」

観客席からは拍手が鳴り始めた。そして前原はステージから出て行った。

乙部がテレビ局から出ようとすると出口に荒川がいた。

「よう」

荒川が片手を挙げて挨拶をしてきたがうまく返せなかった。

「荒川さん………騙っていて、すいませんでした」

乙部は頭を下げた。

「乙部………俺にもな、雛見沢に関する秘密があるんだ」

「えっ」

「誰にでも秘密があるんだよ」

「………荒川さん、明日から一週間休みをもらえますか？だから明後日の予定、キャンセルしてもらってもいいですか？これから実家に戻ろうと思います。あと雛見沢にも行って芥川さんやマチちゃん、千秋さん達にも僕はあやまらければなりません」

「ああ、行ってこい！」

「あ、ありがとうございます」

そして乙部はすぐさま走り出した。荒川はその姿をそのまま見ていた。

誰かの家の前にいた。周りを見れば雛見沢ではないことがわかった。そして前原はチャイムを鳴らそうとするが何度も躊躇していた。そして勇気をもってチャイムを鳴らした。そしてインターフォンから

声が聞こえてきた。前原は喋ろうとしても声が出なかった。声を出そうとするが涙しか出てこなかった。それでも声を振り絞って声を出した。

「ま・・・前原け・・・圭・・・い、一です・・・」

インターフォンの向こうから息を飲む音が聞こえた。前原は涙がぼろぼろと流れてきた。

ガラッ――

扉が開いた。前原は出てきた人を見て驚いた。そこにいたのは自分が撃ったモデルガンで目を当てて怪我をさせてしまった女性だった。その人の目には包帯がなかった。

前原は大声で泣き始めてしまった。泣きながらごめんなさい、ごめんなさいと何回も声を絞り出してあやまり続けた。

その女性は介抱されて玄関に入れてもらった。前原は必死にあやまり続けていた。そしてその女性は前原に向かってこう言った。

「あなたを、許します」

ますます涙が溢れてきた。そしてその人の両親とも前原の話を聞いてもらって許す気になってもらえた。そして帰り際にその女性がポケットから何かを出した。それはモデルガンの弾だった。それを前原の手の上に置いた。

「もう二度と、誰も傷つけないと約束してください。そしてこの弾はその誓いとしてあなたが持つていてくれますか？」

「はい！もう・・・誰も傷つけません」

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

前原はいつものベッドの上に座りながら頭を押さえていた。そして上のほうにある窓からきれいな夕焼けが見えた。

「――っ、くっ、あっ・・・はあ、はあ、あっ」

目の前にはレナがいた。手には鉋を持っていた。そして前原の手には金属バットを握っていた。二人がいる場所はどこかの屋根の上だった。そして二人は向き合っている。

「うおおおおおお」

「ああああああああ」

二人は手に持っているものを振りかぶって振り下ろした。

ガキイイーン――

鉋とバットが当たって火花が散った。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ……………」

バタンツ――

そして前原はベッドに倒れた。

「葛西」

「はい」

詩音はどこかの広い部屋にいた。その部屋は高いビルの一部屋だった。

そして入り口には葛西と言われて返事をした黒いスーツの男が立っていた。

「詩音さん、彼女が見つかりました」

葛西は詩音にひとつのファイルを手渡した。

「ふふ、こんなところに隠れてたんですね。やっと、やっとすべてが揃ったね……ふふふ………」

第三話後編 増え続けるカケラと疑問。人生の重さとは!! (後書き)

最近、すっかり忙しくなってしまった黒狐です!

なのでこれからは一週間に一回更新とさせていただきます。
すいません。

でも暇があればどんどん更新していければいいと思っています。

感想やアドバイス、意見や要望、誤字・脱字報告などお待ちしております!
気軽にください!

作者のやる気のためにwww
初めて感想をいただけたので、とても感動して涙が出そうでした!
(出てないんだけどねwww)

感想を送ってくれた人、本当にありがとうございました!

前にも聞いたんですが、話の終わりに次回予告的なものを入れた方が
いいでしょうか?

今度から後書きにひぐらしのメンバーなどを呼びたいと思っています!
す!

PS、Twitterはじめました! Black|fox37です!
<http://twitter.com/#!/Black|fox37>

第四話前編 ついにレナの秘密が！！悲しき友情の真実

第四話前編 ついにレナの秘密が！！悲しき友情の真実

ピンポーン――

瀬川の家チャイムが鳴った。鳴らしたのは詩音だった。
ガチャーン

「どうしたの？」

「忘れ物を届けにきただけですよ」

詩音は瀬川の忘れ物のファイルを差し出した。

「ありがとう」

瀬川はそのファイルを受け取った。

「そのようすだと、家でも仕事をしてるんですか？」

「ええ、少し片付けたい仕事があってね」

「そうですか、じゃあー」

「ママ、誰かきてるの？」

瀬川の後ろから小さな幼稚園児くらいの女の子の声が聞こえた。

その子の手にはウサギの人形が握られていた。

「あら、瀬川さんのお子さんですか？」

「ええ」

詩音はその小さな女の子に向いていった。

「こんにちは」

「こ、こんにちは。瀬川灯です」

「えらいねー灯ちゃん。じゃあ、この辺で」

「ええ、ありがとう」

「ばいばい」

灯は小さな手で手を振ってきた。

「ばいばい」

詩音も手を振り替えした。そして詩音は瀬川の家から出て行った。

目の前にはレナがいた。手には鉈を持っていた。そして前原の手には金属バットを握っていた。二人がいる場所はどこかの屋根の上だった。そして二人は向き合っている。

「うおおおおおお」

「あああああああ」

二人は手に持っているものを振りかぶって振り下ろした。

ガキイイイン——

鉈とバットが当たって火花が散った。

そして違う映像が流れた。

周りはゴミの山で囲まれていた。周りには夕焼けで辺りがオレンジ色に染まっていた。今度は白いワゴン車の下にそのレナという少女の周りに男女2人の死体があった。レナは上下が黒色のジャージを着ていて全身に少し血が付着していた。下にはバラバラの死体があった。レナは男の首をのこぎりで切っている最中だった。そして前原に気がついてレナは振り返った。そして目と目があった。

「はっ！はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」
ガチャン——

詩音が部屋に入り前原に近づいた。

「調子はどう？」

「はあ・・・はあ・・・あの・・・俺とレナが・・・屋上で、くっ！」

「焦らなくてもいいよ。これから思い出すんだから。だからゆっく

りと休んで」

「……………今回の解答者よ」

詩音は片手に持っている資料を前原に渡した。そして前原がそれを受け取り、資料を見た。

「——っ!!」

前原は急いでほかの資料を見た。

「……これだけですか？」

「ええ……後半はいつも通りに……………」

そして詩音は部屋から出ていった。

前原はその資料にある写真を見た。横には竜宮礼奈と書かれていた。その人は自分が頭の中で見ていたレナと似ていた。前原はただその写真を見つめていた。

ピンポーン——

「はい」

とあるマンションの扉から出てきたのは竜宮礼奈だった。扉の前には黒いスーツを着た男がいた。

「えっ！」

「竜宮礼奈さんですね？ あなたをザ・クイズショウへご招待いたします」

その男は内ポケットから招待状を差し出した。そこにはTHE QUIZ SHOWと書かれたロゴが書かれていた。

礼奈はそれを受け取った。そして裏面を見た。

招待状

今回、黒狐テレビ

「ザ・クイズショウ」の解答者に、

日本全国一億三千万人の中から

見事選ばれました。

よって当番組にご招待させていただきます。

黒狐テレビ「ザ・クイズショウ」

「葛西さん、どういふことですか？」

「詩音さんの伝言です。真実を明らかにしたいなら協力してくださいと言っておられました」

「・・・・・・・・・・」

銀河テレビの休憩所にザ・クイズショウのスタッフはいた。

「あの、なんで前原さんが司会に選ばれたんですか？」

新堂がみんなに質問をした。

「それは園崎さんが推薦したんだよ」

「えっ！」

「よく見つけてくれたよな。あんなすごい人」

新堂は俯いて何かを考えていたようだった。

「本番10秒前」

ブザーとともにその声は聞こえてきた。

詩音は笑みを浮かべていた。

「8、7、6、5秒前」

スタジオと放送室にそのカウントダウンは響いた。そして辺りが暗くなっていった。

「4、3、2、1」

そしてON ALRと言う文字に赤い灯りが付いた。

そして番組が始まった。

真っ暗の中、ステージの中央の奥に白い灯りが当てられた。そこには前原が立っていた。

「人は誰でも華やかな夢に憧れる。世界中を旅したい者。大きな家に住みたい者。はたまた大金を手にしたい者。全ての夢の終着点。それがこの、ザ・クイズショウ——」

その言葉が終わるとさまざまな色の光がいろんな所に当てられる。観客からは、拍手の音がし始めた。前原はステージの前に立っていた。

「さあ、今週もやって参りました、ザ・クイズショウ。司会はわたくし、MC・MEBARA。そして今週の解答者はこの方、大学生、竜宮礼奈」

後ろの扉が開いた。そして白い煙の中から竜宮礼奈が姿を現した。そして観客席から拍手が聞こえてきた。礼奈はお辞儀をして前に進んだ。

そして画面に竜宮礼奈のプロフィール映像が流された。

『竜宮礼奈。大学生。岐阜生まれ。小さいころに両親が離婚。中学生のときに、ある事件で父が他界。それから垣内市に移り今は大学生活を送っている』

「いやー、苦労されたんですね、竜宮さん」

「久しぶり・・・圭一君」

「えっ！……あっ……くっ、はあ……あっ——」

前原は頭を押さえ始めた。頭には圭一君という言葉が響きわたった。

観客席はざわざわし始めた。礼奈は心配そうにしていた。前原がそのことに気づいて頭の痛みを無理やり押さえ込んだ。

「・・・すいません。昨日飲みすぎちゃって。二日酔いの状態で来ちゃいましたー」

観客席からは笑い声が聞こえてきた。

「大丈夫？ 圭一――」

「おっと、私の名前はMC・MEBARAですよ、竜宮さん。さっき言ってたのに忘れるなんてひどいなー」

「・・・すいません」

「それではここでルールをおさらいしましょう。このザ・クイズショウは全七問のクイズによって構成されます。クイズに正解するたびに獲得賞金は上がっていき、全七問を突破した時点であなたの獲得金額は一千万。その後、あなたはその一千万を賭けてドリームチャンスに挑戦することが出来ます。そのドリームチャンスに挑戦し、そして見事、クリアすることができれば、あなたが手にすることができるのは夢。文字通り、一つだけ夢を実現することができるのです。よろしいですね？」

「はい」

「それではお伺いしましょう。あなたの夢は何ですか？」

「ある人と再会することです」

「そのある人とは？」

「そ、それは・・・」

「言い辛いですか？ まあ、テレビですので言えない事もあるでしょう。ではあなたがドリームチャンスをクリアしたあかつきには、我々が勢力を挙げてそのある人を探し出しましょう」

「ありがとうございます」

「それでは、竜宮礼奈がある人との再会をかけてこのザ・クイズショウに挑みます。イツ、ショウタイム」

前原が両手を高く上に上げた。そしてふたりは握手を交わした。

「それでは第1問

岐阜県の興宮に本店があり、カラフルな衣装やいろどりのスイーツで有名な各地にチェーン展開しているメイド喫茶レストランの名前は次のうちどれ？

A、ジョニーズ B、エンジェルモート C、うぐいす D、ドリム

「Bのエンジェルモート」

「正解！では第2問

男性が情婦などに他の男性を誘惑させ、その情事を種に相手の男性から金品をゆすりとることを何と言うか？

A、振り込め詐欺 B、美人局 C、窃盗 D、フィッシング詐欺

「・・・Bの美人局」

「正解！では第3問

岐阜県の雛見沢の守り神といえば次のうちどれ？

A、恵比寿 B、天照大御神 C、ゼウス D、オヤシロサマ

「――っ！」

何か前原の頭に痛みが出てきた。

「Dのオヤシロサマ」

「・・・・・・・・正解です！いやー、すごいじゃないですか、竜宮さん」

「いえ、それほどでも」

「竜宮さんは雛見沢に住んでいたんですか？」

「ええ、知っているでしょ」

「・・・ええ、もちろん知っていますよ」

「あと資料によりますとそこでは自分のことをレナって呼んでたそうですね、なぜそう呼んでいたんですか？」

「・・・・・・・・礼奈から『いやなこと』の『い』を取ったの」

「それだけですか？」

「ええ」

「そんなことでなくなったらいいんですけどねー」

「圭い——」

「では次の問題。おっと、次の問題はラッキー問題ですよ！
では第4問

雛見沢連続怪死事件、通称オヤシロサマの祟り、では5年目の被害者は次の内、誰？

A、夜神月 B、涼宮ハルヒ C、乙部彰 D、富竹・・・ジロウ・・・」

前原は富竹ジロウで何かが引っかかった。

「くっ！はあ、はあ、あっ！！！」

前原はどこかの森の中にいた。そして目の前にはレナがいた。何かおびえている様子に見えた。

「富竹さん・・・殺されたんだって」

「えっ？」

「綿流しの夜、私たちは鷹野さんと富竹さんにあったよね？あの直後に、2人が襲われたんだって。富竹さんはオヤシロサマの祟りにあつてのどをかきむしって死んだの。そして鷹野さんは岐阜の山奥で焼き殺されてしまったの」

「はあ、はあ、はあ・・・」

礼奈がこちらを見て心配そうな顔をしていた。

「だいじょー」

「・・・さあ、竜宮さん・・・お答えください・・・」

「Dの・・・富竹ジロウ」

「・・・正解！」

放送室で瀬川はテレビ画面を見つめて何かを考えていた。
(富竹ジロウ………何でこんな問題があるの?)

「では第5問

竜宮礼奈が雛見沢で起こした事件は次のうち、どれ?

A、雛見沢連続怪死事件 B、誘拐事件 C、細菌テロ D、雛
見沢営林署人質籠城事件」

「くっ!!!!」

前原は雛見沢の学校の教室にいた。周りはいろいろ騒いでいた。
すると教室のドアが開いてレナが入ってきた。小学生の女の子の肩
を掴み、片方の手には鉋が握られていた。そう、レナは女の子を人
質に取っていた。

「レ、レナ……!？」

「みんな起立ー、教室の真ん中に集まってー。机は周りにどけちゃ
ってねー」

何がなんだかわからずにみんなはただ凍りついていた。

「魅いちゃん。委員長でしょ? みんなに指示して」

「……レ……レレ、レナ……あんた………何をやって

――」

詩音とそっくりな人が言った。その人は詩音とは違って髪を結ん
でいた。

――バツギヤツ

レナが思いっきり鉋で教壇を叩いた。そして天板に食い込む鉋を抜
いた。レナはいつもと全く違った。殺意がどんどん伝わってきた。

「……レナ……お前……」

「圭一君……これが私の逆転の一手だよ」

そうしてレナは雛見沢分校を占拠したのだ。

「はあ、はあ、はあ……さあ……りゅ、竜宮さん……
はあ……答えを……どうぞ」

頭を押さえながら言った。前原は汗でびっしりだった。

「……圭一君……知ってるでしょ？」

「……え、ええ……私は、あなたの……すべてを知っています」

「じゃあ、何でこんな問題出すの？」

「す、すべてをさらけ出して……犠牲を払って夢を手に入れる……
それがザ・クイズショウだからです」

「……」

二人は睨み合っていた。

第四話前編 ついにレナの秘密が!!! 悲しき友情の真実(後書き)

黒狐「どうも、黒狐です。前に言っていたように今回はゲストの方を読んでいきます!では自己紹介をお願いします!」

圭一「よう!みんな!!!俺、前原圭一。よろしくっ!!!」

黒狐「……元氣ですね」

圭一「ああ、俺はいつでも元氣だぜ!!!!」

黒狐「という訳で今回は前原圭一さんをお呼びしました。それでは圭一さんはこの作品をどう思いますか?」

圭一「面白いのは面白いんだけど……暗いな」

黒狐「ぐはっ!」

圭一「どうしたんですか?黒狐さん」

黒狐「いや、友達に『お前の作品はストーリー全体が暗くて、頭を使う』なんて言われてね。ははは。頭が賢そうなやつに見えるらしい、それに感想は二件しかもらってないから……どうしたらいいんだ—————」

圭一「黒狐さん、落ち着いてください」

黒狐「はっ!取り乱してすいません。えーと、感想やアドバイスなどどんどん募集しています!」

圭一「感想送ってあげてください」

黒狐「さてここからが本題なんですが」

圭一「まだ入ってなかったのかよ」

黒狐「ライアーゲームやカイジ的なオリジナル小説を一年前に書いていたデータが遂に見つかりました!!!!偶然なんだけどね」

圭一「へえー」

黒狐「今の所、22ページです」

圭一「少ねえー」

黒狐「:それをもう少し長くして投稿しようかと思っています」

圭一「ということは……」

黒狐「大丈夫です。この小説は必ず一週間に一回更新します!」

圭一「そのオリジナル小説を書く余裕があったら更新を二回にした方がいいんじゃないか?」

黒狐「クイズ問題や圭一の過去を組み入れるのが毎回毎回大変なんだ。だってしろろとだからだ!!!」

圭一「威張るな!」

黒狐「だからオリジナル小説というジャンルにも手を出したいな」と

圭一「最近、モーシヨンキャプチャーのスタッフ面接に受かったそうじゃないですか、しかも夜遅くまでかかるらしいし」

黒狐「それのご褒美としてアイマスSPを1500円で購入した」

圭一「馬鹿かあんたはっ!」

黒狐「うるせー、昨日だってこの小説の第四話を書くのに3時半まで起きてたんだ!」

圭一「逆切れかよ……まあ、やる気はあるんだよな」

黒狐「当たり前だ!」

圭一「この小説が順調だったら別にいいんだけどな」

黒狐「まあ、オリジナル小説の方は修正したらアップしたいと思っています!そのときは是非読んでください。そしてTwitterの方もはじめたんでよければ見てください。お願いします」(土下座をしている)

圭一「必死だなー」

黒狐「ということでは今回は初の試みとして圭一さんをお呼びしました!最後に皆さんに募集していることを発表します!

1、感想やアドバイスをください!マジで!

2、ゲストとして読んでほしいキャラ!

3、t w i t t e rやm i x iにアクセスス!

4、誤字・脱字報告!

この4つです。感想などは僕のやる気やこれからの方針などを決めていきたいので皆様の感想が欲しいんです。僕がプロになるため

に！！！」

圭一「プロは無理だろ」

黒狐「では今回はこの辺でお分かれしましょう！今回は黒狐と」

圭一「前原圭一で」

圭一・黒狐「「お送りいたしました！！！！！」」

黒狐「読んでくれた皆様、本当にありがとうございます！これか
らもがんばります！では、さようなら！！！！」

第四話後編 ついにレナの秘密が!! 悲しき友情の真実(前書き)

この辺りから『ひぐらしのなく頃に』が多く関わってきます。

できれば原作を読むことをお勧めします!

僕も皆さんに分かるように頑張って説明しますので、分かりづらいところがあれば教えてください。

お答えしますんで。

雑談はここまでにして、本編をお読みください!
ではまた後書きで!!!!

第四話後編 ついにレナの秘密が!! 悲しき友情の真実

「どうしました?・・・竜宮さん」

「・・・D」

「・・・正、解・・・です・・・」

「・・・」

「・・・それでは第6問

茨城の中学校であなたが起こした事件は次のうちのどれ?」

「な・・・なんで・・・こんな問題を出すの?・・・あんなに・・・あんなに償ったのに」

「問題が続けます。」

A、窃盗事件 B、誘拐事件 C、障害事件 D、爆破事件」

「・・・」

「どうしました? 竜宮さん」

「・・・して・・・どうして。それでも私はいっぱい反省して、後悔して・・・生まれ変わろうと、やり直そうと思ってここまでできました。私は・・・私はいつまでこの罪に償いを続けないといけないの。罪は消えないことは十分にわかってる。でも・・・でもこんなのおかしいよ。それともまだ足りないの? 足りないなら私はどんな罰を受けたらいいの? もう幸せになる権利なんてないんですか?・・・私が傷つけてしまった友達、迷惑をかけてしまった人たちはもっと辛い思いをしてるんだって。いまさら謝ったってもう遅いのは分かってる・・・分かってるけど・・・」

礼奈の目から涙がこぼれ落ちた。

「・・・う・・・うううっ・・・っ、う・・・」

そして顔を上げた。

「もし、もしこれが懺悔というなら。私は・・・償うために夢をかなえる・・・Cの・・・傷害事件・・・」

「……正解です! ……童宮さん、ひとつだけいいですか? 私はここに書かれた問題を読んでいるだけです。あなたの懺悔など私には関係ない。私はあなたの夢を叶えるためにここにいるんです……よろしいですね? 」

礼奈は下を向いたままだった。

「では第7問。まずはこちらをご覧ください」

テレビ画面には楕円状の大きな毒々しい赤い色の錠剤が映っていた。

「……!!」

この薬は「PC」といいますがこのなかであてはるその薬の効力はどれ？

A、熱を下げる B、のどの痛みを抑える C、かゆみを抑える

D、自我を失う」

「・・・・・・これ・・・・・・このせいで私・・・・・・いつも急に自分が分からなくなってた・・・・・・そういえば・・・・・・あの時も・・・・・・」

ガ
シ
ャ
ー
ン
――

粉々に割れたガラスの破片が飛び散った。そこは茨城の中学校の廊下だった。

その中に礼奈がゆっくりと歩いていった。着ている制服にはあちこちが血で染められていた。その手には血がついている金属バットが握り締められていた。

周囲は近づくことができないクラスメートが怯えたためでこちらを見ていた。

「あははははははははは・・・ あつ はははははははははははははははははは

はははは！！！」

高らかな笑い声が廊下中に響き渡った。口元に不気味な笑みを浮かべながら。

「竜宮さんはこれを飲んでいたんですか？」

「はい、茨城にいた時に飲んでいました」

「では、答えをどうぞ」

「・・・・・・Dの自我を・・・・失う」

「・・・・正解です！おめでとうございます。一千万円獲得です！」

前原は立ち上がって拍手をした。

「さあ、竜宮さん。あなたはこの一千万円を賭けてドリームチャンスに挑戦することにできますが・・・・どうしますか？」

「・・・・・・挑戦します」

前原はすぐにステージの前に向かいカメラに指を指しながら叫んだ。

「ドリームチャンス！」

その言葉を言い終ると音楽が鳴り始めた。前原はその音楽に合わせて踊り始めた。

「竜宮さん、もう一度お聞きします。あなたの夢は何ですか？」

「ある人と・・・・再会することです」

「そのある人はまだ言えませんか？」

「・・・・・・私が茨城の殺傷事件で傷つけてしまった・・・・親友だった・・・・・・尾崎、渚ちゃんです」

「承知いたしました。あなたが見事ドリームチャンスクリアした暁にはあなたのかつての親友の尾崎渚さんとの再会をすることを

約束いたしました。

では問題

そのかつての親友であった尾崎渚が童宮礼奈対して思っている気持ちは次のうちどれ？

A、一生許さない B、知らない C、どうでもいい D、許してあげたい」

「・・・・・・・・・・」

「難しいですか？・・・・では奥義でも使いましょうか？」

「・・・・はい」

「出ました。奥義です！」

前原は立ち、手を斜め上に掲げた。そして画面には以心伝心、召喚、導きの手のアイコンが並んでいた。

「それではルーレットスタート！」

前原はその棒を回し始めた。それと同時にその上を光が回り始めた。

礼奈は前にあるボタンを押した。

光は以心伝心の上で止まっていた。

「以心伝心」

前原は胸の上に手でハートマークを作った。

「今、ある人と電話が繋がっています。もしもーし」

「はい」

「――っ！」

（もしかして・・・・・・・・この声！）

礼奈は何かを探すように上を向いた。

「ではお名前をお願いします」

「尾崎渚です」

「では尾崎さん童宮さんにヒントをお願いします」

「なぎ、さ・・・・ちゃん？渚ちゃんなの？」

「・・・・・・・・。礼奈」

渚の声は礼奈を包み込むような響きだった。

「……………私……………礼奈のこと許そうと思う」

「えっ!!!!」

「……………会いたいな。また会えないかな、どこかで……………変なこと言ってごめんね。いろんなことがありすぎて……………今は言葉にできない。もし会ってくれるなら今の問題に答えて」

礼奈はぼろぼろ涙が出てきた。止めようとしても止まらなかった。自分の目の前の机に涙がぽとぽと落ちていた。

「……………では尾崎渚さん、ありがとうございました。……………さあ、竜宮さん、答えをどうぞ、あなたの、夢のために!」

「……………でい……………Dの……………許して……………あげたい……………」

「……………正解です! ドリームチャンス、クリアーです!!!!」
観客席からは拍手が聞こえた。

「では少し早いですが、召喚——」

前原はスタジオの奥の扉に手を向けた。その扉から尾崎渚が現れた。

「な、渚ちゃん!」

「れ、礼奈!」

渚は礼奈も元へ走った。そして礼奈を抱きしめた。

「礼奈! 礼奈!」

「ごめんなさい……………渚ちゃん、本当にごめんなさい!! ごめんなさい、ごめんなさい……………うわあああああああ——」

「礼奈……………泣かないで」

「う……………ううう……………な、なぎ……………さ、ちゃん……………」

「くっ!!」

前原は頭を押さえたが、すぐに立て直した。

「……………竜宮さん、人が過ちを犯すのは当然なことです。問題はどれだけ反省したかということです。でも償っただけではもちろん過ちは消えません。死ぬまでそのことを背負っていかなければ

なりません。過ちをすることは成長することでもあるんです。過ちを犯して信頼が強くなる、がんばろうと思える、自分が成長することだってあるんです。だからその絆をこれからもずっと続けていつて欲しい。夢を叶えるためには過ちも必要なんです………なんつってー」

前原はいつものように顔の表情をころっと変えてステージの前へと向かった。

「今回の解答者、竜宮礼奈は見事、夢を実現させることができました。次週、自らの夢に挑むのは果たして……誰なのか？」

そして前原はカメラに指を差した。

「あなたの夢を、叶えます」

観客席からは拍手が鳴り始めた。そして前原はステージから出て行った。

「園崎さん！」

放送室から出て行くこうとしている詩音を新堂が引き止めた。放送室は詩音と新堂の二人つきりだった。

「どうしたの？忘れ物？」

「園崎さん……あなたはザ・クイズショウで何がしたいんですか？」

「……知ってどうするの」

「そ、それは……」

「もうすぐわかる 때가来るわ、それまで待つことね」

詩音は放送室から出て行った。

新堂は黙ってみてるだけしか出来なかった。

新堂は園崎詩音とMC・MEBARAの関係を調べたが出てこなかった。

「はあ、はあ、はあ……」

前原はいつもの部屋に戻って、ベッドに倒れこんだ。

そうだ、レナが雛見沢宮林署人質籠城事件を起こしたのは、ある誤解から始まったんだ。レナのお父さんは美人局のターゲットになってしまう。それを知ってしまったレナは、その美人局を仕掛けてきた二人を殺してしまう。そして何事もなかったかのように、いつも宝探しをしている場所、いわゆるゴミ山で死体を処理しているところで、圭一、魅音、沙都子、梨花と遭遇してしまう。しかし、そこで全員が持っていた罪を認め合い、死体処理に協力することになった。本当の仲間になることが出来たのだ。

しかし、本当の悲劇はこれからだった。

レナは鷹野三四という女性からオヤシロサマの祟りについて書かれたスクラップ帳を受け取る。そのスクラップ帳の中に書いてあるのは真実は全くの無い仮説だった。

そして綿流しというお祭りのよるに鷹野三四と富竹ジロウは何者かによって殺されてしまう。そう言うことからレナはスクラップ帳の内容を信用してしまう。

雛見沢村を仕切っているのは園崎家だった。園崎家は雛見沢と周辺の町の親族の数千の票を固めて政治家も頭が上がないような家だった。議員からヤクザまで存在する家なのだ。そして謎も多かった。話を戻すが、レナは園崎家が雛見沢村を細菌テロを引き起こそうとしていると思い込んでしまったのだ。

レナは家から逃亡してゴミ山に身を隠した。

それからレナは警察の大石という人に園崎家が雛見沢村を細菌テロを起こすということを伝える。大石はレナの身柄を保護しようと思った。

でも園崎魅音はレナが美人局の二人を殺したことがバレたと思い込み、園崎家もレナの身柄保護に動いた。

矛盾が生じ合い、レナはさらに追い込まれることになってしまった。

園崎魅音は矛盾が生じていることをしって警察と話し合い、大石はレナが言っていたということがデタラメだということを理解する。そして何も知らないレナがとった策は、圭一たちの学校である雛見沢宮林所を子供ごと占拠して警察に園崎家の家宅搜索などを行ってもらったことであつた。

そして圭一の活躍により、レナを精神を回復させることや過ちを気づかせることが出来たのだ。

レナの籠城事件までは思い出せた……でも、肝心なのはその後だ……。まだわからない……。園崎詩音。彼女は、雛見沢村の隣町、興宮に住んでいる園崎魅音の双子。俺と同年だ。詩音は一体何がしたいんだ。目的は……

第四話後編 ついにレナの秘密が!! 悲しき友情の真実(後書き)

黒狐「黒狐と」

圭一「前原圭一の」

黒狐・圭一「トーキングSS!!!」

圭一「……黒狐さん」

黒狐「んっ? どうかした」

圭一「トーキングSSってなんですか」

黒狐「いやー、一度ラジオとかやってみたいなーとか思って雰囲気だしてただけだけど」

圭一「じゃあ、やってみたらいいんじゃないかと……」

黒狐「まだブログやサイトとか持ってないからって理由とやり方を調べるのがめんどくさいから」

圭一「……」

黒狐「このトーキングSSも仮なんだけどね」

圭一「もう何でもいいぜ。さっさと本題に入ろうぜ!」

黒狐「そうですね! えー、今回の内容なんですけど、ザ・クイズショウの番組の進行は問題はないと思います。でも圭一の過去に自信がありません。僕も精一杯皆さんが分かりやすいように努力はしてみんですが、伝わってればいいと思います」

圭一「ああ、そうだな。原作を読んだ人は分かんと思うんだが、読んでない人はどうなんだろうな」

黒狐「分からない場合は前書きでも言ったように分かりづらいところなどがあれば、教えてください。すぐに訂正しますんで」

圭一「ひとつ気になったんだが、尾崎渚って誰なんだ? 原作には登場していなかったはずだと思うんだけど……」

黒狐「ああ、尾崎渚はDSで登場してるキャラクターだ。他にも面白いストーリーやキャラ設定があって、是非お勧めします!」

圭一「へー」

黒狐「そして皆さんに重大発表があります！」

圭一「えっ！何ですか？」

黒狐「僕こと黒狐はオリジナル小説の連載を開始しました！」

圭一「始めちゃったんだ……」

黒狐「ええ、始めちゃいました！では今から告知をします！」

圭一「ははは……」

●タイトル●

TRUTH

●ジャンル●

ライアーゲームやカイジのような頭脳戦

<http://ncode.syosetu.com/n7860u/>

黒狐「ぜひ見てください！結構自信作ですwww」

圭一「ひぐらしはまさかこの話で終わりじゃないですよね……」

黒狐「案はあるっちゃあるんですけど」

圭一「けど？」

黒狐「いや、何でもないです。このひぐらしの話の反響が良ければ連載使用かと思っています。今のところは未定です」

圭一「黒狐さん」

黒狐「んっ？」

圭一「ぜひ頑張りましたよ。トークングSS!!!!」

黒狐「続いたらいいですねwww」

圭一「ああ、きっと続く！続かなかったら俺が黒狐の家に金属バットを持って突入する！」

黒狐「怖い怖い怖い。圭一落ち着けて！」

圭一「すいません」

黒狐「じゃあ、今日はこの辺で！」

このトークングSSは黒狐と!」

圭一「前原圭一で」

黒狐・圭一「お送りしました!」

黒狐「感想・アドバイスなど待ってます! 誤字・脱字などがあれば報告してくれば嬉しいです! 分かりにくいところがあれば報告してください!」

第五話前編 伝えられる真実！限界の司会者

前原はベッドに座って俯いていた。

前原は今まで見てきたものがわからなくなってきた。銃で足を打たれて崖から落ちたこと、竜宮礼奈が学校を占拠して逮捕されたこと、自分の過ちなどがすべてつながっていない。銃で足を打たれていたことが全くわからなかった。

しかし、雛見沢で出来た友達について思い出すことが出来た。

竜宮レナ。

園崎魅音

北条沙都子

古手梨花

そして、園崎詩音

ガチャン――

すると詩音が部屋に入り前原に近づいた。

「今回の解答者よ」

詩音は片手に持っている資料を前原に渡した。そして前原がそれを受け取り、資料を見た。

「えっ！なんで……」

「3問目までの問題は机においてあるから」

「……詩音っ！」

「あれっ？私のことがようやくわかった？」

「お前の目的は何だ！」

部屋は前原の声が響き渡った。

「悲しいですね、やっとの再会なのに」

「詩音っ！」

「もうすぐわかるわ……知りたければ思い出しなさい」
詩音は部屋から出ていった。

そして番組まであと2時間を切っていた。
放送室では今日の放送の用意をしていた。

するとそこに新堂があわてて放送室に入ってきた。

「詩音さん、まだ今日の解答者が来ていません。どうしますか？」
「……とりあえず連絡を取ってみて」

「わ、わかりました」

そして新堂は携帯電話でその解答者の番号にかけた。

「もしもし、ザ・クイズショウのスタッフの新堂ですが……」
「えっ、そんなの困ります！もうすぐ始まってしまっんですよ」
でも何か電話でもめていた。

「ちょ、ちょっと！もしもしっ！もしもし！」

「どうしたの？」

瀬川が新堂に問いかけた。

「それが……今日の解答者が来れないそうです」
「えっ！」

「どうしますか？瀬川さん！」

「と、とりあえず。私が電話をかけてみるから」

そして瀬川は放送室から出て行った。

しばらくして瀬川が帰ってきた。

「どうでした？」

「だめだったわ………とりあえず他の誰かに出演を依頼しま
しょう」

「瀬川さん……一つ提案があるんですけど………」

詩音が会話に入ってきた。

「何？」

「せっかくなので、瀬川さんが解答者になったらどうです？」

「わ、私！何で？」

「僕がやりますよ」

新堂が間に入ってきた。

「それはこの番組のプロデューサーですし、そのほうが盛り上がるでしょう？ 私は今日、新堂君にディレクターのことなどを教えたいので」

「べ、別にいいですよっ！こんなときに」

新堂が言ってきた。

「……わかった。私がするわ」

「ありがとうございます、瀬川さん」

詩音は少し笑みを浮かべた。

「本番10秒前」

ブザーとともにその声は聞こえてきた。

「8，7，6，5秒前」

スタジオと放送室にそのカウントダウンは響いた。そして辺りが暗くなっていった。

「4，3，2，1」

そしてON ALRと言う文字に赤い灯りが付いた。

そして番組が始まった。

真っ暗の中、ステージの中央の奥に白い灯りが当てられた。そこには前原が立っていた。

「人は誰でも華やかな夢に憧れる。世界中を旅したい者。大きな家に住みたい者。はたまた大金を手にしたい者。全ての夢の終着点。それがこの、ザ・クイズショウ——」

その言葉が終わるときさまざまな色の光がいろんな所に当てられる。観客からは、拍手の音がし始めた。前原はステージの前に立ってい

た。

「さあ、今週もやって参りました、ザ・クイズショウ。司会はわたくし、MC・MEBARA。そして今週の解答者はこの方、黒狐テレビプロデューサー、瀬川希」

後ろの扉が開いた。そして白い煙の中から瀬川希が姿を現した。そして観客席から拍手が聞こえてきた。瀬川はお辞儀をして前に進んだ。

そして画面に瀬川希のプロフィール映像が流された。

『瀬川希。ザ・クイズショウのプロデューサー。黒狐テレビ入社後、報道部のプロデューサーとして活動。そして数々の有名番組などを手がける。そして現在に至る』

観客席からは拍手が起こった。

「ようこそ。ザ・クイズショウへ」

「どうも」

「ザ・クイズショウのプロデューサーということで」

「そうですね」

「そんなに話したこともないんですけど……」

「そうですね」

観客席からは笑い声が聞こえた。

「実はですね、今日来るはずの解答者が急に来れなくなってしまった、代わりとして当番組のプロデューサーが解答者となったんですよ。さすがプロデューサーですよ」

観客席からは拍手が起こった。

「さて今回は特別ということでルールを少し変更させていただきます」

「えっ？」

「今回の問題はあなたに関係があるものです。皆さんに我々のプロデューサーのことを知ってもらいましょうよ。ねえ、皆さん」

観客席からは拍手が鳴り始めた。

「ではお尋ねします。あなたの夢は何ですか？」

「子供へのプレゼントとして最新のおもちゃなど希望します」

「えっ？もっと凄いものでもいいんですよ？例えば、お菓子一年分とか、世界旅行とか……」

「さすがに、自分の番組でそんなことは」

「そうですね。いやー、さすがプロデューサー！プロデューサーの鏡ですよ！！！そう思いませんか？みなさん」

また観客席からは拍手が起こった。

「ではあなたがドリームチャンスをクリックした暁には、最新のゲーム機やおもちゃなどを差し上げましょう」

「ありがとうございます」

「では瀬川希がお子様のためにこのザ・クイズショウに挑みます。イツツ、シヨウタイム」

前原が両手を高く上に上げた。そしてふたりは握手を交わした。

CMに入ってから解答者席にいる瀬川に詩音が近づいた。

「どうですか、解答者席の座り心地は？」

「あまりいいものじゃないわね」

「じゃあ、がんばってください」

「園崎さん！」

詩音は放送室に戻ろうとしたが、瀬川が呼び止めた。

「絶対に負けないから」

詩音は笑みを浮かべて去っていった。

「それでは第1問

あなたが報道の仕事で行った場所はどこ？

A、沖縄 B、雛見沢村 C、北海道 D、アメリカ」

「……Bの雛見沢村」

「正解です！では第2問！

あなたが雛見沢村で調べていたものは何？

A、雛見沢村の地形 B、雛見沢村の食料 C、雛見沢村の自然

D、オヤシロサマの祟り」

「Dのオヤシロサマの祟り」

「正解です！いやー、瀬川さんはそのことを調べていたんですね」

「ええ」

「オヤシロサマの祟りを調べるということを立案したのは誰なんですか？」

「私です。やはり事件なのでそういう事件も扱っていかないと思いますして」

「そうですか。そのおかげで視聴率がとても良かったそうですね」

「いえ」

「では第3問

雛見沢村で起こったことはどれ？

A、連続放火事件 B、隕石の落下 C、 D、雛見沢…大…災

害……くっ！」

前原は頭を押さえた。

しかし何も思い出せない。映し出されない。思い出せない。ただ何かがつかかっている。

「Dの雛見沢大災害」

「はあ…せ……正解です………」

「だ、大丈夫？」

瀬川は前原に言ってきた。

「…は、はい………はあ…だ…大丈夫…で、です」

「本当に……」

「では第4問」

前原はおそろおそろ問題のカードをめくった。

「……っ！」

第五話前編 伝えられる真実！限界の司会者（後書き）

黒狐「黒狐と！」

圭一「前原圭一の！」

黒狐・圭一「トーキングKK！！！」

黒狐「暑くなってきましたねー」

圭一「そうですね。ってかタイトル変わってるんだけど……」

黒狐「Kが二人だということで変えてみました！前は仮だったからね。このコーナーが好評かはわからないけど……」

圭一「ははは……」

黒狐「オリジナル小説の話なんですけど、一話が遂に終わりました！そして書いていた小説の登場人物を変えてしまったせいで、もう一度作り直しますww」

圭一「オリジナル小説とこの小説は両立できてるのか？」

黒狐「最近は大変だったからあまり進んでなかったなー。今週からテストだから進まないなww」

圭一「よしバットもってこーい」

黒狐「つかもう持ってんじゃん！っと、とりあえずバット下ろそう。なあ？（なんか圭一のキャラが違う気がww）」

圭一「なんか言ったか？」

黒狐「いえ、何も。まあ、これからは気楽に進めるつもりです」

圭一「大丈夫なのかよ……」

黒狐「じゃあ、早速本題に入っていきますよー！」

圭一「おー！」

黒狐「今回は瀬川さんが解答者になりました！そして、そこで難見沢大災害の真実は語られるのか？詩音の目的は……！」

圭一「本格的になってきたぜ！」

黒狐「そうですね！今回大変だったのは瀬川のことです！問題を考えるのにも時間がたくさん取られてしまいましたwwこれから

いろいろと大変です」

圭一「そうですね、次の解答者も気になりますしね！」

黒狐「最近のご飯を作るのがめんどくさくなってきた。でも作ってるけどね」

圭一「俺は料理のこと、さっぱり分からないけどなwww」

黒狐「確か、ご飯も炊けなかったんだっけ」

圭一「……………」

黒狐「じゃあ、ここで黒狐からこの小説を読んでくれている皆さんにおしらせがありまーす！」

圭一「何だ？」

黒狐「ザ・クイズショウに出してほしいキャラクターを募集します！」

圭一「おー！」

黒狐「アニメの名前を感想の欄に書いて送ってきてくださいー！解答者はこのキャラがいいーとか言う場合はアニメの名前の下辺りに詳細などを書いてくれたらいいです！」

圭一「どうしてこんなこと募集するんですか？」

黒狐「ノリだなwwwそれにみんなが何を期待しているのかも気になりますしね！あと送ってきたキャラクターが採用になったときはこの小説の番外編として更新する予定です！」

圭一「おおー！じゃあ、俺たちのこのコーナーはまだまだ続くって訳だな」

黒狐「そう言うことですね！」

圭一「みんな！じゃんじゃん送ってきてくれよな！！！」

黒狐「ひぐらしの小説……書き始めようかな？」

圭一「是非！」

黒狐「考えとくわ……」

圭一「おう！」

黒狐「じゃあ、今回はここまでということで！」

このトーキングKKは黒狐と！」

圭一「前原圭一で」

黒狐・圭一「お送りしました!」

黒狐「感想・アドバイスなど待ってます! 誤字・脱字などがあれば報告してくれば嬉しいです! 分かりにくいところがあれば報告してください!」

第五話後編 伝えられる真実！限界の司会者

「では第4問」

前原はおそろおそろの問題が書かれているカードをめくった。

「――っ！」

その問題は雛見沢大災害に関するものではなかった。

そして急いで次の問題カードを見た。

しかし、そこにも雛見沢大災害に関するものではなかった。

前原はすべての問題に目を通した。だが雛見沢大災害に関するものではなかった。

なぜ、なんでないんだ。

「前原君、どうかしたの？」

「……いやー、問題カードの順番が違いましたねー。だめですよ、ちゃんと並べとかなないと。私が困りますからね」

観客席から笑い声が聞こえた。

「では改めて第4問！」

あなたが離婚をした理由は次のうちどれ？

A、夫の浮気 B、妻の浮気 C、お互いの仕事 D、DV」

「……えっ！」

「おい、飯はどうしたんだ？」

スーツ姿の夫が瀬川に言った。夫は仕事の鞆を持っていた。今、帰宅したようだった。

「今、そんな状況じゃないのよっ！」

瀬川はパソコンに向かいっきりだった。

「でも灯はどうするんだ」

「あなたがやってよっ！」

「でもー」

「こっちは忙しいのよっ!」

瀬川は夫に向かって叫んだ。

「……………もう別かれよう」

「さあ、瀬川さん…お答えください!」

「C」

「正解です!」

どうやら前原の調子が戻ったようだった。

「では第5問です!おっ、ラッキー問題ですよ!

今、あなたの子供の瀬川灯ちゃんが欲しがっているものは何?

A、大きな犬のぬいぐるみ B、ボードゲーム C、テレビゲ

ム D、野球道具」

「ママ、これ買って」

灯はチラシを持って見せてきた。

「じゃあ、来月の誕生日に買ってあげる」

「ほんと!やったー」

灯は喜んでリビングを走りまわりはじめた。

そのチラシには大きく最新のテレビゲームが載ってあった。

「Cのテレビゲーム」

「正解です!」

「瀬川さんはこのテレビゲームのこと知ってるんですか?」

「ええ、少なからテレビで見たことがあるわ。リモコンを振ったりして遊ぶゲームでしたっけ？」

「その通りです。ちなみに『みんなでスポーツ』というソフトが人気らしいですよ。キャッチコピーが、家族と一緒に遊ぼう！らしいですよ。ところでそのゲームは買ってあげる予定とかはあるんですか？あ、それともドリームチャンスで手に入れる予定だとか」

「それが一番いいのだけど、今月の誕生日に買ってあげる約束をしたのよ」

「そうですか、では第6問！

最近、瀬川灯ちゃんは泣きました。泣いた理由は何？

A、いじめ B、けが C、一人で家にいること D、テレビ番組」

「ーっ！」

「さあ、瀬川さんお答えください！」

「……」

「どうしました？わからないんですか？そうですね。そんなに家でも話していないんですから」

「……」

「奥義でも使います？」

「いや、いいわ。答えはCよ」

「……正解です！」

「……」

「なんだ、知ってるじゃないですかー」

「……ええ」

「じゃあこの調子で第7問いっちゃいましょう！」

「……」

「第7問

瀬川灯ちゃんがいつもあなたに言っていることは次のうちどれ？

A、夕ご飯はつくっておくから B、今日は帰ってくる？ C、いつも大変だね D、一人でも大丈夫だから」

すると瀬川の目から涙がこぼれ始めた。

「ど、どうしたんですか？ 瀬川さん」

「す、すいません」

そう言っているが目から涙がこぼれている。その無限に出てくる

涙を瀬川はハンカチで拭き取っていた。

「大丈夫ですか？」

「ええ、答えはD」

「……………正解です！ おめでとうございます。一千万円獲得です！」

前原は立ち上がって拍手をした。

「さあ、瀬川さん。あなたはこの一千万円を賭けてドリームチャンスに挑戦することにできますが……どうしますか？」

「……………挑戦するわ」

前原はすぐにステージの前に向かいカメラに指を指しながら叫んだ。

「ドリームチャンス！」

その言葉を言い終ると音楽が鳴り始めた。前原はその音楽に合わせて踊り始めた。

「瀬川さん、もう一度お聞きします。あなたの夢は何ですか？」

「あ、灯のために最新のおもちゃを……………」

瀬川の目はとても赤かった。

「承知いたしました。あなたが見事ドリームチャンスをクリアした暁には瀬川灯ちゃんのために最新のおもちゃなどをプレゼントすることを約束いたしますよう」

「あ、ありがとうございます」

「では問題！」

瀬川灯ちゃんが一番望んでいることは次のうちどれ？

A、最新ゲームを手にかけること B、塾に通うこと C、お母さんと一緒にいること D、ピアノを弾くことにすること

「……………」

「難しいですか？」

「……………」

「あっ、そういえば！実はですね、今日瀬川さんのために来てくれた応援ゲストがいます。特別ですよ！では召喚！」

スモークが勢いよく飛び出し、扉全体を隠した。そしてその中から小さな女の子が一人出てきた。それは瀬川灯ちゃんであった。

瀬川は涙をハンカチで強引に拭き取り、灯を見た。

「ご紹介しましょう。瀬川希さんのお子さんである瀬川灯ちゃんです！」

「灯ちゃん、お母さんに言いたいことがあったら言ってあげて」

前原は灯ちゃんに近寄って、優しい声で灯ちゃんに言った。

灯ちゃんは軽くうなずいた。

「お母さん、頑張ってる。灯は大丈夫だから。寂しくないから」

「灯っ！」

瀬川は灯を強く抱いた。

「ごめんね、いつも一人にして」

「ううん」

灯ちゃんの目からも涙が流れた。

「これからはちゃんと遊んだり、授業参観にいたり、いろんなこととしてあげるから」

「大丈夫だよ、お母さん」

「瀬川さん、灯ちゃんがあなたに見せたチラシです。このゲームのキャッチコピーは何だったか覚えてますか？」

最新ゲーム機の下には大きく『家族と一緒に遊ぼう！』と書かれていた。

「私は、私は気づいてなかった。常に仕事しか見てなかった。近くにこんな大切な……大切な灯がいるのに………答えるわ………答え

は：答えはCよ！！！！」

「・・・・正解です！ドリームチャンス、クリアーです！！！！」

観客席からは拍手が聞こえた。

瀬川と灯ちゃんは抱き合っていたままだ。

「瀬川さん、あなたは今まで灯ちゃんの本当の気持ちに気づけていなかった。あなたにせがんだゲームはあなたと遊ぶつもりで欲しかったんです。あなたは灯ちゃんのことを全く思っていなかった訳ではなかった。思っていたことが食い違っていただけ。気づこうとはしたが気づけなかった。でも今、本当の気持ちを知ることができた。これからもふたりが仲良くできるといいですね。そのために今回のドリームチャンスの商品を少しかえさせていただきます。最新ゲーム機とテーマパーク親子ペア券とホテルのペア宿泊券をプレゼントさせていただきます。ちなみに今週のあなたの仕事であるザ・クイズショウの仕事はすべて我々のディレクターが代わりにやってくれるそうです。是非、二人の愛をもう一度確認してみてください……：なんつってー」

前原はいつものように顔の表情をころっと変えてステージの前へと向かった。

「今回の解答者、瀬川希は見事、夢を実現させることができました。次週、自らの夢に挑むのは果たして……誰なのか？」

そして前原はカメラに指を差した。

「あなたの夢を、叶えます」

観客席からは拍手が鳴り始めた。そして前原はステージから出て行った。

瀬川は放送室に入った。

目の前に現れたのは詩音だった。

「瀬川さん、ここは私に任せてください」

「でも……」

「たまには部下に頼ってくださいよ、だから旅行に行ってきてください。灯ちゃんのためにも」

「じゃあ、お願いするわ」

「ありがとうございます。じゃあ、こちらに用意ができてるので楽しんでてくださいいね」

「ええ、ありがとう」

瀬川は放送室を出て行った。

「園崎さん」

放送室に新堂が入ってきた。

「どうしたの？」

「今日の放送ってこれを狙ってたんですか？ 解答者が来ないのも計画のひとつだったんですか？」

「ええ、じゃあ私は用事があるからこれで」

そう言い残して放送室から出て行った。

「……くっ……あっ……うっ……あああ——」

脳裏に何かが流れ込んできた。

古手梨花が俺に何かを訴えかけている。

園崎魅音、古手梨花、北条沙都子と俺が闇の中で必死に走っていた。

「詩音に伝えという……」

「私が……」

誰かが喋りかけている。

「——早く逃げろっ」

闇の中で叫んでいる俺がいた。

「うわああああああああああああああああ……はあ、はあ、はあ………」

なんなんだっ！ 雛見沢大災害って。雛見沢で何が起こったんだ？
ガチャン——

「——っ！」

詩音が入ってきたところに、前原は詩音に迫った。

「雛見沢大災害って何だよ？ 俺はなんでここにいるんだっ！」

「……ふっ、今の床らは順調に進んでるわ。思い出すのも時間の問題よ」

詩音は部屋から出て行った。

「教えろよ…雛見沢でなにがあったんだよおおおおおおおおおおおお」

その声は建物の中でしか響いていなかった。

そこは会議室だった。

そこでザ・クイズショウの会議を行っていた。

詩音は瀬川不在のため、前で進行役を行っていた。

「来週のザ・クイズショウはこの方法でやるわ！」

詩音はホワイトボードを手で指した。

「えっ」

詩音の横にいる男の人が意見を言ってきた。

「そんな勝手な事していいの？ 瀬川さんなら——」

「大丈夫ですよ。これなら数字は上がります」

「でも——」

「責任は取れるの？」

「それは……」

「じゃあ、決定ね。今日はここまでということでしょう。そうしてザ・クイズショウの会議は幕を閉じた。」

「園崎さんっ」

会議室から少し離れた場所で新堂に呼び止められた。

「どうしたの？」

「これが本当の狙いだったんですね」

「ええ、そうよ」

「このザ・クイズショウをどうしたいんですか？」

「ザ・クイズショウは人の願いを叶えるためにあるの。そうだ、新堂君の願いも叶えてあげようか？」

「園崎さんの願いって？」

「続けていればわかるわ。もうじきね」

そして、詩音はその場を去った。

「ふふっ、待ち遠しかった、これですべてが終わる……! あはははははははははは……!」

その笑い声は廊下に響き渡っていた。

第五話後編 伝えられる真実！限界の司会者（後書き）

黒狐「黒狐と！」

圭一「前原圭一の！」

黒狐・圭一「トーキングKK!!!」

圭一「すっかりおなじみになってしまいましたね」

黒狐「おなじみですね」

圭一「黒狐、一つ聞きたいんですけど…」

黒狐「んっ、どうした？」

圭一「更新がちょうど一週間ちょうど何ですが」

黒狐「いやー……大学が忙しくなってねえー」

圭一「……………」

黒狐「オリジナル小説書いてましたWWWで、でも本当に大学も忙しかつたんですよ」

圭一「まあ、約束通り一週間に一回だからいいか！」

黒狐「ふー」

圭一「過ぎた場合は……………」

黒狐「…さ、さて本題にいきましょうか！」

圭一「逃げたな」

黒狐「今回の話は瀬川希についてでしたー」

圭一「でも今回は最後の方が気になったんですが……………」

黒狐「そうです！そうなんです!!! このストーリーを作るのに大変だったんですよ。そう思わない？圭一！」

圭一「お、おう」

黒狐「さて、今度の話で、詩音の計画が明らかになるのか？そして圭一の運命は？」

圭一「今度の話が山場そうですね！」

黒狐「これからどんどん話が進んでいきますよー。是非お楽しみに……………」

圭一「黒狐、感想が一つきてましたが、どうなった？」

黒狐「あつ、そうでした！前回、ザ・クイズショウに出してほしいキャラクターを募集してましたが、その結果来たのは一件でした」

圭一「ははは…」

黒狐「一件くれた方、ありがとうございました！」

圭一「ありがとな！」

黒狐「咲くsakiくをやってほしいと来ましたが、残念ながら僕は見た事ありません」

圭一「せっかく来たのに……」

黒狐「しかーし、この一週間で咲くsakiくのアニメを見ました！」

圭一「そんなこともやってたんだ」

黒狐「はじめて応募してくれたので、やはり知りませんで終わりたくないじゃないし、そんな事できるような身分じゃありませんしww」

圭一「で、どうでした」

黒狐「面白かったですよ！でもまだ完全な完結はしていないのでむずかしいですね。いいアイデアが浮かんだら書き始めます。今のところは未定です……すいません」

圭一「そうですか……」

黒狐「浮かびそうなのは浮かびそうなんですけどね」

圭一「頑張ってください！」

黒狐「はい！まだまだ募集していますんで気軽に送ってください。

頑張って話を作りますんで！」

圭一「もうすぐ夏休みだから話もはかどるじゃないですか！」

黒狐「あつ、それは無理」

圭一「えっ？」

黒狐「大学のとある組織に参加したので夏休みは厳しいかもしれません、多分いつも通りだと思います」

圭一「大変ですね」

黒狐「将来のためだからしょうがないじゃないですか！大手企業に入るためですから！」

圭一「ガンバっ！」

黒狐「おお！頑張ってこの小説も勉強も頑張りますので応援よろしくお願いします！」

圭一「そういえば、黒狐の友達に「後書き長くねえ？」とか言われたんだってな」

黒狐「僕はこういうようなものもいと思って書いてます。「長い！」とか言うひとは見なかったらいんですよ」

圭一「大変ですね。人の好みはいろいろありますからね」

黒狐「そこが難しいですね。皆さんは面白いと思ってますよね？思ってるよね？」

圭一「脅迫だー」

黒狐「次の話の後書きから新しいコーナーはじめてやろうか？」

圭一「ははは……」

黒狐「さて、今日はこの辺で！」

このトークキングSSは黒狐と！」

圭一「前原圭一で」

黒狐・圭一「お送りしました！」

黒狐「感想・アドバイスなど待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれれば嬉しいです！分かりにくいところがあれば報告してください！後書きでやってほしい事や新しいコーナーを募集しますwww気軽にどうぞっ！それでは、さよならっ！」

第六話前編 司会逆転！？失われた記憶を取り戻せ！！（前書き）

なんとか一週間という期限を守りきりました。

長い事待たせてすいませんでした！

では本編をどうぞ！！！！

第六話前編 司会逆転！？失われた記憶を取り戻せ！！

「もしもし、私です」

詩音が車の後部座席で電話をかけていた。
運転席には葛西がいる。

「もう少しザ・クイズショウを続けさせてください。あと少しなんです。これが私の最後のわがままです」

「うっ、あっ、はぁ…はぁ…」

圭一はベッドの下で苦しんでいた。

雛見沢大災害についてなにも思い出せなかった。

もう少しのところだが何もわからない。

ずっとあがいているしかなかった。

それだけしかできなかった。

ガチャン――

「どう、何か思い出した？」

「…………くっ」

詩音を見ると何か頭が痛くなりだした。

「あっ、あっ…うっ…あああ――」

「……………」

誰かが俺を激しくさすっていた。そして何かを叫んでいた。

でも俺は死んでいるかのようにぐったりしていた。

無反応だった。

それでも俺をさすってきた。
何かを叫びながら…………

「はぁ、はぁ、はぁ……」
圭一の動きが止まった。

「何か思い出したようね。それでどこまで思い出した？」

「…………あ、あなたには関係ない」

「そうですか…………ふふっ、思い出させてあげるわ、圭ちゃんのすべ
てを…………」

「望むところだ」

「ふっ」

詩音は部屋から出て行った。

「久しぶりです、瀬川さん」

放送室に入ってきた瀬川に詩音は話しかけた。

放送室には詩音と瀬川の二人つきりだった。

「今回も視聴率がとれますよ、今までにね」

「…………あなた、私がない間に何をしたの？」

「ふふっ、何もしてませんよ」

「今回は誰なの？」

「今回ですか？今回の解答者は——」

「なっ！」

「決定事項ですからね。もう変えられませんからね」

「それが目的だったの？」

「見ていれば分かりますよ。迷惑をかけるつもりはないですから。
ではお願いしますよ」

瀬川は詩音を見ているしかなかった。

「本番10秒前」

ブザーとともにその声は聞こえてきた。

「あなたがしようとしてる事をみせてもらおうわ」

瀬川はぼそっとつぶやいた。

「5秒前」

スタジオと放送室にそのカウントダウンは響いた。そして辺りが暗くなっていった。

「4、3、2、1」

そしてON ALRと言う文字に赤い灯りが付いた。

そして番組が始まった。

真っ暗の中、ステージの中央の奥に白い灯りが当てられた。そこには前原が立っていた。

「人は誰でも華やかな夢に憧れる。世界中を旅したい者。大きな家に住みたい者。はたまた大金を手にしたい者。全ての夢の終着点。それがこの、ザ・クイズショウ——」

その言葉が終わるとさまざまな色の光がいろんな所に当てられる。観客からは、拍手の音が始めた。前原はステージの前に立っていた。

「さあ、今週もやって参りました、ザ・クイズショウ。司会はわたし、MC・MEBARA。そして今週の解答者はこのか——」
圭一が解答者の名前を呼ぼうとすると、後ろのドアが急にスモークが出た。そしてそのスモークの中から誰かが出てきた。

「なっ！」

出てきた人物は園崎詩音であった。

詩音は前原の横に立って言った。

「皆さんこんばんは、当番組ディレクターの園崎詩音です。今回は特別な思考をこらした番組をお届けしようと思います」

「ちょ、ちょっと待て、待ってください。どういう事ですか？」

「言ったじゃないですか特別な思考をこらした番組をお届けするって！」

「な、なにこれー、ドッキリ？」

「まあ、そう考えてもらってもいいかもしれませんね。今は私とMC・MAEBARAはディレクターと司会者という立場ですが、昔は友達だったんですよ。ねえ、圭ちゃん！」

「え、ええ」

「友達の私はもちろんあなたの事を良く知っています。そこで今回は、MC・MAEBARAさんのことを私を通して皆さんに知ってもらおうという企画です。もちろんクイズを通して……どうでしょう、皆さん！」

観客席からは拍手が鳴り響いた。

「というわけで、今週の司会是我、園崎詩音。そして今週の解答者、MC・MAEBARAこと、前原圭一……！」

「なっ！」

「これが本日のザ・クイズショウです！」

「……でもこれって大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ」

「そうですか」

「じゃあ、ここで前原さんのプロフィール映像を見てみましょう！」

そして画面に前原のプロフィール映像が流された。

『前原圭一。職業、司会者。中学生の頃、雛見沢村に引っ越す。その後、とある事情で記憶障害に陥る。そして、園崎詩音がザ・クイズショウのMCに前原圭一を抜擢。そして記憶障害を抱えたまま黒狐テレビの冠番組、ザ・クイズショウのMCを勤めている』

観客席からはざわついていた。

そしてその中には竜宮レナの姿があった。

やっぱり記憶を失っていたんだ……

私がここに来た理由、それは一つの手紙であった。その手紙の送り主は詩音だった。手紙にはすべての真相が知りたければ来てとだけ書かれていた手紙とザ・クイズショウ観覧席のチケットが封筒に同封されていた。

そして私は真実を知るためにここにきたのだ。

「そ、そうなんですよ、実は私、記憶障害というものにかかってましてね。ほとんど記憶を失っていた状態でこの司会やってたんですよ。逆に凄くありません?」

「ではルールの方は大丈夫ですね?」

「知らないわけないでしょう」

観客席からは笑い声が聞こえてきた。

「でも、今回は特別な試みとして、ルールの方を少し変更させていただきます」

「えっ」

「今から出題される問題はすべてあなたに関するということ。よろしいですね?」

「大丈夫ですよ」

「では早速お訪ねしちゃいましょう。あなたの夢は何ですか?」

「……すべての真実を知る事、私たちに何があったのか、そしてあなたは何がしたいのか……」

「…承知しました。あなたがドリームチャンスをクリックした暁には、あなたの失った記憶を取り戻す事、そして私がやりたい事をあなたにいうという事をお約束しましょう」

「ありがとうございます」

「必然的にです。あなたがドリームチャンスを答える事が出来れば必然的に記憶は戻ってきます」

「そうですか」

「では、始めましょうか?」

「おお、始めちゃうか？」

「それでは、前原圭一が記憶の再生を賭けて、このザ・クイズショウに挑みます。イツツ、ショウタイム」

詩音が両手を高く上に上げた。

放送室の瀬川はそこにあるパソコンをいじり始めた。

「どうしたんですか？」

「少し気になる事があってね」

瀬川が開いたページは雛見沢大災害についてだった。そして、そこには行方不明、前原圭一、そしてその上には行方不明、園崎魅音と書かれていた。

瀬川は驚いていた。

前に見た前原圭一の履歴書には前原智と書かれていたのだ。ばえばらさとししかし、それは詩音が付けた偽名であった。

「じゃあ、あの二人は……」

「違いますよ」

「えっ」

瀬川の考えを否定したのはディレクター席にいる新堂であった。

「園崎詩音は実在しています。園崎魅音の妹です」

「なんであなた知ってるの？」

「僕は雛見沢村の隣の町の興宮に住んでました。一度、興宮のおもちゃ屋で見た事があります。だから彼女は詩音さんだと思います」

「じゃあ、園崎さんが考えている事って……」

瀬川は詩音と圭一が映っているモニターを見た。

第六話前編 司会逆転！？失われた記憶を取り戻せ！！（後書き）

黒狐「黒狐と！」

圭一「前原圭一の！」

黒狐・圭一「トーキングKK！！！」

黒狐「まずは私からいいたいことがあります」

圭一「どうぞ」

黒狐「更新が遅くなってしまっって申し訳がありません。それで言い訳をさせていただきます」

圭一「ははは……」

黒狐「大学が急に忙しくなりました。そして家族が週末に来ました。さらに大学はテスト期間に入ってしまいましたということですよ」

圭一「今回はとりあえずOKとしましょう！」

黒狐「ありがとうございます。今日は急いで書かせていただきました。こんな時間になったのは、レポートの作成、そして散髪に言ってましたwww」

圭一「まあ、更新したからOKですよ！」

黒狐「ありがたき幸せー」

圭一「いつの時代だよ！早く先に進もうぜ！」

黒狐「そうですね。それでは本題に入っていききたいと思います！」

圭一「おー！」

黒狐「今回の話は前編、中編、後編の三つに分けさせてもらいます！とても長いので」

圭一「前編だけでもかなり面白いですよ！まだクイズも発表していないのに」

黒狐「そして急いで書いたので誤字・脱字が頻発している可能性があります。そして修正する場合がありますので気を付けてください」

圭一「ははは……」

黒狐「そして次回も一週間後になるかもしれません」

圭一「何っ！夏休みじゃないのか？」

黒狐「馬鹿野郎！……俺には休みなんてないんだっ！辛いけど将来のためを思えば……ぐすっ」

圭一「泣かないでくれよ！悪かったから」

黒狐「そ、そうか……でも絶対更新するからその所はよろしく！」

圭一「がんばれ……！」

黒狐「それでは黒狐のコーナーに参りましょうか？」

圭一「えっ？」

黒狐「この前の話覚えてませんか？では前の会話を聞いてもらいましょう！」

――――――――――

圭一「そういえば、黒狐の友達に「後書き長くねえ？」とか言われたんだってな」

黒狐「僕はこういうようなものもいと思って書いてます。「長い！」とか言うひとは見なかったらいんですよ」

圭一「大変ですね。人の好みはいろいろありますからね」

黒狐「そこが難しいですね。皆さんは面白いと思ってますよね？思ってるよね？」

圭一「脅迫だー」

黒狐「次の話の後書きから新しいコーナーはじめてやろうか？」

圭一「ははは……」

――――――――――

黒狐「ねえ？」

圭一「ねえ、じゃねーよ！」

黒狐「大丈夫ですよ。ちょっとだけなんで」

圭一「では早めにどうぞ……」

黒狐「黒狐の今週のおすすめ!!!」
ジャジャーン

圭一「初めて効果音がついたwww」

黒狐「このコーナーでは、私のおすすめのアニメや漫画や小説、出来事など皆さんに紹介しようというコーナーです!!!」

圭一「それはいいですねえー。では今週のおすすめは？」

黒狐「早く終わらそうとしやがるwww。まあ、いいです。今回は遅刻した僕が悪いんですから。では黒狐の今週のおすすめは……『イヴの時間』です!」

圭一「それはどんなものなんですか？」

黒狐「『イヴの時間』とはアニメです。映画版もありますし、アニメ版もあります。今日はそのアニメについてレポートを書いたので、皆さんに宣伝しました」

圭一「詳しくはホームページでっ!」

黒狐「ひどっ」

圭一「時間なんですよ!」

黒狐「とても感動するアニメですので、内容はホームページで見てください。とてもハマります!」

圭一「早く! 早く! 黒狐も、もうすぐ用事をしないといけないんだろっ!」

黒狐「そ、そうだった。では、今日はこの辺で!」

このトークキングKKは黒狐と!」

圭一「前原圭一で」

黒狐・圭一「お送りしました!」

黒狐「感想・アドバイスなど待ってます! 誤字・脱字などがあれば報告してくれば嬉しいです。今回は是非お願いします! ご協力お願いします。分かりにくいところがあれば報告してください。気軽にどうぞっ!」

あと、これからも頑張りますので応援よろしくお願いします!!!

ではさようならっ!

第六話中編 司会逆転！？失われた記憶を取り戻せ！！（前書き）

なんとか書く事が出来ました！

お待たせしてしまつてすいません。

では本編をどうぞ！！！！

第六話中編 司会逆転！？失われた記憶を取り戻せ！！

「どういうつもりですか？」

CMが開ける前に司会席にいる詩音に前原は言った。

「真実を教えてあげますよ。あなたのすべてを」

「どんな問題でも答えてみせますよ」

「楽しみにしてるわ」

詩音は笑みを浮かべた。

そしてCMが開けた。

「どうです、解答者席の座り心地は？」

「そっちと全然違いますよ」

「そうですね……では第一問

この中であなたがいた部活メンバーでないのは次のうちどれ？

A、竜宮レナ B、園崎詩音 C、北条沙都子 D、古手梨花」

「B、園崎詩音」

「正解です！残念でしたよ、私が雛見沢村の隣の興宮ってところに住んでいたからね。あなた達が通っていた所の学校と違いましたねー」

「そうですね」

「ではその部活メンバーではどんな事をしていたんですか？」

「少し変わってるんですけどゲームで負けたら罰ゲームって言うのがありますね、その罰ゲームが少し厳しいんですよ。負けたらコスプレさせられたりするんですよ」

「よく圭ちゃんも着てましたねー、スクール水着とかネコ耳とか」

「ははは……」

「では第二問！」

部活メンバーの竜宮レナが起こした雛見沢宮林所立てこもり事件の時、レナが仕掛けた爆弾を解除したのは次の内誰？

A、園崎魅音 B、前原圭一 C、古手梨花 D、北条沙都子

「B、前原圭一」

「正解です！前原さん、もうそこまで思い出しているんですね」

「はい、あなたのおかげでね」

「でも爆弾解除って大変だったでしょ？」

「ええ、間一髪でしたけどね。でもこの事件はレナが悪いんじゃない」

「えっ、どうしてですか？」

「残念ながらテレビなのでいいません」

「そうですか……では第三問！」

6月19日に雛見沢で行われる祭りは次のうちどれ？

A、ねぶた祭 B、綿流し C、灯籠流し D、雪祭り

「B、綿流し」

「正解です！」

「簡単じゃないですかー」

「そうですか？でも今日は皆さんにあなたの事を知ってもらおうということなので、問題はすべてあなたに関する事。あなたが記憶を取り戻していれば簡単ですけどね」

「そうですか」

「綿流しであなたが部活メンバーとしていた事って覚えてますか？」

「ええ、覚えてますよ。綿流し六凶爆闘、いろいろな屋台を回ってたこ焼きの早食いか射撃でどれだけ景品をとれるかしてましたよ」

「楽しそうでしたね。まあ、でも私も私なりに楽しんでいましたけどんね。では第三問！」

綿流しで奉納演舞を踊っていたのは次のうち誰？

A、前原圭一 B、園崎魅音 C、古手梨花 D、園崎詩音
「C、古手梨花」

「正解です！ところで古手梨花について覚えてますか」

「ええ、覚えてますよ」

「彼女って何の生まれ変わりっていわれてたんですした？」

「確か…オヤシロサマの生まれ変わり」

「そう、彼女はオヤシロサマの生まれ変わりで綿流しのメインイベントであった奉納演舞を行いました」

「ああ、綺麗でしたね」

「あつ、そういえば…綿流しの晩に起こる噂って知ってます？」

「うわさ……」

前原はどこかの森の中にいた。そして目の前にはレナがいた。何かおびえている様子に見えた。

「鷹野さんと富竹さん・・・殺されたんだって」

「えっ？」

「綿流しの夜、私たちは鷹野さんと富竹さんにあったよね？あの直後に、2人が襲われたんだって。富竹さんはオヤシロサマの祟りにあつてのどをかきむしって死んだの。そして鷹野さんは岐阜の山奥で焼き殺されてしまったの」

「……ああ、オヤシロサマの祟りだろ？」

「ええ。綿流しの晩に一人消えて、一人が死ぬ……」

「や、やだなー、この番組ってこんなのだっけ？こんなに重くて大丈夫か？」

「大丈夫ですよ。今日はあなたの事を知ってもらうための番組です。そして、あなたの記憶を取り戻すためでもあるんですよ。ところであなたは五年目のオヤシロサマの祟りが起こる前の綿流しの事を覚えてるんですよね？」

「……ああ、その祭りは私の初めての祭りですから」

「そうですね、あなたは五年目に雛見沢に引っ越してきた……なぜこんな田舎に来たんでしょう？」

「……………そ、それはー」

「じゃあ、次に行きましょう。第四問！」

詩音は笑みを浮かべてから、圭一の声を遮った。

「雛見沢で起こった事件は次のうちどれ？」

A、連続爆破事件 B、隕石の墜落 C、大型飛行機の墜落 D、
雛見沢大災害」

「Dの雛見沢大災害」

「正解でーす！ではどのような事が起きたのかわかります？」

「……わかりません」

「おかしーなー」

「何がです？」

「私が教えたんですよ、あなたに」

「えっ！し、詩音が……」

圭一は何も出てこなかった。

またしても頭に頭痛が走った。

そして言葉が微かに聞こえた。

「雛見……………のみ……がし、しん……………しんじやった……………」

圭一はまたしても誰かの声が聞こえた。聞いた事のある声だが思
い出せない。でも肝心な事はわかった。わかってしまった。

「はあ、はあ、はあ」

「はあ……はあ……ああ、ひ……雛見沢の……死……………」

「そうですね、火山性ガスによって村人はほとんど死んでしまいま
したよ。そして、雛見沢はまだ封鎖中。もう完全に雛見沢は死んだ
といっても過言ではない」

「その出来事の秘密をしようと俺の記憶を取り戻そうとしているん
だな？」

「さて、どうでしょうか？では、この問題はどうでしょう？」

「どんな問題でも答えてみせますよ」

「それではここでCMです！」
そして番組はCMに入った。

「圭ちゃん、なぜ綿流しから雛見沢大災害までの間の問題だと思う？」

「俺の知らない記憶、そして詩音の知りたいものがそこにあるから……」

「正解です！ふふっ、この調子で頑張って答えてね……私のために……」

そしてCMが開けた。

「それでは第五問

雛見沢大災害の被害者一覧の中で前原圭一はどのような扱いになっているか？

A、軽傷 B、重傷 C、死亡 D、行方不明」

「……くっ、あっ……うっ……」

ここはどこかの病院であった。

圭一はベッドの上で寝ていた。

そして横には一つの開いているスクラップ帳が置かれていた。そのページには雛見沢大災害の被害者が載っていた。

園崎魅音 行方不明

前原圭一 行方不明

北条沙都子 行方不明

そして他にはクラスメイトや圭一の家族、部活メンバーの家族の名前も載っていた。

そしてその横には『死亡』という文字が刻まれていた。

そして最後に書かれていた一文があった。

古手梨花 死亡……………

「……………くっ、あっ、あっ……うつ……あああ——」
ボタン——

圭一はテーブルに倒れた。

「CMを入れてくださいっ！」
新堂は急いで指示をした。

「新堂っ！止めるなよっ！！大丈夫よね、圭ちゃん？」

詩音はカメラに向かって叫び、圭一の顔をのぞいた。

「はぁ、はぁ、よ……余裕ですよ、こんな問題」

「では前原さん、答えをどうぞっ！」

「でい、Dの……行方不明」

「正解です！」

「はぁ……はぁ……はぁ……」

「そう、あなたは行方不明になっていた。でもあなたはここにいる
なぜだかわかりますか？」

「はぁ……はぁ……わからない」

「では第六問！」

第六話中編 司会逆転!?! 失われた記憶を取り戻せ!! (後書き)

黒狐「黒狐と!」

圭一「前原圭一の!」

黒狐・圭一「トーキングKK!!!」

圭一「またちょうど一週間後ですか」

黒狐「そうですね。理由は前と同じです」

圭一「じゃあ、しょうがないですね」

黒狐「そして皆様に言っておきたい事が今回もあります!」

圭一「そうですね」

黒狐「この『ザ・クイズショウ』ひぐらしのなく頃に」が5000アクセス突破しました!」

パンパカパーンーー

黒狐・圭一「どうもありがとうございます」

黒狐「皆様のお陰でここまで来る事が出来ました!どうかこれからもお願いします!」

圭一「お願いするぜー!!!!」

黒狐「次は目指せ一万アクセスッ!!!!」

圭一「おー!」

黒狐「では本編の解説にいきましょうか?」

圭一「ああ、いこうぜ!」

黒狐「今回の第六話中編なんですが、いつも以上に大変でした」

圭一「例えばどんな所ですか?」

黒狐「それは前にも行ったと思いますが、問題と圭一の過去です。それを考えるのにひぐらしの漫画をひたすら読みあさってましたよ」

圭一「何巻くらい読んだんだ?」

黒狐「確か……半分くらい」

圭一「半分……」

黒狐「そして漫画を読んだ事で僕は大きな過ちに気がついた」

圭一「おお、その過ちは」

黒狐「思っていたストーリーと違った」

圭一「おいっ」

黒狐「何をどう間違っていたのかは言えませんが、凄く大きな過ちでした」

圭一「そうですか」

黒狐「圭一は本編を見て何か感想はある？」

圭一「最後の古手梨花の死にはとてもビックリしたぜ。今まで全く触れられてなかったからな」

黒狐「何かついぽろっと出ちゃいそうなので次のコーナーにいきましよう!!!!」

圭一「お、おー」

黒狐「黒狐の今週のおすすめ!!!!」
ジャジャーン

黒狐「このコーナーでは、私のおすすめのアニメや漫画や小説、出来事など皆さんに紹介しようというコーナーです!!!!」

圭一「さて、今回はどんなものなんですか？」

黒狐「黒狐の今週のおすすめは……『ミスマルカ興国物語』です！」

圭一「今回もあまり聞いた事のない作品ですね」

黒狐「この『ミスマルカ興国物語』は、ラノベです。最近やっと手に入れたので」

圭一「それで内容は？」

黒狐「焦らさなくてもいいじゃないですか。今回は時間だってあるはずだし……」

圭一「いや、ただ気になるだけだぜ」

黒狐「そういうことなら早く説明しましょうか。このラノベに引かれた要素は、初めて見るような心理戦が詰まっているところですよ！そして、このラノベだけではなく、戦闘城塞マストラというラノベもとても面白いんです。それは『ミスマルカ興国物語』と違った面白い心理戦があります。ぜひお勧めします」

圭一「へえー、心理戦ですか？」

黒狐「『ミスマルカ興国物語』の主人公はある意味圭一と似てるかな？違う気もするけど」

圭一「どっちだよっ！」

黒狐「まあ、見ていただければすぐにわかると思います。ハマった理由はヤングエースという月刊漫画に『戦闘城塞マスラヲ』が連載していました。そしてそのストーリーにハマってしまい、先が気になってラノベを全巻購入してしまいました」

圭一「財布の方は……」

黒狐「まだ余裕はあった。しかし、それは『戦闘城塞マスラヲ』の話」

圭一「他の本も買ったんですか」

黒狐「買っちゃいました。そして財布はすっからかん。でも面白いからいいんですけどね」

圭一「面白いんだったら良かったじゃないですか」

黒狐「ああ。では林トモアキさんが書いた『戦闘城塞マスラヲ』『ミスマルカ興国物語』などのラノベ、良ければ読んでみてください。読むと止まりませんよ！」

圭一「そういえば、黒狐」

黒狐「んっ？」

圭一「この『ザ・クイズショウ』ひぐらしのなく頃に」はどんな調子なの」

黒狐「いつも通りということ……」

圭一「いつも通りですか」

黒狐「来週という事で……」

圭一「ははは……」

黒狐「そして最後に皆様に募集しているものを言いたいと思います。

1、『ザ・クイズショウ』ひぐらしのなく頃に』とクロスしたいアニメなど

2、小説とこのラジオ的なものの、感想やアドバイスなど！

!!

3、誤字・脱字報告!

4、後書きでやってほしい事や新しいコーナー

5、お便り募集中ですwww悩み事とかあればどうぞ!

です!

圭一「おいっ!」

黒狐「んっ?」

圭一「何かまたコーナー増やそうとしてね?」

黒狐「ラジオならよくあるじゃないですかー。ふつおた」

圭一「ありますけど……」

黒狐「この後書きはどこまで長くなるのか?ただいまギネス挑戦中です!」

圭一「いい加減にしろっ」

黒狐「うぎゃっ!!!」

圭一「ギネスは嘘ですが、募集は本気のようにです。どうせ来ないと思います……」

黒狐「きたらやるっ!絶対やる!ふつおた」

圭一「募集してるんだからきたらやるに決まってるだろっ!でも来ないだろっ!!!」

黒狐「賭けるかっ?」

圭一「やってやろうじゃないかー!!!」

黒狐「負けたら罰ゲームなっ!」

圭一「ああ、やってやろうじゃないか!こっちは日頃からきたえてるんだよっ!!!」

黒狐「というわけで圭一に罰ゲームを行うために送ってきてください!」

圭一「とてつもない罰ゲームを黒狐に仕掛けてやるぜっ!」

黒狐「では今回はこの辺でっ!」

このトーキングSSは黒狐と!」

圭一「前原圭一で」

黒狐・圭一「お送りしました！」

黒狐「感想・アドバイスなど待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれば嬉しいです！分かりにくいところがあれば報告してください！気軽にどうぞっ！！！」

ではさようならー！！！」

第六話後編 司会逆転！？失われた記憶を取り戻せ！！

「では第六問！」

あなたが記憶を失った場所は次の内どこ？

A、雛見沢営林所 B、車の中 C、病院 D、裏山

「……………くそっ、どこだ……………」

「わかりませんか？では奥義の代わりにヒントをお教えします。あなたはとある場所に倒れていました。その場所は……………裏山の近くに流れている河原の畔です」

「河原の…畔……………」

「はぁ、はぁ、はぁ」

圭一は暗闇の中をがむしゃらに走っていた。その道の左側には道では無く暗くて下が見えない崖があった。隣には圭一と同じく梨花と沙都子が走っていた。ぼやけていてあまり姿は見えなかった。

バンッ——

遠くから銃声が聞こえた。そしてその銃弾はその少年の片足を直撃した。

「くっ！！」

その少年はバランスが保ちきれず、左側の崖へと転落した。闇の中へと…………

「うわあああああああああああ——」

バsshyan——

そして水に大きなものが落ちる音がした。

そう圭一は水の中に落ちたのだ。

「圭ちゃんしっかりしてっ！ねえ、ねえってばっ！！！」

詩音が圭一の体を必死にさすっていた。

そして何か他にも地面全体が揺れていた。

背中にはソファのような感覚。

俺は横を見た。

横には雛見沢から興宮までの道の森の中の背景が窓の向こうに映し出されていた。そしてその背景はどんどん切り替わっていく。

前には一つの席があった。そして右側には葛西さんが運転をしていた。

そう、圭一は車の中にいるのだ。

「――」

俺は何かをつぶやいた。

「圭ちゃん！大丈夫？」

「み、みんなは……」

圭一は意識が曖昧だった。まだ完全に回復していなかった。

そして圭一の顔に一粒の水が落ちてきた。

その涙は詩音のものであった。

「ふええ……ひっく、う、け、圭ちゃん……みんなは、ひ、

ひっく、雛見沢のみんなが……くっ……死んじやったあああ！あああああああああああ

詩音は俺に抱きついてきた。涙を大量に流しながら……

えっ、死んだ？……雛見沢のみんなが死んだ……

そして頭が酷く痛みだした。

「くっ……ああ……くっ、あああああ」

そして頭には痛みとともにみんなとの、雛見沢の思い出がたくさん映し出された。走馬灯のように……

「け、圭ちゃん？どうしたの、ねえ、圭ちゃんっ！！！」

のか？」

「そ、それは……」

「では第七問！」

雛見沢大災害が起こる前の数時間前、あなたがいた場所は次のうちどこ？

A、竜宮家 B、前原家 C、古手梨花の家 D、園崎家」

「あの晩の夜……」

「難しいですよ？では順にあの日の事を思い出していきましょうか。夜までは雛見沢宮林所立てこもり事件が続いた。そしてレナが投降したそのあとみんなは入江診療所へ行き、傷などの手当をしてもらっていた。そして私、詩音がみんなと合流した。そしてみんなの傷の手当が終わった後に私たちは別れた。そしてあなたの身に、雛見沢に異変が起きた」

「別れた後……」

「そう、それからです。あの夜に何が起こったのか？雛見沢宮林所立てこもり事件の後に何があったのか……」

「入江診療所で別れてから………っ！」

「どうかしました？」

「入江診療所から別れたとき……何か不審な人の影を見つけた………」

「影？」

「そう……その影は梨花ちゃんに近づこうとしていた……」

「えっ！」

「それからは………」

「……僕の家に来てほしいのです」

「えっ？」

「どうしたの？」

「り、梨花ちゃんに、呼ばれた……そして……俺は梨花ちゃんの家に行った………答えは……C………」

「正解です！おめでとうございます。一千万円獲得です！」
詩音はカメラを向いて言った。

「さあ、前原さん。あなたはこの一千万円を賭けてドリームチャンスに挑戦することにできますが……どうしますか？」

「…挑戦……します……」

詩音はすぐにステージの前に向かいカメラに指を指しながら叫んだ。

「ドリームチャンス！」

その言葉を言い終ると音楽が鳴り始めた。詩音はその音楽に合わせて踊り始めた。何かを吐き出すかのように……

「前原さん、もう一度お聞きします。あなたの夢は何ですか？」
「……すべての真実を知る事、そして詩音は何がしたいのかを知る事……」

前原は限界までできていた。汗でびっしりだった。

「承知いたしました。あなたが見事ドリームチャンスをクリックした暁には、すべての真実、私がしたい事を教えましょう」

「………」

「前原さん、一つお伺いします。あなたは雛見沢営林所立てこもり事件間まですべて思い出した。そうですね？」

「え、ええ」

「問題っ……！」

古手梨花の家から記憶を失ったところまでの間に起こった事は何

でしょう。

この問題は四択ではなく、正解を明確にお答えください」

「えっ！」

「あなたは入江診療所から出たときに梨花ちゃんに家にくるように言われた。その後はどうなったんでしょう？」

「俺は梨花ちゃんの家に行った……」

「――が命を狙われている事――」

そこには真剣なまなざしを向けた古手梨花が立っていていた姿があった。

「……………」

「何があったんですか……あなたが梨花ちゃんの家に行ってからっ！」

「……誰かの…命が、狙われていた……」

「それは誰なのっ！誰が命を狙われていたのっ！」

詩音は圭一に必死に問いつめていた。けど圭一は答える事は出来なかった。

ザ・クイズショウの放送終了時間は刻々と迫っていた。

「……思い出せない」

「ではあなたは誰かに足を撃たれた。そうですね？」

「…ああ」

「撃ったのは誰ですか？」

「……………」

圭一にはその後の事はさっぱりわからなかった。記憶喪失のきっかけとなったあの夜の事が全く思い出せないのだ。

「で、では話を変えます。こちらの大石蔵人さんはご存知ですよね？」

詩音は圭一の前に大石という人物の写真を置いた。

大石蔵人は刑事だった。「雛見沢連続怪死事件」を追い続ける興宮警察署の刑事であった。

「…ああ」

「あの夜の前に大石さんは必死に捜査を進めていました。そして、大石さんはあの夜、雛見沢に車で向かう姿を見たという人がいました。そして、見た人はとても急いでいるように見えたと言っていました。そのことについて……知っていますか？」

「大石さん……」

「遅いですわね、大石さん。約束の時間はとうに過ぎましたのに」
そこは梨花ちゃんの家だった。部屋には圭一、魅音、梨花、沙都子の姿があった。

「まさか……連中に襲われたとか……？」

俺はおそろおそろその言葉を口に出した。

「大石さんは……俺たちと何かを約束していた」

「ということは誰かの命が狙われているから大石さんと呼んだ。そういう事ですね？」

「そうだと思う。でも大石さんは来なかった」

「えっ！じゃあ大石さんは梨花ちゃん家に行く途中につ！」

「……………」

「こ、答えてよ……答えてよ圭ちゃん……」

詩音は焦っていた。それは放送終了まで10分を切ったからであ

俺は返事をする事が出来なかった。俺は詩音の気持ちに答えてやる事が出来なかったから。

「私ねー」

「うっ！」

俺の頭は急激に痛み始めた。

「あっ……くっ、はぁ」

「圭ちゃんっ、どうしたのっ！」

「あっあああああああああ」

そして俺の脳裏に何かが浮かんだ。

俺が見ている場所はとても暗くて、周りには木がたくさん立っていた。

どうやらここは雛見沢大災害が起こる前の晩の夜にいた裏山だった。

俺の前に立っている人は――だった。

二人がそこに立っていた。他は誰もいなかった。

「――」

――が俺に向かって何かを言っていた。

「はっ！……はぁ、はぁ、はぁ」

「……大丈夫？」

「……あっ、ああ」

俺は手で額を抑えた。手が額についた時、手に何かの水滴が着いた。その水滴は俺のあせだった。

どうやら俺は汗だくになっていたようだ。

そうして俺は何も語らずに車を乗り続けた。

誰かこの事件の真相を知っている方はどうかこの真相を暴いてください。

それだけが私の望みです。

それから詩音は『ザ・クイズショウ』のディレクターを降ろされた。そして黒狐テレビも辞めた。

原因は『ザ・クイズショウ』を私物化したからである。

その通告はあの放送からの翌日に詩音に通告された。

しかし、『ザ・クイズショウ』自体は打ち切りとはならなかった。

『ザ・クイズショウ』は黒狐テレビでも人気番組なので打ち切りにするだけには出来ないらしい。そして、司会は前原圭一。

今まで通りだった。

ただ詩音が責任を取るだけで問題は解決されてしまったのだ。

そして、雛見沢で起こった事はまだ何も解決されないままで終わっていった。

全ての真相は前原圭一の中に隠されたままであった。

第六話後編 司会逆転！？失われた記憶を取り戻せ！！（後書き）

黒狐「黒狐と！」（ぼそっ）

圭一「前原圭一の！」

前原圭一「トーキングKK！！！」

黒狐「ではまた来週」

圭一「おいっ、ちょっとまってよっ！！！！普通に終わらそうとしてんじゃねえー！！！」

黒狐「もうめんどくない」

圭一「おいっ！前までと全く違うじゃねえーか」

黒狐「まあな」

圭一「とりあえず言うべき事を言わないと」

黒狐「えーっと、一週間の長い期間を先延ばしにしてすいませんでした。これからもよろしくお願いします」（棒読み）

圭一「反省のいろが伝わらねえー」

黒狐「やっとの夏休みなんだぞっ！たった5日の休みだったんだ。

家族と過ごして何が悪いっ！！！」

圭一「逆切れしやがったっ！」

黒狐「ちなみに今日、急いで仕上げました」

圭一「今日なのかよっ！」

黒狐「最近は大学から帰ったら眠くなるんだよ。疲れのせいかな？」

圭一「そんなことはどうでもいいので、早く本編のことを話してください」

黒狐「そんなことって」

圭一「これって最終回なんですか？」

黒狐「そう思う？」

圭一「最終回的な感じにも見えるじゃないですか！」

黒狐「いわゆるバットエンドみたいなの？」

圭一「ああ。でもなんか続きそうな感じがあるし」

黒狐「続きますよ。六話じゃ少なすぎるでしょ」

圭一「じゃあ、まだ頑張らないといけませんね」

黒狐「もう過労死しそうだ」

圭一「まだ大丈夫そうですね」

黒狐「では今回はこの辺でっ！」

このトーキングSSは黒狐と！」

圭一「待て黒狐」

黒狐「ぎくっ」

圭一「この前のこと覚えているよな？」

黒狐「なんのことかさっぱりだなー」（棒読み）

圭一「負けたやつは…罰ゲームッ！！！」

黒狐「うぎゃあああ」

圭一「とびきりすごいのを考えてきましたよ」

黒狐「感想は一週間過ぎてから来たんだけどね。これじゃダメ？」

圭一「ダメ」

黒狐「くっ」

圭一「では発表しますっ！！！！黒狐の罰ゲームはっ！！！！」

ドロドロドロロ……ジャン！

圭一「『ひぐらしのなく頃に』を使った小説の連載を命じますっ！

！！」

黒狐「や、休みが……」

圭一「もちろんこの小説と同様に一週間に更新は一回」

黒狐「私はここに宣言しますっ！小説家をやめます」

圭一「おいっ！」

黒狐「冗談ですよ」

圭一「とりあえずお願いしますよ。黒狐さん」

黒狐「まだこのラジオ的なものも続く訳だ」

圭一「ふふーん」

黒狐「今、ストーリーを考えました」

圭一「早いですね」

黒狐「内容は、圭一のいない世界」

圭一「出せよっ！それは予想外だ。そして問題外だ」

黒狐「冗談です」

圭一「一瞬焦ったぜ」

黒狐「ま、詳細はまた後日ということだ」

圭一「楽しみに待ってるぜ」

黒狐「寝ながら考えないとwww」

圭一「とりあえず頑張ってください」

黒狐「はい：では、次のコーナー。黒狐の今週のおすすめ!!!!」
ジャジャーン

黒狐「このコーナーでは、私のおすすめのアニメや漫画や小説、出来事など皆さんに紹介しようというコーナーです!!!!」

圭一「一応それはやるんだ」

黒狐「恒例のコーナーだからな」

圭一「やる気があるのなら別にいいけど」

黒狐「黒狐の今週のおすすめは……『バトルスピリッツ』ですっ！

圭一「今週のおすすめなのか？」

黒狐「そうですっ！この夏休みという期間に友達とやりまくったのが理由の一つです」

圭一「ハマってますね」

黒狐「友達同士でノリで始めたのがキッカケですから。ちなみに七弾から始めました」

圭一「友達同士は楽しいよな」

黒狐「そしてお勧めする理由は……もうすぐアニメ、バトルスピリッツの4期『バトルスピリッツ ヒーローズ 覇王』が開始されるからですっ！ハマるなら今のうちだぞっ！」

圭一「すごい熱さが伝わってくる」

黒狐「やり始めた人や、やっている人がいたらmixiでマイミク登録よろしくっ!!!!」

圭一「こっちにも力をもっと入れて欲しいものですね」

黒狐「：是非この機会に初めよー！」

圭一「逃げたな」

黒狐「では、今日はこの辺で！」

このトーキングKKは黒狐と！」

圭一「前原圭一で」

黒狐・圭一「お送りしました！」

黒狐「感想・アドバイスなど待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれば嬉しいです。今回は是非お願いします！ご協力お願いします。分かりにくいところがあれば報告してください。気軽にどうぞっ！」

ふつおたもまってまーす」

圭一「まだ諦めてないのかよっ！」

黒狐「これからは期限に間に合わせるようにするのでこれからもよろしくお願いします！」

それでは、さようなら！！！」

第七話前編 二つの苦痛。傍観者と最後のカケラ（前書き）

第六話後編の方を修正しました。
最後の男はなかった事にWWW
では本編の方をどうぞっ!!!

第七話前編 二つの苦痛。傍観者と最後のカケラ

終わってしまった。

何も解決できないまま。

圭ちゃんにも迷惑かけて……

ごめん、ごめんね……

思うだけで涙が出てきた。

「どうかしたの？」

高校生くらいの女の子が詩音に話しかけていた。

「何でもないよ。目にゴミが入っただけ。心配しなくても大丈夫だよ」

「それなら良かった」

「今日は仕事に行かないの？いつもだったら仕事しにいく時間じゃない？」

「あれっ、言ってなかったっけ？今日は休みだって」

「そうでした？」

「言ったよ私」

「そうなんだ。じゃあ、行ってくるね」

その女の子は詩音の元を離れた。

詩音は再び泣き続けた。

何も変わらないが、それでも泣き続けた。

誰か助けてよっー

園崎詩音が『ザ・クイズショウ』の私物化した放送から一週間が経った。

「本番10秒前」

ブザーとともにその声は聞こえてきた。

「8、7、6、5秒前」

スタジオと放送室にそのカウントダウンは響いた。

そして辺りが暗くなっていった。

「4、3、2、1」

そしてON ALRと言う文字に赤い灯りが付いた。

そして番組が始まった。

真っ暗の中、ステージの中央の奥に白い灯りが当てられた。そこには前原が立っていた。

「人は誰でも華やかな夢に憧れる。世界中を旅したい者。大きな家に住みたい者。はたまた大金を手にしたい者。全ての夢の終着点。それがこの、ザ・クイズショウ——」

その言葉が終わるとさまざまな色の光がいろんな所に当てられる。観客からは、拍手の音がし始めた。前原はステージの前に立っていた。

「さあ、今週もやって参りました、ザ・クイズショウ。司会はわたくし、MC・MAEBARA。そして今週の解答者はこの方、科学者、神高？」

後ろの扉が開いた。そして白い煙の中から神高？と思われる人物が姿を現した。その日とは茶髪で眼鏡をかけている細身の女性であった。そして観客席から拍手が聞こえてきた。？は軽くお辞儀をして前に進んだ。

そして画面に神高？のプロフィール映像が流された。

『神高？。研究者。東京生まれ。小さい頃に両親を亡くす。今では自分の研究のため、日々努力をしている。そして現在に至る』

「ようこそ、ザ・クイズショウへ」

「お願いします」

「研究者ですか。ということはこの『ザ・クイズショウ』で初めて解答者が研究者と言う訳ですね」

「そうなんですか？」

「そうですよ。あなたが初めてですよ！まあ、何もないんですけどね」

観客席からは笑い声が聞こえた。

「そういえばプロフィールで自分の研究をしてらっしゃると書いていたんですが、どのような事を研究されているんですか？」

「そうですね、今はお答えできないです」

「そうですか。なんか残念だなー。偉大な何かを、この世界に大きく影響を与える何かを調べてるのかとか言ってくれたら面白かったのになー。まあ、しょうがないですね。自分の人生を賭けて研究してるんですから。それではここでルールをおさらいしましょう。このザ・クイズショウは全七問のクイズによって構成されます。クイズに正解するたびに獲得賞金は上がっていき、全七問を突破した時点であなたの獲得金額は一千万。その後、あなたはその一千万を賭けてドリームチャンスに挑戦することができます。そのドリームチャンスに挑戦し、そして見事、クリアすることができます、あなたが手にすることができるのは夢。文字通り、一つだけ夢を実現することができるとは。よろしいですね？」

「ええ」

「それではお伺いしましょう。あなたの夢は何ですか？」

「私が行っている研究のための研究費を希望します」

「承知いたしました。ではあなたがドリームチャンスをクリアした暁には、研究費一億……いや、二億円をプレゼントしますっ！」

「「「おおー」」」

観客席はどっと沸いていた。

「ありがとうございます」

「どうです？ 今回のザ・クイズショウは違うでしょ？」

観客席から大きな拍手が聞こえてきた。

「それでは、神高？ が自らの研究のためにこのザ・クイズショウに挑みます。イツツ、シヨウタイム」

前原が両手を高く上に上げた。そしてふたりは握手を交わした。

今まで通りだった。

何も変わっていないなかった。

一週間前――

園崎詩音が『ザ・クイズショウ』を私物化した放送終了後

圭一はいつもの白い部屋にいた。

「く、くそっ！ 思い出せよっ！ 思い出してくれっ！！！」

圭一は頭を抱えながら自分に訴えかけていた。

「はっ：はぁ、はぁ、はぁ」

圭一の目には涙がこぼれ落ちていた。

白い部屋は圭一だけだった。

詩音は俺を送り届けてから逃げ出すようにこの部屋を出て行った。

それから俺はずっと頭を抱えていた。

全く思い出せなかった。

進展は何もなかった。

俺は無力だった。

「く、くっそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおお」

ただ叫ぶしかなかった。

圭一はそれでも叫んだ。

奇跡を呼ぶかのように……

その声は部屋に響いた。

「それでは第1問！」

世界三大宗教は仏教、イスラム教、もう一つは何？

A、ヒンドウー教 B、マニ教 C、キリスト教 D、ユダヤ教

「C」

「正解です！では第二問」

国風文化の代表的な建築、平等院鳳凰堂は誰によって建てられた？

A、藤原頼通 B、紀貫之 C、藤原清衡 D、足利尊氏

「A」

「正解です！さっすがだなー。やはり研究者は違いますねー」

「そんな事ありませんよ」

「またまたー、そんな事言っちゃってー。ところで神高さんは雛見沢村って知ってます？」

「ええ、よくニュースでやってましたね。雛見沢大災害が起こったんですってっけ？」

「よく知ってますね」

「ニュースを見て気になったから調べたんですよ。私って少し気になった事は調べてしまうんです」

「そういう所が一般人と研究者の違いですかね」

「さあ、どうでしょうね？」

「じゃあ、この問題簡単かな？第三問」

『オヤシロさまの祟り』と呼ばれていた雛見沢連続殺人事件の五年目の被害者は次のうち誰？

A、夜神月 B、涼宮ハルヒ C、乙部彰 D、鷹野三四

「……D」

「正解です！やはり知ってましたか。さすが物知りですねー」

「いえ、そんなことは」

「またまたー、謙遜しちゃってー」

「謙遜なんて」

「それでは第四問――」

俺は無力だった。

「く、くっそおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおお」

圭一は叫んだ。叫ぶしかなかったのだ。

すると圭一の叫びは収まった。

ぴたつと止まってしまった。

そして何かを考えているようになった。

圭一は何かに気づいた。

でもそれがどういう事なのかを理解できなかった。

[illegible]

第七話前編 二つの苦痛。傍観者と最後のカケラ（後書き）

黒狐「黒狐と！」

圭一「前原圭一の！」

黒狐・圭一「トーキングKK!!!」

圭一「また二週間後に会いましたね」

黒狐「……嫌みですか？」

圭一「じゃあ、一週間で仕上げてきてください」

黒狐「くっ」

圭一「あとストーリー変えたらいいじゃないですか」

黒狐「ああ、だってあのままじゃおかしい展開になる事がわかったんですよ。また一から考え直してたんです。最初はどんなものにするかは最終話のときにでも語りますよ」

圭一「少し楽しみかも」

黒狐「さて今週から頑張って書くかー！」

圭一「今回のストーリーの事なんですけど、神高？って誰ですか？」

黒狐「教えませんよ、こんなところで」

圭一「ヒントでもいいから」

黒狐「じゃあ、想像してみろよ。茶髪で眼鏡をかけた細身の女性」

圭一「……」

黒狐「その名前は……」

圭一「名前は……」

黒狐「ただで教えると思いますか？」

圭一「俺の時間返せっ！」

黒狐「なっ！俺の気持ちわからない？休みがない人の気持ち」

圭一「しらねえーよ」

黒狐「しろうぜっ！」

圭一「まあ、頑張ってくださいよ」

黒狐「みんなならこの気持ちを理解してくれるよな？」

圭一「もうこの話はやめましょうよ。読者の皆さんが飽きますって」

黒狐「夜だしね。眠くなるから盛り上がっていいこー!」

圭一「いきなりテンション上げやがった」

黒狐「こうするしかないなーっと思ってつい」

圭一「ついじゃねーよ」

黒狐「今日は私から皆様に質問したい事があります」

圭一「なんですか」

黒狐「それは……」

圭一「それは？」

黒狐「このコーナーの後っ!」

圭一「なんだそりゃー」

黒狐「黒狐の今週のおすすめ!!!!」

ジャジャーン

黒狐「このコーナーでは、私のおすすめのアニメや漫画や小説、出来事など皆さんに紹介しようというコーナーです!!!!」

圭一「今週も続くんですね。何にしようか迷ってるのに」

黒狐「まあ、いいじゃないですか。コーナー持てるなんて幸せですよ!」

圭一「じゃあ、今週もビシッと発表しちゃってください!!!!」

黒狐「黒狐の今週のおすすめは……『水曜どうでしょう』ですつ!!!!」

圭一「水曜……どうでしょう?」

黒狐「これはですね、大泉洋さんがやっているローカル番組なんです。そこらへんのバラエティー番組とはひと味違います。ぜひ見てくれば伝わるんだと思いますが……一様、どんな企画があるのか言わせてもらいます。『サイコロの旅』『72時間!原付東日本縦断ラリー』『クイズに出るどうでしょう』『シェフ大泉 夏野菜スペシャル』などからです。ここでどんなものなのか言うと思える楽しみがなくなってしまうと思うのであえて言いません。

『サイコロの旅』から見る事をお勧めするかな?」

圭一「サイコロの旅ですかー」

黒狐「水曜どうでしょうは今でも再放送として深夜にやっています。BSやCSでもやっています。さらにDVDもあるのでぜひ見てみてはどうでしょう？病み付きになりますよ」

圭一「少し気になりますね」

黒狐「是非見てみてください。大泉洋さんのトークがハンパないので、とてもおすすめです。以上黒狐の今週のおすすめでした！」

圭一「ひとつ気になるんですけど……」

黒狐「何ですか？」

圭一「前に言った新しい『ひぐらしのなく頃に』の小説ってどうなってますか？」

黒狐「それが今回の重大発表の内容です」

圭一「ではどうぞっ」

黒狐「はいっ！私、黒狐は新しい小説の内容を少し決めました」

圭一「その内容とはっ！」

黒狐「まずは一つ目。雛見沢に探偵が来たら……という内容です」

圭一「探偵ですか……それは面白そうですね」

黒狐「そして二つ目！ひぐらしとバトルスピリッツのコラボ小説ですっ！」

圭一「……ネタですか？」

黒狐「ネタですww」

圭一「……」

黒狐「とりあえず今の所は一つ目のやつです。二つ目のやつは今日でた案です」

圭一「重大発表でもないんですね」

黒狐「じゃあ、いいですよ！この本文と後書きに今回の神高？は誰なのかが隠れています。果たして見つけられるかな？」

圭一「本当かっ！……！」

黒狐「ああ、景品はでないけどなww」

圭一「よしっ、探すぞっ！……！」

黒狐「今週も頑張るぞー!!!」

圭一「頑張らましよう!!!!」

黒狐「では、今回はこの辺で！」

このトーキングKKは黒狐と！」

圭一「前原圭一で」

黒狐・圭一「お送りしました！」

黒狐「感想・アドバイスなど待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれば嬉しいです。今回は是非お願いします！ご協力お願いします。分かりにくいところがあれば報告してください。気軽にどうぞっ！」

ふつおたもまってまーすWWW」

第七話後編 二つの苦痛。傍観者と最後のカケラ（前書き）

本編を始める前に皆さんへ言いたい事があります。

前回の後書きに前の本文と後書きに今回の神高？は誰なのかが隠れているといいました。

皆さんはわかりましたか？神高？の正体……そして、その正体の名前がどこに隠されているか……

今、この場を借りてこの事を言っているのは、今回の本文を読むと神高？の正体が多分分かってしまうからです。

なので今、言わせてもらいました。

気になる方は前の話に戻って考えてみてください。

難しいので少しヒントを出させてもらいます。

ヒントは、後書きに書いてあります。

これでだいぶ範囲が絞られたと思います。

よく頭を使ってみてください。

答えは今回と次回の間くらいに投稿したいと思います。

では、本編の方をお楽しみください。

以上、黒狐でした。

第七話後編 二つの苦痛。傍觀者と最後のカケラ

「もう、もう少しだ。あと少し。思い出せ圭一っ！あいつを救わないといけないんだっ！！だから……思い出せえええええええええええええええええええええええ」

しかし、何も返ってこなかった。

主：

沈黙の中で、扉の方から圭一を呼ぶ声が聞こえた。

圭一は、ぱつと振り返った。

そこには巫女服を着た少女が立っていた。

その少女には一つ不思議なものがあつた。それは頭からは角が生えていた。

「き、君は……？」

圭一は警戒しながら口を開けた。

「僕は羽入ともうしますのです」

「お、オヤシロ、さま……」

圭一はそのオヤシロさまと言っている少女をじっと見た。

「.....くっ.....あつ.....あつ.....ああああああ

あああああ——」

いきなり圭一は頭を抱えた。

「ど、どうしたのですかっ!？」

少女は焦るそぶりを見せているが、どうする事も出来ずにただ見ているだけであつた。

その時、圭一の頭の中に何か映し出された。

そこは梨花ちゃんの家だった。

「ボクが命を狙われている事、そして……」

そこには真剣なまなざしを向けた古手梨花が立っていていた姿があった。

そう、これは前に見たものだ。でも今回ははっきりと聞こえた。しかし、そこには変な違和感があった。

他の場面でもそんな事はあった。

俺たちが必死に逃げている時にも同じような違和感があった。でも俺はその違和感が何かとはっきりとわかっていなかったから、不安を与えるだけだと思ったからみんなにも言わなかった。

「……お前、確かあの晩……いたよな」

「えっ！そ、そんな……見えるはず無いですよっ」

「ああ、確かに見えない。でもそんな気がした。いる気配がした。そんな違和感を俺は感じていたんだ」

「そんなわけなのですよっ」

「どうしてありえないと言えるんだっ！信じれば奇跡を起こせる！前に進もうと思えば何かが見える！違うかっ！！！」

「……僕は信じられないですよ」

「あのとき、俺たちが戦っていた時、羽入、お前は勝つ事、運命に打ち勝つ事を信じてたか？」

「……僕が信じて何が変わったのでしょうか？僕は何も出来ない無力な存在なのです。そんな僕が信じるだけで何かが変わったのでしょうか？奇跡は起こせたのでしょうか？」

「ああ、起こせたな」

「っ！」

「触れたり喋ったりできなくても信じる事は出来る。お前に信じる

気持ちがあれば奇跡は起こったんだ」

「そ、そんなっ、僕のせいだと言うのですか！？僕は……梨花達の仲間じゃないのですよっ！」

「いや、ずつといっしょにいたんだったら俺たちは仲間だ」

「僕が……僕を見たみんなはバケモノだと言います」

羽入は自分の頭についている角をさわった。

「僕は二度とバケモノと言われたくないのですっ！！！」

「そんなこと言うもんかっ！！！！仲間というのは見た目で決まるものじゃないっ！角なんて関係ない。仲間というのは心で決まる」

「っ！」

羽入は目から涙がこぼれ出た。

「こんなこと……こんなこと言われたのは初めてなのですよ」

「奇跡とは起こるものじゃない。起こすものだ。そして、信じる力が強ければ強いほど奇跡を起こせる。奇跡とはそんなものだ。そして、一つだけ言うておく。お前は何も出来ないやつじゃない。そして非力でもない」

「えっ」

「なぜならこうやって俺の前に現れたからだ。お前は見たことを伝える事が出来る。だから……だから俺に教えてくれっ！あの夜に何があったのかっ」

羽入は涙を拭き取り、圭一を見た。

「わかりましたのです」

詩音が扉を勢いよく開けて、部屋に入ってきた。

横には葛西さんもいた。

「圭ちゃんっ！本当なの、すべてを思い出したって！」

「ああ、思い出せた」

「じゃあ、答えてっ！あのときに言えなかった答えをつ！！！」
圭一は笑みを浮かべた。

「それでは第四問です！

あなたの本当の名前は次の内どれ？

A、園崎詩音 B、竜宮礼奈 C、前原圭一 D、―――」

「なっ！！！」

圭一は笑みを浮かべた。

「な、何を言ってるのかしら」

「私は…あなたのすべてを知っています」

「……」

第七話後編 二つの苦痛。傍観者と最後のカケラ（後書き）

黒狐「黒狐と！」

圭一「前原圭一の！」

黒狐・圭一「トーキングKK!!!」

圭一「前書きなんですか」

黒狐「少し暇を持て余したクイズですよ」

圭一「暇があるなら書けよっ」

黒狐「いやー、ひとつ思いついちゃってwww」

圭一「まあいいです」

黒狐「じゃあ、圭一はわかった？僕の出したクイズ」

圭一「わからねーよ。後書きってことはその事を考えながら発言してた訳だな」

黒狐「ふっ」

圭一「笑ってんじゃねえー」

黒狐「そういう事です」

圭一「本文かとずっと思ってたけど何度も見返したのによー。あと今回の本文に名前書いてないし」

黒狐「でも大体わかってきたんじゃない？」

圭一「まあな」

黒狐「じゃあ、がんばっ！」

圭一「がんばっじゃねー」

黒狐「裏話なんですけど、羽入が出る前に誰かを出す予定でした。そして羽入は白い部屋の中でザ・クイズショウをするつもりでした」

圭一「それがごっちゃになったんですね」

黒狐「……はい」

圭一「じゃあいつものコーナーにつ！」

黒狐「逃げたな……」

黒狐「黒狐の今週のおすすめ!!!」

ジャジャーン

黒狐「このコーナーでは、私のおすすめのアニメや漫画や小説、出来事などなど皆さんに紹介しようというコーナーです！……！」

圭一「では今回はっ！」

黒狐「なんかテンション高いな！」

圭一「まあ、何でもいいじゃん」

黒狐「じゃあ、行きますっ！」

圭一「おうっ！」

黒狐「黒狐の今週のおすすめは……『福山雅治さんの新たなCD「家族になろうよ／f i g h t i n g p o s e」です」

圭一「は、はじめてのCD」

黒狐「発売日は8月31日なのですが、最近やけに出かけるときにはその曲を聴いてしまうからです。やはり福山さんは神ですっ！」

圭一「神ですか……」

黒狐「福山雅治さんはスタイルもいいし、かっこいいし、歌声が神なのがいいです。歌で僕はハマりました！ライブも毎年行ってます」

圭一「めっちゃハマってますね」

黒狐「これは余談なんですけど、カラオケで歌うとうまいっ！とかじゃなくて福山やーって言われますwww」

圭一「いいじゃないですか」

黒狐「ほとんどの曲で言われるので、複雑な気分です。でも若干嬉しいんですけどね。歌ってみた動画でもアップしてみようかな？」

圭一「いいじゃないですかっ！」

黒狐「やる勇気がないwww」

圭一「おいっ！」

黒狐「まだ何かやってみたい黒狐でした！」

圭一「前に言ってた『水曜どうでしょう』なんですけど、面白いですね」

黒狐「でしょっ！あれがいちばんのバラエティー番組じゃないかなーって」

圭一「もう時間ですよっ！」

黒狐「そうですね。えー、クイズの件については今週中にアップします。チャレンジしてみてくださいね」

圭一「よしっ、解いてやるぜっ！」

黒狐「では、今回はこの辺で！」

このトーキングKKは黒狐と！」

圭一「前原圭一で」

黒狐・圭一「「お送りしました！」」

黒狐「感想・アドバイスなど待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれば嬉しいです。今回は是非お願いします！ご協力お願いします。分かりにくいところがあれば報告してください。気軽にどうぞっ！」

第八話前編 事件の真相が明らかに!! 行き過ぎた思いと涙

「それでは第四問です!

あなたの本当の名前は次の内どれ?

A、園崎詩音 B、竜宮礼奈 C、前原圭一 D、田無美代子

「なっ!!!!」

圭一は笑みを浮かべた。

「な、何を言ってるのかしら」

「ごまかしたって駄目ですよ。私は…あなたのすべてを知っています」

「……」

そう、オヤシロさまの祟り、雛見沢大災害を起こした犯人……鷹野三四。

しかし、それは偽名である。

本名は……田無美代子。

「くすくすくす……答えはえー」

「あっ、そうだ! いい忘れてましたが……あなたが間違えた場合、罰ゲームが用意してありますんで」

「そ、そんなこと聞いてないわよ」

「そうですね、今言ったことですからね」

「……」

「ちなみに罰ゲームっていうのは時間を持たすためのものなんですけどね。例えば……あなたの人生のこと……とか」

前原は笑みを浮かべた。

「ふざけー」

「ふざけてませんよ。でも、もっとふざけたことをした人がいるんじゃないのかなー」

バンッー

「帰りますとか言わないでくださいよ。あなたは研究を完成を完成させたい、しなければいけない……そうですね？ だったら答えましょうよ。夢を叶えるために。どうせばれるんですから」

「……D」

「…ふっ、正解ですっ！！！」

「……」

「では、本当の田無美代子さんのプロフィール映像をどうぞっ！」
そして、モニターに田無美代子のプロフィール映像が流された。

『田無美代子。研究者。幼い頃に両親を交通事故で亡くす。それから一時は孤児院に引き取られたが、田無美代子の父の恩師である高野一二三に引き取られる。そして、東応大学に大学入試をトップで入学。岐阜県の雛見沢にある入江診療所に勤務。そして、現在に至る』

「いやー、東応大学ですか。しかもトップですかー。それはますます研究内容が気になりますねー」

田無美代子は戸惑っていた。

「では第五問！」

まずはこちらの写真をご覧ください」

モニターには一人の老人の顔が映し出された。

「っ！」

「こちらの方、ご存知ですよね？」

「…ええ」

「こちらは田無さんを孤児院から引き取った高野一二三さんです。田無さんと一緒に研究者です。」

では、問題です。

その高野一二三さんの研究内容は次の内どれ？

A、ヤコブ病の解明 B、慢性病の解明 C、パーキンソン病の解明 D、雛見沢症候群の解明」

「ふっ、くすくすくす……そういうことね。すべてを思い出した訳

ね」

「では答えをどうぞっ！」

「D」

「正解ですっ!!!」

「あなたもこの研究をやってるんですか？」

「さあ、どうでしょうね。くすくすくす……」

「雛見沢症候群ってどんなもの何ですか？」

「さあ？くすくすくす……」

「いつもの調子取り戻したようですね……鷹野さん」

「あの夜以来ね」

「そうですね」

二人は睨み合っていた。

そしてCMに入った。

「よかったわね、生きて。くすくすくす……」

「よかったですよ、そのおかげでここまで来れたんですから」

「さあ、私をどうするつもりかしら？」

「それはお楽しみです」

「それは楽しみだわ。くすくすくす……」

そして、CMが明けた。

「田無さん、あなた雛見沢で鷹野三四と名乗ってましたよね？」

「……」

「それは、高野一二三さんと何か関係があるんですか？一二三の研究を受けついたので三四……くっだらねえー」

「まえー」

「では第六問！」

あなたが預けられた孤児院でしたことは次の内どれ？

A、寄生虫の研究 B、人体解剖 C、脱走 D、人殺し」

「C」

「……正解ですっ！」

「……簡単ね」

「そうですか、でもここからは簡単に答えられるでしょうか」

「くすくすくす、いけるわよ」

「それより、孤児院を脱走したんですね」

「ええ、私たちが預けられた施設は酷かったわ。孤児院というより収容所ですもの。職員達は国の補助金目的のために孤児を閉じ込めているだけ。殴られなかったことが一つの喜びを感じてしまうような所よ。そして、罰がありますのよ。『棺桶の刑』とか。昔に脱走した子は、『水を飲めないアヒルの刑』『潰れた芋虫の刑』とか罰を与えられたらしいですよとても酷い施設だから仲間同士で脱走したんですよ。何人かはその人に殺されたのですけどね……」

「田無さんもそのような刑をさせられたんですか？」

「いえ、運がよかっただけよ。脱走した時私は捕まったの。そして罰が与えられる前に祖父は助けに来てくれたの」

「とてもやさしい人だったんですね」

「ええ、電話で助けてと言っただけなのに、私の施設を探し出して助けてくれた恩人ですもの」

「だから、今、雛見沢症候群の研究をしているんですか」

「……祖父の研究は素晴らしいものですからね」

「しかし、その研究に必要なものは自分で壊してしまいましたからね。残念ですね。あんなことがなかったら今、もう研究は終わっていたかもしれませんのに」

「……」

「では第七問！」

雛見沢大災害の指揮をとっていた人物は次の内誰？

A、入江京介 B、富竹ジロウ C、MC・MAEBARA D、田無美代子

「簡単でしょ？ 答えてくださいよ、田無さん。それとも鷹野さんと呼んだ方がいいですか？ あれっ？ 覚えてませんか。鷹野三四ですよ。あなたが雛見沢で使っていた名前ですよ」

「……D」

「小さくて聞こえません」

前原は笑みを浮かべた。

「D」

「…Dって何でした？」

「Dの田無美代子」

「正解ですっ！！！！おめでとうございます。一千万円獲得です！」
前原は立ち上がって拍手をした。

「いやー、ここまで来ちゃいましたね」

「ふふっ」

「そうですか。あなたがこの一連の犯人でしたか」

「いえ、勘で答えただけよ。問題は果たして合ってるのかしら」

「間違いなく合ってますよ」

「まあ、私を撃った人ですからね。忘れませんよ」

「くすくすくす……」

「そういえば、この番組の前のディレクターって誰だか知ってます？」

「知らないわね」

「園崎詩音ですよ。知ってるでしょ？」

「知ってるわよ。魅音ちゃんの妹でしょ」

「ええ」

「詩音はこの番組の設立者なんですよ。知ってました？そしてこの番組を作った理由、それは……あなたに復讐するためにね」

「夢が叶ってよかったわね。くすくすくす……」

「実はねえ、今、ここにいますよ」

「久しぶりですね、鷹野さん」

スタジオの奥の扉から一人の女性が歩いてきた。

その女性は園崎詩音。

「ふふっ、あなたが犯人だとやっとわかった」

「あら、ひさしぶりね、詩音ちゃん。くすくすくす……」

「反省はしてないのね。組織に裏切られて孤独になっても」

「ええ、してないわよ。くすくすくす……こんなことがあなたの夢なの？」

「ええ」

「あはははははははは、甘いわね、こんなことで私が反省するとも思っただの？　こんなー」

「さあ、田無さん。あなたはこの一千万円を賭けてドリームチャンスに挑戦することにできますが……どうしますか？」

圭一は田無の言葉を遮った。

「やるに決まってるでしょ。くすくすくす……」

圭一と詩音は笑みを浮かべた。

「田無さん、自分がしたこと後悔はないんですね？」

圭一は田無に一つの質問をした。

「ええ」

圭一と詩音は、大きく息を吸い込んだ。

そして田無美代子を睨んで叫んだ。

「ドリームチャンス！」

その言葉を言い終ると音楽が鳴り始めた。

三人はただ睨み合っているだけであった。

第八話前編 事件の真相が明らかに!!! 行き過ぎた思いと涙（後書き）

黒狐「黒狐と!」

圭一「前原圭一の!」

黒狐・圭一「トーキングKK!!!!」

黒狐「神高?は田無美代子でした!!!! 圭一はわかったか?」

圭一「まあ、だいたいはさっしがついてたんだけどな」

黒狐「あの後書きのどこに隠れてたかわかった」

圭一「それはわからなかったな」

黒狐「じゃあ、そのクイズの解答編はまた今度っ!!!!」

圭一「今やれよっ!」

黒狐「こんなところでやることじゃないよ」

圭一「出題したのはここだろうがっ!!!!」

黒狐「出題は思いつきだからだっ!!!!」

圭一「威張るんじゃないー!!!!」

黒狐「・・・おみまいするぞっ!」

圭一「いきなりなんだよっ」

黒狐「久しぶりに日曜日以外に更新してみました」

圭一「それは、珍しいですね」

黒狐「だって台風だもん。暴風警報だもん」

圭一「暇ができたよ」

黒狐「とりあえず雰囲気を出した解答編をまたお送りします!」

圭一「何人くらいわかってるんでしょうか」

黒狐「じゃあ、ヒントをまた上げますよ」

圭一「あっ、それはなんですか?」

黒狐「僕は全てを知っています。でも圭一は知りません。そんな二人の会話に隠れているのがんばっ!!!!」

圭一「また訳が分からん」

黒狐「最近、上のやつがうるさいんだけど・・・どうしたらいいと

思う？」

圭一「一人暮らしだったよな？」

黒狐「下宿だからね。大変なんだよ。一回5月くらいに国家権力つかったけどねwww」

圭一「その方がいいと思いますよ。穏便で」

黒狐「使っちゃおうかな？」

圭一「俺はそういう経験がないからな」

黒狐「か、金持ちがっ!!!」

圭一「いきなりキレるなよっ」

黒狐「よし通報だ!おい、警察つれてこいっ!!!」

圭一「落ち着けて」

黒狐「皆さんも夜に大ボリウムでニコニコ見るなよっ!バット持って襲撃してやるからな」

圭一「怒りが満ち満ちてますね」

黒狐「このラジオは30分かかりますからね。毎回めんどいwww」

圭一「めんどいとか言うなっ!あとどんどん関係なくなってきたんだけど」

黒狐「じゃあ、初心に戻ってこの話の裏話でもしますか？」

圭一「おっ、いいですね」

黒狐「最近是一日で作ることが多いのでいつ修正版的なものを作るのかハラハラドキドキですよ」

圭一「そこは頑張って!」

黒狐「あとこの小説ももう少しになってましたね」

圭一「早いですね」

黒狐「皆さんのおかげであと50アクセスで9000アクセス突破します!」

圭一「おおっ」

黒狐「めぎせっ!一万アクセス!!!」

圭一「これからも応援よろしくなっ!」

黒狐「ページを開いたり、閉じたりしろよっ!」

圭一「おいっ」

黒狐「今回、日曜日に更新できなかったのには理由があります。それは実家に帰ってからです」

圭一「三連休ですからね。有意義に過ごしてたんだ。良かったですね」

黒狐「まあな、そして、家に帰る電車の中で新たなひぐらしの小説を書いてみました。また投稿しておきます」

圭一「おっ」

黒狐「前に言ってたストーリーです。探偵が雛見沢にくるというものです」

圭一「タイトルとか決まってるんですか？」

黒狐「ああ、タイトルは・・・」

ドロロロロロロ……ジャン！

黒狐「『(仮) ひぐらしのなく頃に 闇灯し』ですっ！」

圭一「少しくらそうですね」

黒狐「さあ、それはどうでしょうね。今回はそんなにくらくらないと思いますよ。鬼隠しよりは暗くないかな？」

圭一「まあ、楽しみにしてますよ」

黒狐「もう30分立っちゃったWWW」

圭一「今回は長いかな・・・」

黒狐「皆さん、ツイッターとかのフォローをお願いします。それだけが私の望みですWWW」

圭一「改造するんじゃないっ！」

黒狐「とにかくフォローお願いします。今の所6人ですWWW」

圭一「お、おー」

黒狐「・・・泣くぞ」

圭一「おいっ」

黒狐「今年にホームページでも設立したいな」

圭一「がんばっ」

黒狐「よしっ、じゃあ次のコーナー。黒狐の今週のおすすめ……！」

ジャジャーン

黒狐「このコーナーでは、私のおすすめのアニメや漫画や小説、出来事など皆さんに紹介しようというコーナーです！！！」

圭一「では今回は、最近このコーナーで紹介するものに迷ってるのか？」

黒狐「前まではね。じゃあ行きますよ！黒狐の今週のおすすめは：『ヴァンガード』です」

圭一「新たなTCGはまっちゃったよ」

黒狐「カードゲームはいいよ。金にかかるけど楽しいもん。カードショップに大会とか行くと知らない人とも仲良くなれるし。圭一で言う興宮に部活をしにくみたいな感じかな？」

圭一「それはおもしろいんだな」

黒狐「ヴァンガードは運ゲーという要素もおもしろい。ヴァイスシユバルツとカオスを足して二で割ったような感じかな？バトルスピリッツは結構独特で今までに無いような感じだから面白いな。ディエルマスターズを面白くしたようなWWW」

圭一「ついていけないんですけど」

黒狐「しらねーよ」

カチッ

圭一「おい、警察呼んでこいよ」

黒狐「お前が呼んでどうするんだよ」

圭一「黒狐の家につれてきてやるよ」

黒狐「つれてきてどうするんだよっ！」

圭一「まあ、そんなことはここまでにしましょう」

黒狐「最近親がカメラ買ったんですよ。だから友達と対戦動画でも作ろうかと計画してます。時間がない黒狐です！」

圭一「さて、黒狐はどこにいくのか」

黒狐「いいですね！ビックになりたいですね」

圭一「必要なのは時間ですねWWW」

黒狐「よしっこれからもがんばるぞーっ！では、今日はこの辺で！

このトーキングKKは黒狐と！」

圭一「前原圭一で」

黒狐・圭一「お送りしました！」

黒狐「感想・アドバイスなど待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれば嬉しいです。今回は是非お願いします！ご協力お願いします。分かりにくいところがあれば報告してください。気軽にどうぞっ！ツイッターの方もよろしくお願いします」

黒狐「さて、警察呼んで寝るかwww」

圭一「さようならー」

黒狐「さようならー」

黒狐からの挑戦状〜解答編〜（前書き）

解答編が遅くなってしまうかもしれません。

この内容は『第七話前編 二つの苦痛。傍観者と最後のカケラ』の後書きで出したクイズの解答編です。

そして、いつもと違う黒狐をお楽しみください W W W

黒狐からの挑戦状／解答編／

この小説をご覧の皆様、私が出題したクイズは解けたでしょうか？もし、このクイズのことがわからない場合は『第七話前編 二つの苦痛。傍観者と最後のカケラ』の後書きを見直して欲しい。

『神高？』は誰なのかは小説に書いてあるように、『鷹野三四』だ。しかし、彼女の本当の名前は『田無美代子』だ。

『神高？』の正体をわかっていた人はたくさんいると思う。

しかし、本題は『田無美代子』は『第七話前編 二つの苦痛。傍観者と最後のカケラ』のどこに隠れていたのかだ。

これを見ているあなたは解けただろうか？

もし、ノーヒントで解いた人がいるのならその人物は相当頭がキレた人物であろう。将来、大物になるかもしれない人物かもしれない。褒めてやる。

それではどこに隠れているかわからなかった皆様にひとつひとつ解説してやろう。

まず『第七話後編 二つの苦痛。傍観者と最後のカケラ』で与えたヒントを見直していこう。

後書きに答えが書かれている。

このヒントはどこに隠れているかの範囲を指定したい過ぎない。実はこんなものはヒントでもなんでもない。解き方がわからなければ、価値のないものへと成り下がってしまう。

しかし、本当のヒントは別に書いていた。

あなたはお気づきだろうか。

それではヒントの文章をもういちど見てもらいたい。

難しいので少しヒントを出させてもらいます。

ヒントは、後書きに書いてあります。

これでだいぶ範囲が絞られたと思います。

よく頭を使ってみてください。

答えは今回と次回の間くらいに投稿したいと思います。

では、本編の方をお楽しみください。

以上、黒狐でした。

後書きに書かれているという文章意外にも、もう一つヒントが隠されているのはご存知であろうか？

それは・・・・・・・・

よく頭を使ってみてください。

そう、本当のヒントはこの文章だった。

頭を使えと言ったのはよく考えろという意味ではない。

『文字』の頭を使えという事だ。

なに？

ずるいって？

ふっ、誰もヒントは一つとは言っていない。

一つだと勘違いするのがいけないんだ。

このヒントでわかった人がいればずいぶん頭がキレる人物であろう。

では、肝心の隠されている場所に入りたいと思う。

最後に、『第八話前編 事件の真相が明らかに！！行き過ぎた思いと涙』で与えたヒントもひとつの鍵となる。

私が言った一言を思い出して欲しい。

黒狐「僕は全てを知っています。でも圭一は知りません。そんな二人の会話に隠れているのがんばっ！！！」

このように、この問題を解く鍵は、私、黒狐が出題しているということだ。

圭一とのやりとりの私しか知らないということだ。
だから圭一の言ったことには、答えが隠されていないということだ。

すべてのヒントをもう一度確認してみよう。

- ・ 後書きに答えが書かれている。
- ・ 『文字』の頭を使う
- ・ 黒狐の言ったことだけに注目。

以上のことを注意して『第七話前編 二つの苦痛。傍観者と最後のカケラ』の後書きを探して欲しい。

後書きの一部を今からご覧いただこう。
自分で見つけたい場合は戻って確認していただいても面白いと思う。どうしても無理ならこの先を読んでいただきたい。

圭一「今回のストーリーの事なんですけど、神高？って誰ですか？」

黒狐「教えませんよ、こんなところで」

圭一「ヒントでもいいから」

黒狐「じゃあ、想像してみろよ。茶髪で眼鏡をかけた細身の女性」

圭一「……」

黒狐「その名前は……」

圭一「名前は……」

黒狐「ただで教えると思いますか？」

圭一「俺の時間返せっ！」

黒狐「なっ！俺の気持ちわからない？休みがない人の気持ち」

圭一「しらねえーよ」

黒狐「しろうぜっ！」

圭一「まあ、頑張ってくださいよ」

黒狐「みんなならこの気持ちを理解してくれるよな？」

圭一「もうこの話はやめましょうよ。読者の皆さんが飽きますって」

黒狐「夜だしね。眠くなるから盛り上がっていきー！」

圭一「いきなりテンション上げやがった」

黒狐「こうするしかないなーっと思ってつい」

圭一「ついじゃねーよ」

ヒントの一つ目である、黒狐の言ったことだけに注目して欲しい。
なので、私の会話を注目して欲しい。

黒狐「教えませんよ、こんなところで」

黒狐「じゃあ、想像してみろよ。茶髪で眼鏡をかけた細身の女性」

黒狐「その名前は……」

黒狐「ただで教えると思いますか？」

黒狐「なっ！俺の気持ちわからない？休みがない人の気持ち」

黒狐「しろうぜっ！」

黒狐「みんなならこの気持ちを理解してくれるよな？」

黒狐「夜だしね。眠くなるから盛り上がっていきー！」

黒狐「こうするしかないなーっと思ってつい」

お分かりいただけただろうか？

ヒントの二つ目である、『文字』の頭を使うこと。

なので私の言った言葉の頭を並べてみようと思う。

お　　じ　　そ　　た　　な　　し　　み　　夜↓よ
こ

もう、お分かりであろう。

『た』から下の文字を順に読んでもらいたい。

そう、そこに『田無美代子』は隠れていたのだ。

また、黒狐である私はクイズをだそうと思う。

今回正解できなかった人は次回リベンジしてもらいたい。

これから応援の方をよろしく頼む。

黒狐からの挑戦状／解答編／（後書き）

黒狐「黒狐と！」

圭一「前原圭一の！」

黒狐・圭一「トーキングKK!!!」

黒狐「どうもっ！いつもの黒狐です」

圭一「今回は確かにいつもと違ったな」

黒狐「こういう一面もあってもいいだろ？」

圭一「まあ、それも面白いけどな」

黒狐「今回ののはあくまでも俺が始めた遊びの企画っ!!!なのでいつものコーナーなどは省きますっ！前やったばっかだし」

圭一「はじめに戻った訳だ」

黒狐「今回だけな。それより、圭一はクイズの答えは分かったのか？」

圭一「わかるかーっ！」

黒狐「よしっ！」

圭一「『よしっ』じゃねー！俺は頭を使うまではわかった」

黒狐「おー」

圭一「でも文章を頭だけ読んでも『鷹野三四』『田無美代子』は無かった」

黒狐「そうでしょ。圭一が喋ってたらおかしいもん」

圭一「そうだけど」

黒狐「この後書きだからできる問題だっ!!!黒狐マジックっ!!!」

圭一「適当に作りやがったな」

黒狐「元マジシャンになりたかったやつだっ！」

圭一「だからなんだよっ！」

黒狐「次はどんなやつを出そうかな？」

圭一「まあ、面白かったけどな。けど、正解した人とかいるのかな

？」

黒狐「いたらマジで天才だと思うぞ。このストーリーがかかっているから難しくしたのだっ！」

圭一「クイズやらなくても分かっている人はたくさんいるんじゃないかなぁ？」

黒狐「ではまた次回っ！」

圭一「逃げるなっ！！！」

黒狐「冗談だよっ！」

圭一「それで今後の予定は？」

黒狐「そうだな・・・最近寝る前にちよこちよこ新たなひぐらしの小説を書いている。新たなオリジナルも面白いのが浮かんだが、設定で迷っている」

圭一「今やってるやつを進めろっ！」

黒狐「お前の罰ゲームじゃねーかー！」

圭一「わ、悪かったよ」

黒狐「俺は今週の休みは台風を入れて二日だっ！三連休の二日を大学につき込んでいるんだっ！！！」

圭一「うるせー」

黒狐「大声で叫んでみましたが、ひぐらしは続きます！」

圭一「おー！」

黒狐「オリジナルももっとアクセス数などがのびるものがないなー！」

圭一「そういえば、皆さんに言うことがあるんじゃないか？」

黒狐「アクセス数は9000を突破しましたっ！！！」

黒狐・圭一「ありがとうございますっ！！！」

黒狐「今度は一万でっ！」

圭一「そうですね」

黒狐「オリジナルの方ものびるように頑張りたいけど・・・のびない(泣)

圭一「がんばっ！」

黒狐「おう！今言いますが、今回から新たなコーナーを始めますっ！」

圭一「次から長くなりそうだな」

黒狐「そうでもない。だって一言だけだもん」

圭一「んっ？」

黒狐「新たなコーナーはこのトークキングKKの最後にっ！」

圭一「今じゃないのかよっ！」

黒狐「じゃあ、ここで閉めるぞっ！今回は圭一がどうぞっ！」

圭一「俺かよっ！え、えーっと今回はこの辺でっ！」

このトークキングSSは前原圭一と！」

黒狐「いつもの黒狐で」

黒狐・圭一「お送りしました！！！」

黒狐「感想・アドバイスなど待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれば嬉しいですよ！分かりにくいところがあれば報告してください！気軽にどうぞっ！！！！」

今回の黒狐の心の叫びっ！

黒狐「バトルスピリッツがやりたーいーっ！！！！」

第八話中編 事件の真相が明らかに!! 行き過ぎた思いと涙(前書き)

10000アクセス突破いたしましたっ!!!

皆様の応援のおかげでここまで来ることが出来ました。

本当にありがとうございますっ!

感謝感謝です。

今回の後書きはいつものではありません。

お楽しみにっ!

では本編をどうぞっ!!!

第八話中編 事件の真相が明らかに!! 行き過ぎた思いと涙

ステージの照明はスポットライトが当たっているだけであった。

「では田無美代子さん。もう一度お聞きします。あなたの夢は何ですか？」

「くすくす…限度額いっぱいのお賞金」

「承知いたしました。あなたが見事ドリームチャンスをクリアした暁には、限度額いっぱいのお賞金、二億円を差し上げましょう……でも、それって研究のためのお金じゃないですか」

「決まってるじゃない」

「へー、そんなに研究を成功させたいんだ」

「当たり前よ!!!」

「そして、その研究のために俺たちを殺そうとした。そこまでする必要があったんでしょうか？」

「さあね、何のことかしら。くすくすくす……」

「そうですか、しらを切るつもりですか。まあ、いいでしょう。あなたはいつまでその仮面をかぶり続けることが出来るのか楽しみですね」

「くすくすくす……」

「覚えていますか？あの日の出来事を」

「……」

「あの日は大変なことばかりでしたね。まず雛見沢宮林所立てこもり事件が起こって……」

あの夜、雛見沢宮林所立てこもり事件後、俺たちは怪我の手当のために入江診療所に来ていた。クラス全員の関係者が集まっていたので、入江診療所はたくさんの人であふれていた。

そして俺たち、部活メンバーは少し話し合ってから、帰ることになった。

本当はそこでおしまいのはずだった。

圭一は一つ気づいたことが一つあったのだ。

草むらにあった人影に……

その人影は梨花ちゃんと沙都子に付きまどっていたのだった。

そして、その人影が二人に近づこうとしていたとき、俺と魅音で二人を守るために戦ったのだ。そして、その人影を倒すことに成功したのだった。

そして、俺たちは梨花ちゃんの家へと向かった。

そして、梨花ちゃんの家に着いてから、圭一と魅音は家の中に入った。

「梨花ちゃん、こういうことなのか説明してくれよ！」

「……」

「話せば俺たちを巻き込んでしまうとも思っているのか」

「……」

梨花ちゃんは黙ったままであった。

「もう巻き込まれているよ。梨花ちゃんにかかが起こっている時点で俺たちは巻き込まれているんだ」

「そうだよ。私たちは部活メンバーでしょ。命が狙われているのなら、それこそ園崎家の出番だよ」

魅音は圭一の横に並んだ。

「……」

「梨花……」

沙都子は梨花の近くに寄った。

「どうして話してくれませんか？」

「そ、それは……ボクはみんなに迷惑をかけたくないのですよ」

「私たち、仲間じゃありませんのっ？ 今日だってみんなで乗り越えられたじゃないじゃありませんのっ！ 私たちが襲われた時点で梨花だけの問題じゃないですよっ」

「でも…きつと信じてもらえないですよ」

「いいや、どんな話でも梨花ちゃんが真実を話す限り信じる」

圭一は梨花の目の前に来た。

「私も信じる」

「私もですよ」

圭一、魅音、沙都子は梨花の前に立っていた。

「そして俺たちが一緒に戦うっ！！！」

「……っ！」

梨花ちゃんは一回目を閉じた。そして目を開けた。その瞳は未来を見るかのようにとても輝いた目であった。

「わかりました。では話しますのです。ボクが命を狙われていること。そして『雛見沢症候群』のこともっ！」

「雛見沢…症候群？」

このとき、俺は何のことだかはさっぱり分からなかった。

「この村には『雛見沢症候群』と呼ばれる風土病がありますのです」

「そんなこと聞いたこと無いね」

魅音は何かを考えながらつぶやいた。

「村人はみんな知りませんのです。その病は疑心暗鬼に囚われ極度の被害妄想を起こしてしまうのです。更にこの病気は雛見沢に住むすべての村人が感染していますのです」

「この村のみんながっ！」

「そうです、圭一。村を離れたりストレスと溜めて人を疑うことで発症すると考えられているのです」

「でも何でそんな危ない病気を発表しないんだ？」

「それは治療法が確率してないため村人の不安をあおるだけだから。けど、その奇病を解明し治療薬の開発も進められています。その研究施設が…入江診療所」

「なっ」「えっ」

「入江とそのスタッフは極秘に派遣された研究員なのです」

「派遣って、一体どこからなんだ？」

「東京とよばれる秘密の組織からなのです」

「……東京？」

「詳しくはわからないのですが、政府に関与できる強い力と莫大な資金を持っているようなのです」

そして、他にも梨花ちゃんは打ち明けてくれた。入江診療所。通称、入江機関は重い症状を押さえられる注射を開発した。富竹ジロウは東京からの連絡員。ダム計画を中止にするために大臣の孫を誘拐したのも彼らの仕業などということ語ってくれた。

「けど、その話と梨花ちゃんが殺されるってことがどう関係あるんだ？秘密を知ったから命を狙われているのか？」

「いいえ、『女王感染者』であるボクのそばを離れると病気を発症するらしいのです」

「『女王感染者？』」

「古手家は代々病原体の親分格を体内に受け継いできた家系。そして女王蜂のようにある種のフェロモンを発して雛見沢症候群の発症を防ぐらしいのです」

「じゃ、じゃあ梨花ちゃんが殺されたら、私たちはっ！」

魅音が言った。

「そう、私が死ねば、雛見沢二千人の全員が末期症状を起こし、村は生きるために殺し合う地獄になってしまう」

「「ーっ！！！」」

「『そんな危険を冒してまでも私を殺そうとしてくるのですっ！』部屋は沈黙に包まれた。

「こんな話、信じられなくて当然なのですよ……」

重い沈黙を切り開いたのは、絶望したような梨花の声であった。

「いや、俺は信じるっ！梨花ちゃんの話してくれたこと全部っ！！！」

「私も信じるよ」

「むしろ、村の秘密が解けてスッキリしましたわ」

「み、みんなっ」

カランカラン――

「ま、まずいですわよっ！ 敵が近くにいますわっ！……！」

「な、何っ！ど、どうする」

「まずは窓から外に逃げますわよっ！……！」

「みんな、絶対生きるぞっ！ 俺たちは絶対生きて帰るぞっ！……！」

そうして俺たちは窓から外にいき、山の中へと逃げていった。

「大変でしたよ。爆弾を解除したり、屋根で戦ったり、あなたに追いかえられたりね」

圭一はステージの机の周りをゆっくりと回りながら喋っていた。

「もう、昔話なんていいでしょ。早く問題にいきましょうよ……」

「そうですか。残念ですね。久しぶりだというのに」

嫌みを言う感じで田無美代子に言った。

「あなたと話すことなんて無いわ」

「しょうがないですね。ではあなたの希望通りクイズを出しましょう。しかし、あなたは答えることが出来るでしょうか？」

「答えられるわよ、くすくすくす……」

「ふっ」

圭一は笑みを浮かべた。

「問題っ……！」

高野一二三が断ったことは次の内どれ？

A、学会の権威に研究を発表すること B、知人の娘の引き取り
C、雛見沢症候群の研究の受け渡し D、雛見沢大災害を起こすこと

「なんなの？この問題」

「あれっ、答えられない感じ？」

圭一は挑発をかけた。

「くすくすくす……」

「どうしました？頭でもおかしくなっちゃいました」

「馬鹿にしてるの？簡単よこんな問題。私は祖父と一緒にいたのよっ！わからないはずが無いっ！……」

田無は立ち上がった。

「そう、あなたは高野一二三さんと一緒に生活を送っていた。なら、こんな問題簡単でしょう。ねえ、田無さん」

「当たり前よっ！」

「では答えをどうぞっ！あなたの……夢のためにっ……」

第八話中編 事件の真相が明らかに!! 行き過ぎた思いと涙(後書き)

黒狐「『ザ・クイズショウ』ひぐらしのなく頃に』が一万アクセス突破いたしました。この小説を読んでいただいている皆さん、本当にありがとうございますっ!!!」

部活メンバー「」「」「ありがとうございますっ!」「」「」「黒狐「よって今回は一万アクセス記念パーティーを開催いたしますっ!」

わーっ!!!

黒狐「今回は特別に部活メンバー全員呼んじやいました!!!」

圭一「そうだな」

レナ「なんか梨花ちゃんと沙都子が盛り上がってないみたいだけど……」

黒狐「二人ともどうかした?」

沙都子「どうかした? じゃありませんわよっ!!!」

梨花「私たちの出番すくなすぎない? 羽入は一話のメインになっているし」

羽入「梨花より多いのですっ!」

羽入は胸を張った。

カチッ

そして梨花ちゃんが激辛キムチを口いっぱいに頬張った。

羽入「あうあうあう辛いのでひゅ、からいのでひゅ!!!」

黒狐「……そういう内容なんだから仕方ないじゃないか」

沙都子「これから出番ありますの? 今は回想しかでてませんわよ。

魅音さんも何か言ったらどうですか?」

魅音「お、おじさんは別にいいよ」

黒狐「それよりもそんな二人と読者に重大な発表がありますっ!!!」

梨花、沙都子「っ!」

黒狐「新たなひぐらしの小説『ひぐらしのなく頃に 闇灯し』を投稿することを決定しましたっ！！！！」

部活メンバー「「「「「「おーっ！！！！」「」「」「」

梨花「もちろん出番はあるのよね」

黒狐「あるよ」

梨花「私がメインなのよね？」

黒狐「違うよ」

梨花「なんでよっ」

黒狐「前にも言ったことはあると思うが、オリジナル主人公がメインのやつ。確かなのは梨花ちゃんと沙都子の出番が増えることは間違いないかな」

沙都子「断言してないところが何か怪しいですの」

黒狐「今、段階作っている部分は間違いなく多い」

魅音「私もあるの？」

黒狐「うん。原作と同じ感じとを考えてもらった方がいいよ。みんなに出番があることは間違いないから。でも羽入は今の所無いな」

羽入「あうっ！」

梨花「まあ、そういうポジションだからね」

羽入「あうあうあう！！！！」

レナ「羽入ちゃんかぁいいよ、おっ持ち帰りiiiiiiii！！！！」

黒狐「……今回は圭一と詩音がメインの話だからさ」

圭一「スルーしたな……」

詩音「そういえば黒狐さんの小説はなかなか評価されませんね。今の所一人だけでしたっけ？」

黒狐「くっ！！！！」

詩音「最初に飛ばしすぎて貯金が全てなくなって焦ってませんでしたっけ？」

黒狐「ぐはっ！！！！！！」

魅音「詩音、なに起こってるの？」

詩音「別にっ！」

黒狐「魅音、気にしたら駄目だ。さっきの話で起こってやがるだけだから」

魅音「さっきの話」

黒狐「ああ、とりあえず次に進もう」

レナ「その新しい小説はいつから投稿するのかな、かな？」

黒狐「このパーティーが終わったら」

部活メンバー「」「」「えっ！」「」「」

黒狐「一万アクセスを超えたら投稿しようと考えてたからさ。この小説を作ったのは圭一からの罰ゲームだろ」

圭一「罰ゲームとかいうんじゃないっ」

黒狐「まあ、面白くかけたからどっちでもいいんだけどね」

羽入「ボクがメインの小説をつくるのですよっ！」

黒狐「きつと羽入は最後らへんに活躍すると思うよ」

羽入「本当なのですか？」

黒狐「未定だけどねwww」

羽入「ああああうっ！」

黒狐「これからは両方とも小説をよろしくお願いしますっ！『ザ・クイズショウ』ひぐらしがなく頃に』の方はクライマックスになりました。今後も本編だけでなく番外編も書いていこうと思います。他のアニメともコラボさせるので時々チェックしてみてください。更新されているかもしれないよ。ツイッターとかでもつぶやくのでそちらの方もチェックよろしくっ」

圭一「これからは貯金とか作っていくのか？」

黒狐「行くつもりだけど…多分すぐになくなると思う」

圭一「今回と一緒にっ」

黒狐「無理だったら授業中にでも書くさ」

圭一「授業受けるよっ！」

黒狐「圭一、一つ言っておくことがあったんだけど」

圭一「んっ？」

黒狐「今までやってた『トーキングSS』なんだけど…大幅に変更するかもしれない」

圭一「えっ」

黒狐「今まではみんなが余り出てきてない小説だったから二人でやってたけど、これからはみんな出てくるからな。ゲストを呼ぶ形や、圭一を毎回毎回ひぐらしのキャラと入れ替えるか」

圭一「ゲストを呼ぶべきだな」

黒狐「タイトルも変更する予定かも」

圭一「なんかフラグでも立った？」

レナ「私もでるのかな、かな？」

黒狐「ああ、多分」

圭一「未定ってことでいいのか？」

黒狐「ああwww」

圭一「笑ってんじゃねえー」

黒狐「と、とりあえずこの小説の投稿のあとに『ひぐらしのなく頃に 闇灯し編』を投稿したいと思います」

圭一「よろしく頼むぜっ!!!」

黒狐「さて、明日は一時間学校で書けるな」

圭一「授業中に書いてんじゃねえー」

黒狐「へいへい（今日の本編は授業中に書いたけどなwww）」

圭一「何か言ったか？」

黒狐「な、何でもねーよ。というわけでこれからも応援の方、よろしく願いますっ!!!」

部活メンバー「」「」「「よろしく願いますっ!!!」」「」

」

黒狐「感想・アドバイスなど待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれば嬉しいです。今回は是非お願いします！分かりにくいところがあれば報告してください。ツイッターの方もよろしく願います」

第八話後編 事件の真相が明らかに!! 行き過ぎた思いと涙

「問題っ!!!!」

高野一二三が断ったことは次の内どれ?

A、学会の権威に研究を発表すること B、知人の娘の引き取り
C、雛見沢症候群の研究の受け渡し D、雛見沢大災害を起こす
こと」

「なんなの? この問題」

「あれっ、答えられない感じ?」

圭一は挑発をかけた。

「くすくすくす……」

「どうしました? 頭でもおかしくなっちゃいました」

「馬鹿にしてるの? 簡単よこんな問題。私は祖父と一緒にいたのよ
っ! わからないはずが無いっ!!!!」

田無は立ち上がった。

「そう、あなたは高野一二三さんと一緒に生活を送っていた。なら、
こんな問題簡単でしょう。ねえ、田無さん」

「当たり前よっ!」

「では答えをどうぞっ! あなたの…夢のためにっ!!!!」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「くすくすくす……私が知ってるのは二つ。学会の権威に研究を発表  
することと知人の娘の引き取り。その二つ。そして、残ったのは  
雛見沢症候群の研究の受け渡しと雛見沢大災害を起こすこと」

「ということは雛見沢大災害を誰かに受け渡したか、あなたと同じことをしたのか……そのどちらかですね」

「おじいちゃんが雛見沢大災害の研究を受け渡すとは思えない。だから、答えはCよっ！」

「……残念っ！……！」

「なっ、そんなはず無いじゃないっ！！おじいちゃんが研究を受け渡すはずが無いっ！！！！！」

「なぜそう言い切れるんでしょう？」

「だって私はおじいちゃんをずっと見てきたからよっ！！！」

「例えば、信頼できる友人か弟子に渡したんじゃないでしょうか？」

「ありえないっ！！！」

「いやっ！実は受け渡したんですよ」

「そんなはず無いっ！！！」

「では、召喚っ！！！！！」

スタジオの後ろの方の扉が開いた。開くと同時にスモークが飛び出した。

そして、その白いスモークの中から男の人が出てきた。

圭一はその人の元に近づいていった。

「田無さん、この方をご存知でしょうか？」

「だ、だれ？」

「高野一二三さんの弟子である山本さんです」

「で、弟子？」

「はい、あなたが高野さんの家に行く前のことはご存じないでしょう？」

「……え、ええ」

「実は高野さんには昔、弟子と呼ばれる人がいました。それがここにいる山本さんという訳です。山本さん」

「はい」

「あなたは高野一二三さんの弟子であるあなたは高野一二三さんの研究を受け取られましたか？」

「はい」

「なっ!!!!」

「どういう風にして高野一二三さんの研究を受け取りました」

「病気で寝込んでいると聞いて、高野先生の家にお伺いしたときに受け取ってくれないかと言われました」

「そ、そんなわけない。私は知らないわ」

「それはそうだよ。君は学校に行っていたはずだったからね」

「そ、そんな」

「でも、研究の方は残念だったよ……」

「……」

「では、高野一二三先生の弟子の山本さんでした。ありがとうございました  
いました」

そして、山本はステージから出て行った。

「そう、答えはDでした。残念でしたね、田無さん」

「そ、そんなのあり得ない……」

「実はね、もう一つあなたの真実があるんですよ」

「えっ……」

「実はねえ、高野さんは研究のために、孤児院の人を何人も殺して  
るんですよ。小さな男の子も小さな女の子も……」

「そ、そんなはずないっ!!!! おじいちゃんがそんなことっ!!!!  
!!」

圭一は笑みを浮かべた。

「ふふっ」

「何がおかしいの!?!」

「実は、高野さんはそんなことしてませんよ」

「えっ!?!」

「嘘です」

「ま、前原くんねえー」

「そう、高野さんはそんなことしません。あなたと違ってね。この  
ことがわかれば簡単にわかる問題だったはずですよ」

「っ！！！！」

「高野一二三さんは孤児院にいるあなたを引き取った。そんなやさしい人が雛見沢大災害なんて起こすはずが無いっ！高野さんは学会の権威に研究を発表して、失敗した。でも心は折れていなかった。そして、高野さんは弟子の山本さんに研究を託したんです」

「そ、そんな……」

「しかし、あなたは山本さんよりも研究の成果を上げた。そして、雛見沢に研究施設を作り上げた。そして……」

バンっ——

スタジオの真ん中にあるテーブルを強く叩いた。

「すべてを壊した」

「そ、そんなはずないっ！！！」

「壊したんですよ、あなたは。もうこの研究は、迷宮入りになってしまいかもしれない。高野一二三さんの研究は幕を閉じたんですよ」

「そんなこと無いっ！！！」

「なんで雛見沢大災害なんて起こしたんですかっ！！！」

「なにが悪いの？何がいけないの？おじいちゃんの研究を成功させるためよっ！！！」

「高野さんはそんなこと望んでいなかったっ！事実、あなたがやったことを断っているんです。あなたの、祖父はそんなこと望んでいなかったんです。あなたを救った高野さんは実に優しく、熱心な人だった。だから、人を殺すなんて、できるわけじゃないんですかっ！あなたは知ってるでしょうっ！！！！高野さんの優しさを……」

「お、おじいちゃんの…やさしさ……」

私が孤児院の脱出に失敗したとき、電話一本だけで高野先生は私のいる施設を探し当て、私を助けに来てくれた。そして、わたしを引き取ってくれた。あんなにボロボロの私を……

そして、高野先生は私に笑顔でこういつてくれたのだ。

「もう何も心配する必要は無いんだよ。ここにはなにも怖いものは無いんだからね」

でも私は孤児院の恐怖が残っていた。

高野先生が私の頭をなでようとしているのに、殴られるような気分になったりするような恐怖で埋め尽くされていたのだ。

でも高野先生は私をいろいろなことで励ましたり、楽しませてくれた。

そのおかげで孤児院の恐怖は消えたのだった。

おじいちゃんは命の恩人だった。

感謝しきれないくらいに……

おじいちゃんは私に、笑顔をくれた。

私に優しくしてくれた。

おじいちゃんのおかげでもう一度生きることができたのだ。

「うう……ぐすつ、うううう……」

田無の目からぼろぼろと涙が流れ出した。

「わ、私はおじいちゃんの研究を無駄に、無駄にしたくなかったのよっ……!! だ、だから、だから……」

「だから、雛見沢大災害を起こした。祟りを起こすことでおじいちゃんが喜ぶとも思いましたか？ 起こして神になれましたか？」

「なれるわけじゃないっ！ なれない、なれなかった。ただ、利用されてただけだから……私は普通の人間で良かった。ただ生きてるだけで良かった。それなのに、それなのに……なんで……こんなことに……お父さんやお母さんやおじいちゃんと普通に暮らせるだけで良かった。みんながみんな幸せだったらよかった……どうして、どうして私はその世界から追い出されてしまったの？」

「……」

詩音はただ見ていただけだった。

「幸せを取り戻すために私たちを殺そうとした。あなたはそう思ってたんですか？ 私たちを殺せば幸せが手に入ると……」

「わかってた……うつすら気づいていた……どこかで道を間違えたこと、ぐすつ……でも、でもそれを認めたくなかった。ぐすつ、ううう……取り返しがつかない所まで来て……初めて後悔した……」

「あなたはオヤシロサマの祟りを起こしたともあの夜に言ってたね。しかし、それはただの人殺しだった。オヤシロサマの祟りは全て偶然が重なって出来たもの。すべての根源はひとつの病気です。それが全てを引き起こした。あなたはただ人を殺めて、それをオヤシロサマの祟りに見立てた。そのために、ダム建設の人を研究の材料にした。そしてあなたは小さな女の子の両親まで殺した。あなたは知ってるはずでしょう。一人ぼっちになるということがどんなに辛いのか。そして、終いには恋人まで殺した。あなたはそれで良かったんですか……」

「……」

「田無美代子さん……だれだって後悔はします。道を間違えます。失敗もします。けど、それが道を作ることになるのです。夢には犠牲が必要です。しかし、命を奪うこと、裁くことは私たちには許されない。私たちは神ではない。どんな天才、超能力者も神では無い。みんな、ひとりの人なんです。一つの命を与えられた人なんです。人殺しなんて、絶対に許されることじゃない。私たちにそんな権利なんてありません。命はお金よりも重い。ものすごく重たい。何より重たいんです。等価のものなんて無いんです。夢を叶えるために、足掻いて足掻いて手に入れる。そして失敗を活かすというところが、夢を叶えるためにとっても必要なことなんです。あなたは罪にまみれています。だから、これからは罪を償いながら生きてください」

「無理よ……私はもう生きてなんていけない。罪にまみれたの……だから

ら死ななきゃー」

「死んで何になるんですかっ！……！！！！田無さん……確かにあなたは罪にまみれている。でも、きっと償える。だから生きて、生きて罪を償ってください。人生をやり直してくださいよっ！！！！本当の田無美代子を取り戻しましょうよっ！罪を償って精一杯生きてください。それがあなたに与えられた……ぐすっ……使命だからっ」

「うう……うううう……」

圭一は目をスーツの袖でこすった。

そして前原は前のステージに向かった。

「さて、今回の解答者、田無美代子は残念ながら自ら夢を叶えることができませんでした。果たして次の解答者は自らの夢を手にする事が出来るのでしょうか？」

圭一は息を大きく吸い込んだ。

「では、次の解答者を紹介しましょう。当番組ディレクター、園崎詩音——」

「えっ……」

詩音はただ呆然と圭一を見ていた。

「実はですね、今回のザ・クイズショウは二時間スペシャルなんですよ。知らなかったでしょ？前に俺を嵌めた仕返しですよ」

詩音はまだ戸惑っていた。

「ではこのザ・クイズショウに園崎詩音が挑戦します。果たして園崎詩音は自らの夢を実現させる事が出来るのか？」

そして前原はカメラに指を差した。

「あなたの夢を、叶えます」

第八話後編 事件の真相が明らかに!!! 行き過ぎた思いと涙（後書き）

黒狐「黒狐と!」

圭一「前原圭一の!」

黒狐・圭一「トーキングKK!!!」

黒狐「前回言ってたことなんですが、新しいラジオ小説番組をやっても良かったのですが、残りが数少なくなっているのに新しいものをやるっておかしくないって考えたので、この小説が終わってから『ひぐらしのなく頃に 闇灯し編』でやることにしました」

圭一「ちなみに俺は出てるんですか?」

黒狐「秘密です」

圭一「ケチー」

黒狐「出さないよ?」

圭一「・・・すまん」

黒狐「もう決まってることですから内容は変わりませんよ」

圭一「この小説はあと何話なんだ?」

黒狐「それも秘密です」

圭一「でももう二話くらいじゃない」

黒狐「とりあえず、終わりに近づいてきたのは確かです」

圭一「まさかでしたね。最後の展開は」

黒狐「でしょっ! 田無美代子で終わりだと考えてた人多いんじゃないですか? できればこの一週間にどんどん更新していきたいと思ってます」

圭一「今、黒狐は三つの小説を同時で作ってるから大変だろ?」

黒狐「ああ、まあ、俺がやりたかったことだからな」

圭一「やりたいこと多いなー。バトスピの対戦動画を作りたいとか、ホームページを作りたいとか」

黒狐「大学生になってから今までに出来なかったことをやろうって考えてたからな」



圭一「まあ、やりたいことがやれるのはいいですね」

黒狐「そうだな」

圭一「他のほうの小説はどんな感じなんだ？」

黒狐「この小説は相変わらずすぐ書いて、すぐ更新」

圭一「おいっ！」

黒狐「もうひとつのひぐらし方は順調っ！！だからこの小説を早めに完成させて、向こうも後書きを盛り上げたいかな？ちなみに水曜くらいには投稿できるかな？」

圭一「まあ、がんばってるな」

黒狐「オリジナルの方はかけない状態が続いているな。今から一様は書く予定。今日、帰りが遅かったのが辛いな。ツイッターを見てくれれば何時に帰ったかわかりますよー」

圭一「フォローされようとするなよっ」

黒狐「それもあるんだけど、続きはwebでっ！！！！的なことやりとくやるじゃん」

圭一「ははは・・・」

黒狐「みんなはこの後書きのことどう思ってるだろうな・・・」

圭一「募集かけたらいいじゃないですか？」

黒狐「辞めた方がいいよっ！！とかいう意見来たら怖いじゃん」

圭一「思ってるのかよっ！！！！」

黒狐「俺は楽しんでるんだからいいけどさ・・・そんなことより気づけばこの小説のお気に入り登録が11件になりました。11人の皆様、本当にありがとうございますっ！！！！これからも黒狐をよろしくお願いします」圭一「感想も一人の人から満点もらってるしな」

黒狐「あれは感動したな」

圭一「黒狐のテンションがハンパなかったしな」

黒狐「さっきもこのラジオをやる前に福山雅治のスーパードライの新しいCM見てテンションが上がったもん」

圭一「夜なのにね」

黒狐「その時が自由のときだからね。だから前に上がうるさかった

ことに怒りを感じてたんだよ。今も若干うるさいけどね。ちなみに国家権力は使ってないよ。なんとか寝れるからね」

圭一「あれっ？コーナーとか今回はやらないんですか？おすすめを紹介するやつ」

黒狐「・・・あつ」

圭一「あつ、じゃねーよっ！」

黒狐「そうですねー」

圭一「ネタ切れか？」

黒狐「黒狐の今週のおすすめ!!!!  
ジャジャーン」

黒狐「このコーナーでは、私のおすすめのアニメや漫画や小説、出来事など皆さんに紹介しようというコーナーです!!!!」

圭一「あるのかよっ」

黒狐「すぐに思いつくぜっ！」

圭一「では今回のおすすめは？」

黒狐「黒狐の今週のおすすめは……『ゴッドイーター』です！」

圭一「昔、ゲームでありましたね」

黒狐「実はゴッドイーター2が発売決定されたそうです」

圭一「へー」

黒狐「画面がハンパないっ!!!そして新たなアラガミ。ストーリーが気になるっ!!!やばいやばい、興奮してきたーっ!!!うお  
おおおおおおお」

圭一「おいっ、黒狐……………」

黒狐「やりてーえー」

圭一「黒狐のテンションがおかしいのでこちら辺でっ!!!!  
このトーキングSSは前原圭一と！」

黒狐「テンションがやばいの黒狐で」

黒狐・圭一「お送りしました!!!!」

黒狐「感想・アドバイスなど待ってます！誤字・脱字などがあれば

報告してくれば嬉しいです！分かりにくいところがあれば報告してください！気軽にどうぞっ！！！！

今回の黒狐の心の叫びっ！

黒狐「バトスピのショップバトルで優勝してきたぞっー！！！！」

圭一「・・・ゴットイーターやりてーとか叫ぶと思った」

## 第九話前編 ついに最終回!?! 悲しき思いと失ったもの

詩音はステージに上がり、圭一に近づいた。

「圭ちゃん、どういうつもり?」

「言ったじゃないか。仕返しだって」

「ふざけないで」

「詩音はある真実を知らなければいけない」

「…何を隠しているの? 圭ちゃん」

「詩音、もうすぐ始めるぜ」

圭一はステージの前に向かった。

「……」

そしてCMが開けた。

「さて、今回のザ・クイズショウは二時間ぶつ通しの生放送でお届けします。二人目の解答者は、当番組のディレクター、園崎詩音さんです」

詩音は解答者席の横に立っていた。

「詩音、覚えているか? 前回の放送で俺を嵌めたこと」

「……ええ、覚えてるよ」

「だから、今回は私が仕返ししちゃいましたー」

「私は夢を放送中に叶えることは出来なかった。詩音はクリア出来るんですかね?」

「ええ、できるよ」

「おお、強気だなー」

「早く始めちゃおうよ、圭ちゃん。視聴者の皆さんも首を長くして待ってますよ」

「じゃあ、始めましょうか。その前に…ルールの方は大丈夫ですよ」

ね？」

「ええ」

「今回はいつもとは違い、問題は全て詩音に関係すること、いいです  
ね？」

「ええ」

「ではお尋ねします。あなたの夢はなんですか？」

「……ありません。ってかもう叶ったから」

「えっ、叶ったんですか」

「雛見沢大災害の真相を暴く、それが私の夢。だから叶ったの」

「本当にそれが夢なんでしょうか？」

「どういう意味？」

「あなたの夢は別にある」

「…じゃあ、その夢って何？」

「んー、じゃあこうしましょう。あなたの夢はドリームチャンスま  
でその夢は秘密という訳で」

「ふざけー」

「その方が面白いじゃないですか？ディレクターもそう思いませ  
んか？ねー、園崎ディレクター」

「そ、そうですね」

「では、園崎詩音が自らの本当の夢を賭けて、このザ・クイズシ  
ョウに挑みます。イツツ、シヨウタイム」

圭一は両手を高く上に上げた。

「それでは第一問。

雛見沢宮林所立てこもり事件で、園崎魅音が鉈で叩かれた部分  
はどこ？

A、頭 B、足 C、肩 D、お腹

「Aの頭」

「正解です」

圭一はいつもとは違いすらっと正解だということを言った。

「では第二問。」

『ザ・クイズショウ』を考えたのは人は次のうち誰？

A、園崎詩音 B、瀬川希 C、前原圭一 D、大学の先輩」

「Dの大学の先輩」

「正解です。そうなんだ、詩音さんが作った訳じゃないんですね」

「ええ、私の先輩が考えだしたの、これで罪を暴くシステムを作り出した人。先輩の才能はすごかった」

「それであなたはその『ザ・クイズショウ』を使用した訳だ」

「ええ」

「そして、俺の失われた記憶の再生に成功した。そして、雛見沢大災害の真相を暴くことが出来た」

「ええ」

「では、第四問！

雛見沢症候群とはどんなことになりやすいのか？

A、風邪 B、疑心暗鬼 C、アレルギー D、力持ち」

「Bの疑心暗鬼」

「正解です！詩音さんはさっき知ったんですよ？」

「ええ、あなたはすべての黒幕しか教えくれなかったからですね」

「だから、あなたに仕返しすることができないからです」

「どちらにしても、真実を知ることが出来てよかったですから」

「詩音さん…まだあなたは全ての真実を知らない」

「だから私はここにいないんじゃないですか」

「……詩音さんって雛見沢の横の、興宮市に済んでたじゃないですか？」

「…そうだね」

「なので雛見沢大災害の被害にならなかった」

「興宮に被害は無いからね」

「詩音さんはみんながいなくなったときってどんな感じでした？」

「寂しいに決まってるじゃないっ!!!!」

「では、普段は学校が違うじゃないですか」

「……」

「そのときとかは詩音さんは、寂しくなかったんでしょか？」

「そんなこと無いよ」

「あれっ、寂しかったんですか？」

「…ええ」

「おかしーな」

圭一はわざとらしく首をかしげていた。

「何が」

「今の発言ですよ」

「だから、けーー」

「第五問っ！」

あなたが雛見沢で使っていた名前は次の内どれ？

A、竜宮レナ B、知恵留美子 C、園崎魅音 D、園崎茜

「っ！」

「なぜ、あなたは興宮にいた詩音さんの気持ちを知ってるのでしょうか？おかしーですよ。この問題の解答には詩音という選択肢は無い。どういうことでしょう？」

「簡単なことだよっ！私が園崎魅音だから。答えはCの園崎魅音」

「正解ですっ！でも、なぜ詩音の代わりをしていたんですか？」

「……みんなに心配をかけたくなかったから」

魅音は俯いた。

魅音は入江診療所で傷の手当てを受けていた。

そこに興宮から詩音がやってきた。

「お、お姉。大丈夫っ!!!」

「う、うん。こんなの平気……」

魅音は立ち上がろうとしたが、倒れそうになった。

入江は魅音を支えた。

「大丈夫ですか？無理はなさらないでください」

「でも、みんなに心配かけられないよ……」

「うーん……じゃあ、私と入れ替わりましょう。そうしたらみんなに心配かけなくて済むし、お姉も休める」

「で、でも」

「お姉は早く元気になることを考えて。それがお姉がしなければいけないことです」

「……わかった。じゃあ、任せたよ、詩音」

「任せてください」

詩音は軽く魅音に向けてウィンクをした。

「詩音は……詩音は……」

「しょうがないですよ、誰にもそんなことは予想できなかった。誰も責めることができません」

「でもっ！詩音が……」

「他のみんなはどうなったんでしょね？」

「みんなは……」

「では、第六問っ！」



第九話前編 ついに最終回！？悲しき思いと失ったもの（後書き）

黒狐「黒狐と！」

圭一「前原圭一の！」

黒狐・圭一「トーキングKK！！！」

黒狐「さて、もうすぐこのラジオも終わりですね。果たしてあと何回なのか！！！」

圭一「ずーっとふたりでやってきたこのラジオも終わりですね」

黒狐「長かったですね。期間と文章がWWW」

圭一「黒狐がやるたびにのってるからな」

黒狐「気づけば30分以上だもん」

圭一「まあ、楽しいからいいけどな」

黒狐「終わるタイミングを逃しちゃったよWWW」

圭一「ははは…」

黒狐「いつまでもこんなことで来たらいいな」

圭一「そうだな」

黒狐「これからは最後まで雑談みたいな感じにしていきましょう。途中から僕は壊れてたんだろうな」

圭一「残り少ないですが頑張りますようっ！！！」

黒狐「そうだな」

圭一「最近の小説の進み具合はどうですか？」

黒狐「土日のどちらかにずっと書いてる。最近は全身筋肉痛」

圭一「どうしたんだ」

黒狐「大学にいくために急な坂を登るのがきついんだよ」

圭一「それは大変だな」

黒狐「そして、今眠気がかなり襲ってきてる」

圭一「おいっ！違う小説も更新しないと行けないんだろ」

黒狐「ただいま20分経過」

圭一「また何話すか迷ってたんですか？」

黒狐「テレビ見ながらやってるから進まない」

圭一「おいっ！！！！」

黒狐「ちなみに今、夜なのにコーヒー飲んでます」

圭一「今夜は寝られねーな」

黒狐「さて、今夜は何時まで起きてやろうかな」

圭一「早く寝ろっ！それか小説かけっ！」

黒狐「オリジナルも進めねーとヤバいっ！お気に入りの数が減ってきた（泣）」

圭一「まあ、頑張れっ！」

黒狐「小説も書かないといけないし、バトスピのデッキ調整もしないといけないので、今回はこちら辺でっ！」

このトーキングKKは眠い黒狐と！

圭一「前原圭一で」

黒狐・圭一「お送りしました！」

黒狐「感想・アドバイスなど待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれば嬉しいです。今回は是非お願いします！ご協力お願いします。分かりにくいところがあれば報告してください。気軽にどうぞっ！」

今回の黒狐の心の叫びっ！

黒狐「これからもよろーろーしーくーっ！！！！」

圭一「頑張って書こうっ！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1606u/>

---

ザ・クイズショウ～ひぐらしのなく頃に～

2011年10月10日03時16分発行